

博士論文

論文題目 対人場面におけるコントロール方略
についての実証的研究

氏 名 澤海 崇文

内容

第 I 部: 問題と目的	7
1.1. コントロール研究の源泉	8
1.2. 1980 年代以降のコントロール研究	9
1.2.1. コントロールの二分法の登場	9
1.2.2. コントロールの分類法	11
1.2.3. コントロールの優位性	15
1.2.4. コントロールとウェルビーイングとの関連	19
1.3. 先行研究で未解決の点	21
1.4. 対人場面における問題の定義	23
1.5. 問題の生じている対人場面の分類	25
1.6. 本論文で採用するコントロールの分類法	26
1.6.1. Yamaguchi (2001) を土台とした一次的コントロールの分類法	26
1.6.2. 二次的コントロールの分類法	30
1.6.3. 本論文で採用する分類法と他の分類法との比較	30
1.7. コントロール“方略”	32
1.8. 本論文の目的	34
第 II 部: コントロール方略の分類法の信頼性と妥当性の実証的検討	35
2.1. 研究 1: 質的データによる信頼性の実証	35

2.1.1. 目的	35
2.1.2. 方法	36
2.1.3. 結果: 記述統計量	38
2.1.4. 結果: 自由記述コーディング	41
2.1.5. 考察	42
2.2. 研究 2: 個人特性・状況要因との関連に基づく 妥当性の実証	42
2.2.1. 目的	42
2.2.2. 方法	45
2.2.3. 結果: 記述統計量	48
2.2.4. 結果分析 1: 個人特性	54
2.2.5. 結果分析 2: 状況要因	55
2.2.6. 考察	58
2.3. 第Ⅱ部まとめ	60

第Ⅲ部: コントロール方略の理想的選択と現実的

選択の分離 60

3.1. 研究 3: 各コントロール方略の特徴分析	60
3.1.1. 目的	60
3.1.2. 方法	61
3.1.3. 結果: 記述統計量	63
3.1.4. 結果: 各一次的コントロール方略の特徴分析	71
3.1.5. 考察	74

3.2. 研究 4: 理想的選択度合いと現実的選択度合いの測定	76
3.2.1. 目的	76
3.2.2. 方法	77
3.2.3. 結果: 記述統計量	79
3.2.4. 結果: 理想的選択度合いと現実的選択度合いのシ ナリオごとの比較	81
3.2.5. 考察	83
3.3. 第Ⅲ部まとめ	85

第Ⅳ部: 理想的選択度合いと現実的選択度合いの ギャップに関する 3 分類モデルとその分離メカニ ズムの検討	86
---	-----------

4.1. 研究 5: 個人特性・状況要因との関連	88
4.1.1. 目的	88
4.1.2. 方法	89
4.1.3. 結果: 記述統計量	91
4.1.4. 結果: 操作チェック	93
4.1.5. 結果: 3 分類モデルの検証	93
4.1.6. 結果: “理想—現実” ギャップの解明	99
4.1.7. 考察	100
4.2. 研究 6: 個人特性・状況要因・文化との関連	102
4.2.1. 目的	102

4.2.2. 方法	104
4.2.3. 結果: 記述統計量	106
4.2.4. 結果: 3 分類モデルの検証	114
4.2.5. 結果: “理想—現実” ギャップの解明	125
4.2.6. 考察	130
第 V 部: 総合考察 _____	131
5.1. 各研究のまとめ	131
5.2. 本論文のインプリケーション	133
5.2.1. 本分類法について	133
5.2.2. 3 分類モデルについて	136
5.2.3. コントロールの優位性について	139
5.3. 今後の展望	141
引用文献 _____	145
謝辞 _____	158
付録 _____	160
付録 1: 研究 1 で用いたシナリオ	161
付録 2: 研究 1 で用いたコーディングマニュアル	164
付録 3: 研究 2 で用いたシナリオと各コントロール方略	170

付録 4: 研究 3 で用いたシナリオと各コントロール方略	180
付録 5: 研究 4 と研究 6 で用いたシナリオと各コントロール方略	188
付録 6: 研究 5 で用いたシナリオと各コントロール方略	196

対人場面におけるコントロール方略 についての実証的研究

第 I 部：問題と目的

以下のような状況を経験することはないだろうか。アパートや大学寮での生活をしている時に、隣人が夜遅くまで熱心にギターや歌の練習をしており、その音でなかなか夜に寝付けなくなってしまうという状況である。このような状況に対し、様々な解決法が考えられる。例えば、騒音を起こしている当人に直接的に注意して、深夜での練習をやめてもらうというやり方もあれば、自分が耳栓をするなどして我慢するというやり方もあり得る。前者のような解決法は一次的コントロール (primary control) と呼ばれ、後者のような解決法は二次的コントロール (secondary control) と呼ばれる (Rothbaum, Weisz, & Snyder, 1982; Weisz, Rothbaum, & Blackburn, 1984a)。この 2 つはコントロールという概念に属し、コントロールというのは自分の意図したように状況を変えていくこと (causing an intended event) を指す (Weisz et al., 1984a, p. 958)。本論文では、上記のような対人場面における問題解決方略をコントロール方略という概念を用いて説明し、コントロール方略について実証的な研究を積み重ね、先行研究で見られる 2 つの対立する理論に対する解釈を提案していくことを目指す。

対人場面における問題というのは上記の例のように、当人以外に誰か他者が存在する場面での問題を指す。本論文では、対人場面における問題を“対人場面で生じ、当人が変えたいと思っている事柄で容易に解決できないが、物理的あるいは対人的な環境や自己の側面を変化させることで解決可能なもの”と定義する。

以下では、第 I 部でコントロール方略に関連する先行研究を概観する。第 II 部では、上記のような従来のコントロール方略の二分法に対する挑戦として、コントロール方略の新しい分類法を提案し、その分類法の信頼性と妥当性を示す。第 III 部で

は、その新しい分類法に則り、コントロール方略の選択を理想的な選択と現実的な選択に分割する必要性を示す。第IV部では、その分割に則り、理想と現実のギャップに着目した3分類モデルの提案を行い、さらにそのようなギャップが発生および消失する原因について実証的に示す。最後に第V部では、総合考察として本論文のまとめと今後の展望を記述する。

1.1. コントロール研究の源泉

コントロールに関する研究は1960年代にまで遡る。1つ目に、自分に関する出来事をコントロールするものがどこにあるかという統制の所在 (locus of control) を2つに分けた研究が有名であり (Rotter, 1966)、発表以後には多くの研究者によって、様々な実証的検討がなされてきた (e.g., Levenson, 1981)。具体的には、統制の所在を内的なもの (internal) と外的なもの (external) に分け、前者は自分に関する出来事は自己の能力や努力によって決定されるという信念を指し、後者は自分に関する出来事は運や課題の難易度によって決定されるという信念を指す。このような信念の違いが、人々の幸福感や抑うつ・不安と結びつくということが示されてきた (Christopher, Saliba, & Deadmarsh, 2009; Mo, Shen, & Zhou, 2009; Thiruchelvi & Supriya, 2012; レビューとして Cheng, Cheung, Chio, & Chan, 2013)。

別の側面からのアプローチとして、学習性無力感という概念が挙げられる (Seligman, 1975)。人が一生懸命努力したとしても成果が得られずに失敗ばかりが続くと、その人にとってストレス事態やコントロール不可能な現象が続くことになり、無力感を学習してしまうという。そして、そのような困難な環境から抜け出そうとする努力さえも行わなくなってしまうという。特にこのような事態が (a) 普遍的 (b) 永続的 (c) 内的であると認知されると、無力感が学習されやすいという。つまり、負の出来事が (a) 特定の場合だけでなくあらゆる場合においても起こり (b) 一時的ではなくこれからも永く続き (c) 外的な事柄ではなく自分自身に関連するという認識がなされると、無力感を覚えてしまうのである。このような学習性

無力感を身に付けてしまうことが、幸福感の阻害要因だということも示されてきた（レビューとして塚原, 2008）。

ここまで述べてきた 2 つの研究の流れを踏まえると、幸福感の維持もしくは達成のためには、主観的なコントロール感（sense of control または perceived control）を保持するということが重要であると考えられる（Sastry & Ross, 1998; Thompson, 1981）¹。つまり、統制の所在が内的であること（自分に関する出来事は、自己の能力や努力でコントロールできると信じること）および無力感を学習しないこと（ストレス事態にいたとしても、自分の力でコントロールしてそこを抜け出すこと）はコントロール感と関連しているといえ、主観的に高いコントロール感を持つことは、精神的および心理的な健康を保つために重要であると考えられてきた。

1.2. 1980 年代以降のコントロール研究

上記のような統制の所在および学習性無力感に関する理論、ひいてはコントロール感に関する理論が提案されてから、1980 年代以降にコントロールに関して様々な研究知見が積み重ねられてきた。それからの研究動向に最も大きな影響を与えたといっても過言ではない論文が Rothbaum et al. (1982) であり、コントロールを一次的コントロールと二次的コントロールという 2 つに概念的に切り分けたのである。

1.2.1. コントロールの二分法の登場

統制の所在や学習性無力感に関する先行研究の前提に基づくと、統制の所在が外的である人や無力感を学習してしまった人は、低いコントロール感を示すはずである。しかし、Rothbaum et al. (1982) はコントロールの二分法を提案し、外的な統制の所在や学習性無力感を持つように見える人であったとしても、主観的にはコントロール感を失わずにすることができ、幸福感に結びついたり、抑うつや不安を回避できたりするという可能性を指摘した。

¹ ただし Heidemeier & Göritz (2013) は、失業者においてはコントロール感が人生満足感と負に結びつくという逆の結果も示している。

コントロールとは、自分の意図したように状況を変えていくことを指す (Weisz et al., 1984a)。ここでの状況とは、自己をも含む世界 (外界) のことであり、それを変えるためには自己または自己以外の要素を変えることが考えられる (図 1 参照)。これを踏まえると、状況変化の手法として (a) 外界変化 (b) 自己変化の 2 つに分類される。このような考えと同様に、Rothbaum et al. (1982) はコントロールの二分法を提案した。一次的コントロールとは、自己の要求に合うように外界を変化させることを指す。他方、二次的コントロールとは、自己を変化させて外界に合わせることを指す。いずれの手法を用いても、自己のニーズと現実世界とのフィットを上昇させることができるため、適応的な手法であると考えられる。したがって、統制の所在が外的であったり学習性無力感が高かったりしても、それは一次的コントロールの傾向や志向性が低いただけであり、代わりに二次的コントロールに頼ることによって、幸福感を維持できたり、心理的な不適応状態を避けられたりするという。

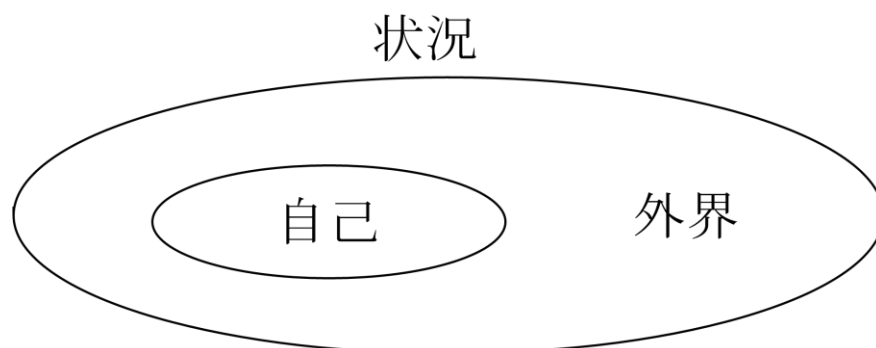


図 1: 自己と外界により構成される状況

この 1982 年の論文発表以後、この二分法に基づいて多くの研究発表がなされてきた。以下では、このコントロールの二分法に基づいて行われた先行研究を 3 つの流れにまとめて紹介する。(a) コントロールの分類法 (b) コントロールの優位性 (c) コントロールとウェルビーイングとの関連という三分野に分けて記述していく。

1.2.2. コントロールの分類法

コントロールの分類法についての研究は上記の二分法を細分化したものが多い。多くは理論的な論文であり、分類法の妥当性を実証的に検討したものは少ない。

二分法を提案した元の論文においても各コントロールが (a) 予測的 (predictive) (b) 代理的 (vicarious) (c) 架空的 (illusory) (d) 解釈的 (interpretive) の4つに分類されている (Rothbaum et al., 1982)。予測的一次的コントロールというのは、外界を予測しつつ変化させることを指し、スポーツやゲームやチェスにおいて、相手の動きを読んで試合で勝利することなどを指す。代理的一次的コントロールというのは、自分ではなく誰か他の人に頼って外界を変化させることを指し、当人よりも権力や地位のある者がこの代理人になりやすく、例えば日本文化における甘えがこのカテゴリにあたる (土居, 1971; Yamaguchi & Ariizumi, 2006)。架空的一次的コントロールというのは、運などによって決定されるコントロール不可能な外界の事象を自分で変化させようとする試みのことを指し、例えば験を担ぐ行動がこのカテゴリにあたる。解釈的一次的コントロールというのは、外界で生じている問題に対して、理解を深めたりスキルを習熟したりすることを指し、例えば学業場面での問題解決がこのカテゴリにあたる。上記の4つの試みはすべて、外界に対してアプローチするものであるため、二次的コントロールとは区別される。

予測的二次的コントロールというのは、これから起こると思われる嫌な出来事をあらかじめ予測しておき、いざそのような出来事が起こったときの精神的なダメージを軽減するということを指す。あらかじめ悲観的に考えておき、万一起こるかもしれない悪い出来事に対して防衛線を張っておくという防衛的悲観主義 (defensive pessimism) はこのカテゴリに属する (Norem & Cantor, 1986)。代理的二次的コントロールというのは、自分が届かないような権力や地位のある者と連帯を感じることで、自己効力感を得ようとする試みのことを指す。この例としては、成功した他者と自分を同一視するという栄光浴が挙げられる (Cialdini, Borden, Thorne, Walker, Freeman, & Sloan, 1976)。架空的二次的コントロールというのは

は、運などによって決定されるようなコントロール不可能な外界の事象に対して、それを自分でコントロールしているかのように思い込み（実際にはそうでないにも関わらず）、それによって自己効力感を得ようとする試みのことを指し、例えばコントロール幻想 (illusion of control) がこのカテゴリにあたる (Langer, 1975; Yamaguchi, Gelfand, Ohashi, & Zemba, 2005)。解釈的二次的コントロールというのは、現状に対して考え方を改めて何とか満足感を得ようとする試みのことを指し、出来事の再解釈やポジティブシンキングなどがこのカテゴリにあたる。上記の4つの試みはすべて外界に対してアプローチするものではなく、自分に対して働きかけるものであるため、一次的コントロールとは区別される。

このように、一次的コントロールと二次的コントロールをさらに4種に分けた分類法を Rothbaum et al. (1982) が提案したが、1982年の論文発表以降、ほとんど定着していない。これはなぜかという点、各カテゴリ間の境界線が概念的に不明瞭であり、同時に生起することが多いと思われるからである。実際に元の論文においても、各種の重複を認めている。ただし、一次的コントロールと二次的コントロールという上位カテゴリの二分法は、多くの研究者に採用されている。

一次的コントロールと二次的コントロールをさらに分類した研究は、他にも存在する。例えば、各コントロールを選択的なものと補償的なものに分けている研究が挙げられる (selective/compensatory primary/secondary control by Heckhausen, 2003)。目標追求や行動が選択的であるものが選択的一次的コントロールおよび選択的二次的コントロールであり、他方、目標追求が成功しなかった際に動機づけを維持するために実行されるのが補償的一次的コントロールおよび補償的二次的コントロールであり、失敗を補完しようとして行われる。

塚原 (2010) は、一次的コントロールを“既存の認知を作用させ、事態を変化させる認知的操作”、二次的コントロールを“自己の認知を調節し、事態を受容する認知的操作”と操作的に定義し (p. 188)、研究1にて累積 KJ 法の結果に基づき、前者を“解決・直接介入・帰属・分析思考”の4種、後者を“思考転換・大局視野”

の 2 種に分けた分類法を採用している。また、塚原は研究 2 にて確証的因子分析の結果に基づき、一次的コントロールを“解決志向・因果分析”の 2 種、二次的コントロールを“意味受容・思考調整”の 2 種に分けた分類法を採用している。

Heckhausen & Schulz (1995) は各コントロールを真実的・幻想的 (veridical-illusory) および機能的・機能不全的 (functional-dysfunctional) という直交する二軸を組み合わせた 4 つのカテゴリに分類している。真実的・幻想的という基準は、そのコントロールが客観的基準や外的基準から見てどの程度妥当で正確であるかという軸を指し、機能的・機能不全的という基準は、そのコントロールが長期的にみてどの程度一次的コントロールを促進するかという軸を指している。例えば、幻想的な二次的コントロールとして超自然的な力を信じることが挙げられ、それが正しい理由によって行われているのであり、適切な一次的コントロールを促進するのであれば、それは機能的なカテゴリに分類される。このような分類に対して Gould (1999) は、ある文化で真実的と捉えられることが、別の文化では幻想的と捉えられてしまうという根拠を基に批判している。その具体例として Peng (1993) の研究にあるように (Gould, 1999 より引用)、アメリカに移住した中国人を対象としたデータでは、アメリカ人に比べて中国人は一次的コントロール志向性が低く、二次的コントロール志向性が高いという結果を示している。この結果に対して Gould は、道教の教えの 1 つ、宇宙や世界との調和を求めること (つまり二次的コントロール) が中国人にとって妥当であるのだが、アメリカ人にとってはそれが幻想的と捉えられてしまうという解釈を与えている。Gould の批判はそれ以外にも多岐にわたっており、それらに対して Heckhausen & Schulz (1999) が反駁の論文を発表しているが、この分類法について擁護するような記述は特に書かれていない。

一次的コントロールと二次的コントロールを同時に細分化したものではなく、片方を細分化した分類法も提案されている。例えば Yamaguchi (2001) は一次的コントロールを、その行為を行う者と行為自体の直接性という軸に基づいて 4 種に分

ける分類法を理論的に導出している。この分類法は本論文で基軸となるアイデアなので、詳しくは後述する。

二次的コントロールに関しては、一部を抽出して新しいカテゴリを提案した研究が見受けられる。例えば、Morling & Fiske (1999) は調和コントロール (harmony control) という新しい種類を提案しており、“People adjust to things as they are, accepting what their roles, their relationships with others, luck, fate, or God will bring, without acting directly on the environment (p. 382)” と定義している。つまり、二次的コントロールのうち、外界を受け入れるという側面だけを取り出して調和コントロールと定義し、それを測定する尺度の信頼性と妥当性を示している。

Morling & Evered (2006) は、二次的コントロールをコントロール焦点型と適合焦点型に二分している (control-focused secondary control と fit-focused secondary control)。前者のタイプでは、従来の効力感や能力に代わるものとして二次的コントロールが捉えられており、あくまでも一次的コントロールの補佐的な役割を果たすものと位置づけられている。それに対して後者のタイプでは、環境に適応するための方略として二次的コントロールが捉えられており、外界や環境に適応すること自体が目標であるという。適合焦点型二次的コントロールは、上述の Morling & Fiske (1999) の調和コントロールと同一の概念であると考えられる。このような二分法に対して Skinner (2007) は、適合焦点型二次的コントロールはコントロールに分類されるべきものではなく、コントロール研究とは別の枠組み、例えば調節 (accommodation) の研究分野で検討がなされるべきだと批判している。Skinner の批判はそれ以外にも挙げられており、それらに対して Morling & Evered (2007) が反駁の論文を発表しており、適合焦点型二次的コントロールのカテゴリや定義を採用してコントロールの枠組みで行われた研究は既に多く、今から調節というラベルに変更するのは困難であると反論している。その後にも Wang, Rothbaum, & Weisz (2010) は、Morling & Evered (2006) の二次的コントロール

の二分法が概念的に明瞭でなく、一次的コントロールと二次的コントロールを明確に分割できていないという批判を挙げている。

一次的コントロールと二次的コントロールのどちらにも属さない新しいカテゴリとして、Kurman, Hui, & Dan (2012) は自己改善を通じたコントロール (control via self-improvement) を提案しており、これは “applying a strategy of actual self-improvement that leads to genuine changes in the external situation.” と定義されている (p. 16)。このコントロールでは、一次的コントロールのターゲットである外界を上位のターゲットとし、二次的コントロールのターゲットである自己を下位のターゲットとする。つまり、自己改善という二次的コントロールを通じ、最終的には外界変化という一次的コントロールに結びつくという複数のプロセスを想定している。Kurman et al.は、イスラエルと香港の大学生に、提示されたシナリオでの可能な行動を自由記述してもらい、それをコーディングした。それに基づき、自己改善を通じたコントロールというカテゴリが十分な割合で抽出されたことを確認し、さらに、イスラエルよりも香港の参加者の方がその割合が高かったという結果を示している。

1.2.3. コントロールの優位性

2つ目の研究の流れは、コントロールの優位性 (primacy) について、つまり一次的コントロールと二次的コントロールのどちらが優勢かという問題について、主に比較文化的に検討がなされてきた。Rothbaum et al. (1982) の二分法の提案以降に発表されたのが Weisz et al. (1984a) の理論的な論文であり、実証的なデータで示したものではないが、それ以降のコントロール優位性に関する研究に最も影響を与えた研究である。一次的コントロールと二次的コントロールの好みや志向性は、文化的な環境に影響されるという考えに基づき、東洋文化と西洋文化、特に日本とアメリカの比較を行っている。Weisz et al.は、子育て、社会化、宗教、哲学、労働、精神療法の側面から考察し、日本がアメリカに比べて、二次的コントロールを重視する人を育成するような環境であるということを示した。Weisz et al.はさら

に、日本では一次的コントロールよりも二次的コントロール、アメリカでは二次的コントロールよりも一次的コントロールが好まれているという。

Azuma (1984) は、日本人は二次的コントロールの方を重視するという Weisz et al. (1984a) の主張に対し、二次的コントロールの下位カテゴリの多様性を指摘し、解釈的二次的コントロールの中にも「負けるが勝ち」「長いものには巻かれろ」「泣く子と地頭には勝てぬ」「柳に雪折れ無し」「柔良く剛を制す」「ならぬ堪忍するが堪忍」など様々な種類があるといい、そもそも二次的コントロールがうまく定義されていないという主張を展開した。Kojima (1984) は、一次的コントロールと二次的コントロールの志向性や使用割合を考慮するだけでは不足しており、間接的なコントロールや第三者に依頼する手法も含めるべきだということを指摘した。例えば、落語の師匠が下手な歌を歌う弟子に対して、直接的に叱責を与えるのではなく、字義的には逆の「とても上手」と皮肉を言うことで意図を伝えることも可能であり、このように直接的ではない一次的コントロールも含めて議論しなければならないと主張した。Azuma と Kojima の批判に対して、後に続いて発表された Weisz, Rothbaum, & Blackburn (1984b) では著者らは全面的に彼らの主張に同意し、コントロールの行為者の意図に基づいて分類されるべきだと付け加えている。つまり、外界に影響を与えようとするのが一次的コントロール、現状に適応しようとするのが二次的コントロールであるが、実際には行為者の意図を認識したり区別したりするのは困難であるとのコメントも付け加えている。

このように *American Psychologist* での議論が交わされて以来、多くの研究でコントロールの優位性の文化差が検討されてきた。実証的なデータを示したわけではないが、Heckhausen & Schulz (1995) は、文化や歴史によらず、二次的コントロールはあくまでも補佐的な役割を果たすのみであり、一次的コントロールが機能的に優勢であるという主張を展開した。それに対して Gould (1999) は、一次的コントロールの優位性が文化共通であるという主張に疑問を投げかけ、押し付けられた

エティック (imposed etic) の可能性を示唆している。つまり、コントロールの優位性の文化差を無視しているという。

以上は実証研究ではなく、理論ベースの先行研究である。以下ではコントロールの優位性に関する実証研究を記述する。

コントロールという枠組みには基づいていないものの、近接概念であるコーピングの枠組みで Essau & Trommsdorff (1996) は比較文化的に優位性を検討した。Essau & Trommsdorff は Lazarus & Folkman (1984) の提案した問題焦点型コーピング (problem-focused coping) と情動焦点型コーピング (emotion-focused coping) の二分法に基づき、大学生が学校で生じる問題に対してどのようにコーピングするかを測定した。その結果、マレーシアの大学生が北米とドイツの大学生に比べて、情動焦点型コーピングを行う傾向が見られたと報告し、情動焦点型コーピングの一部は二次的コントロールと同じであることを考察にて述べている。

コントロールという概念や言葉を使って、優位性を実証的に検討した研究は以下に挙げられる。Ashman, Shiomura, & Levy (2006) は学生を対象にして Measurement Instrument for Primary and Secondary Control Strategies (Wrosch, Heckhausen, & Lachman, 2000) という尺度を使用し、計 10 項目により参加者の各コントロールの志向性を測定した。その結果、一次的コントロールではアメリカ人の方が日本人よりも値が高く、二次的コントロールでは逆転していることを示し、さらに Heckhausen & Schulz (1995, 1999) の主張を支持するかたちで、どちらの文化でも二次的コントロールよりも一次的コントロールの志向性が高かった。

Kurman & Dan (2007) は学生を対象にして Control Orientation Questionnaire という尺度を使用し、計 33 項目により参加者の各コントロールの志向性を測定した。その結果、イスラエル生まれの学生がアラブ系イスラエル人やエチオピア系イスラエル人よりも二次的コントロールの志向性が低かった。

Lam & Zane (2004) は学生を対象にして Primary-Secondary Control Questionnaire という尺度を使用し、計 90 項目により参加者の各コントロールの志向性を測定した。具体的には、15 種の大学生生活の場면을提示して、各場面での一次的コントロール 1 種、二次的コントロール 4 種、コントロールの放棄を志向する度合いを測定する質問項目を用いた。その結果、アジア系アメリカ人が白人アメリカ人に比べて、二次的コントロールを強く、一次的コントロールを弱く志向しているということを示し、さらに Heckhausen & Schulz (1995, 1998) の主張と同様に、どちらの文化でも二次的コントロールよりも一次的コントロールの志向性が高いというデータを示している。

Morling (2000) はエアロビクスの受講生を対象にし、各コントロールの志向性を測定する項目も含めた計 19 項目を使用し、参加者の達成場面でのコントロール志向性を検討した。その結果、アメリカ人は一次的コントロール（振り付けが難しい時に振り付けを自分で勝手に変える）、日本人は二次的コントロール（振り付けが難しい時についていこうと努力する）をより選択するということを示し、さらにどちらの文化においても二次的コントロールの方が一次的コントロールよりも行われていたということを示している。

Morling, Kitayama, & Miyamoto (2002) は状況サンプリングという手法を用い、学生参加者に最近の状況を思い出してもらった。その結果、アメリカ人は外界に影響を与えるような状況（influence 状況、つまり一次的コントロール）をより最近に経験しており、すぐに思い出していたのに対し、日本人は自分を変化させるような状況（adjustment 状況、つまり二次的コントロール）をより最近に経験し、すぐに思い出していた。

Oerter, Oerter, Agostiani, Kim, & Wibowo (1996) は 18 歳から 25 歳の若者に対して半構造化面接を行い、統計的な分析は行っていないが内容分析に基づき、アメリカ人よりもインドネシア人や日本人や韓国人の方が二次的コントロールを志向していると述べている。それに対して Weisz, Eastman, & McCarty (1996) が 8

つのコメントを残しており、研究で使われていた手法に方法論的な問題があることを指摘している。例えば、内容分析についての十分な情報が論文中に提示されておらず、比較文化的な結論を出すのは早計であると述べている。

Seginer, Trommsdorff, & Essau (1993) は学生を対象にして Primary-Secondary Control Questionnaire という尺度を使用し、計 38 項目により参加者の各コントロールの志向性を測定した。その結果、マレーシア人がアメリカ人やドイツ人よりも二次的コントロールの志向性が高く、一次的コントロールについては結果が一貫していないというデータを示している。

比較文化的な検討ではないが、塚原 (2010) は日本人学生を対象にし、自身が提唱する Back/up 理論に基づき (塚原, 2008)、二次的コントロールを保持することで適応に有効なのは、特に一次的コントロールが低い場合であるというデータを示し、一次的コントロールの適応的な優位性を述べている。

1.2.4. コントロールとウェルビーイングとの関連

3 つ目の研究の流れは、コントロールとウェルビーイングとの関わりを見たものである。統制の所在やコントロール感を扱った研究が多く、それに比べて一次的コントロールや二次的コントロールとウェルビーイングの関係を扱った研究は比較的少なく、それらを以下に挙げる。

Chang, Chua, & Toh (1997) は、研究 1 にて、シンガポール人を対象にして各コントロール志向性を測定する尺度を独自に作成し、その尺度の妥当性を示した。研究 2 にて、シンガポールの大学生と高齢者の各コントロール志向性とウェルビーイングとの関連を検討した。その結果、二次的コントロールを志向することが学生にとってテスト不安、高齢者にとって不眠や心理的・身体的な症状を和らげる傾向があることを示している。

Dan (2011) は、コントロールに関する文化的な規範から期待される行動を達成できない状態 (under cultural self discrepancy) と文化的な規範から期待される行動をやりすぎている状態 (over cultural self discrepancy) の 2 つを提案し、イ

スラエル人の大学生を対象にして、各状態とウェルビーイングとの関連を見た。その結果、一次的コントロールに関する前者の状態は低い自尊心や高い不安、抑うつと結びついていて、一次的コントロールに関する後者の状態はそのような関連を示さなかったことを実証している。

Haynes, Heckhausen, Chipperfield, Perry, & Newall (2009) は高齢者を対象にし、各コントロール志向性の程度に基づいてクラスター分析を行い、参加者を四群に分割し、各群でのウェルビーイングを比較検討した。その結果、一次的コントロールの志向性が高い群と多様なコントロールを駆使する群は他の群よりも、身体的健康や心理的ウェルビーイングが高かったということを示している。

Wrosch et al. (2000) は調査参加者を若年者と中年者と高齢者に分割し、各コントロール志向性を測定する 14 項目の尺度を使用し、各コントロール志向性とウェルビーイングとの関連を検討した。その結果、一次的コントロール（目標達成への粘り強さ; persistence）がどの世代でも主観的幸福感と正に結びつき、二次的コントロールの一要素である肯定的再評価（positive reappraisals）が特に高齢世代において主観的幸福感と正に結びついていていたのだが、二次的コントロールの一要素である野心低下（lowering aspirations）がどの世代でも主観的幸福感と負に結びつくということを示している。

以上挙げられた研究は、コントロールとウェルビーイングとの直接的な関係を検討したものであり、コントロールが媒介変数として機能することを示した研究としては Tobin & Raymundo (2010) が挙げられる。Tobin & Raymundo は因果的不確定性（causal uncertainty）が抑うつやネガティブ感情に結びつくことを取り上げ、因果的不確定性が高くても二次的コントロールの志向性が高ければ、抑うつやネガティブ感情を回避できるという結果を示し、二次的コントロールが緩衝材として機能するということを実証した。

以上、1980年代以降に行われてきたコントロールに関する研究を (a) コントロールの分類法 (b) コントロールの優位性 (c) コントロールとウェルビーイングとの関連という 3つの分野に分けてまとめた。

1.3. 先行研究で未解決の点

ここまでまとめた 3つの先行研究の流れの中で、コントロールの優位性の文化差に関して未解決の点が指摘できる。特に日本人のコントロールの優位性に関して、以下の 2つの対立する立場にまとめられる。

1つは Weisz et al. (1984a) に代表される主張であり、日本人の間では欧米人と異なり、一次的コントロールよりも二次的コントロールの方が優勢であるとする考えである。もう 1つは Heckhausen & Schulz (1995, 1999) に代表される主張であり、日本人だけでなくどの文化に属する人であっても、またどのような年齢の人であっても、二次的コントロールよりも一次的コントロールの方が優勢であるとする考えである。本論文では前者の立場を相対説 (relativity hypothesis)、後者の立場を普遍説 (universality hypothesis) と呼ぶ。このように日本人のコントロールの優位性に関して、相対説と普遍説という 2つの矛盾する主張が存在している。本論文では、この矛盾を解く鍵として 3つの可能性を挙げる。

1つ目に、扱われている状況や文脈が研究によって異なるという可能性が考えられる。人が置かれている状況がその人の心理に与える影響は多大であることは多くの研究で指摘されており (e.g., Sommers, 2011)、異なった状況や文脈では人のコントロールも変化すると考えられる。Morling (2000) は日本人のコントロールの優位性について相対説を支持する結果を示しているが、アメリカ人においても一次的コントロールではなく、むしろ二次的コントロールの方が優勢であったことを示している。これは、扱われていた状況がエアロビクスという達成場面であったためと考えられる。達成場面においてはしばしば、自分の能力やスキルを伸ばすことが目標となり、二次的コントロールに重きが置かれるようになると思われる。一方、Ashman et al. (2006) は特に状況を特定せずに、尺度を用いてコントロールの志

向性を測定した結果、日本人とアメリカ人のどちらも一次的コントロールの方が二次的コントロールよりも優勢であり、普遍説を支持する結果を示している。このように、参加者が各研究において思い浮かべた状況や置かれている環境が一貫していないために、日本人のコントロールの優位性に関して矛盾した結果が観測されているという可能性が指摘される。

2つ目に、2つの立場で扱われているコントロールの構成概念そのものが異なっているという可能性が挙げられる。各立場を代表する論文の間においても、コントロールの概念が一致していない。相対説を主張する Weisz et al. (1984) は、二次的コントロールを外界に合わせて自己を調整することと定義しているのに対し (Morling & Evered, 2006 での適合焦点型二次的コントロール)、普遍説を主張する Heckhausen & Schulz (1995, 1999) は二次的コントロールをコントロール感を維持するためのものとして扱っている (Morling & Evered, 2006 でのコントロール焦点型二次的コントロール)。他にも Morling et al. (2002) は対人場面での一次的コントロールを取り上げているのに対し、塚原 (2010) は一次的コントロールを認知的作用として扱っている。したがって、コントロールの概念や定義がそもそも研究間で一致していないという可能性が指摘される。

3つ目に、2つの立場で扱われているコントロールは、構成概念レベルではなく測定レベルにおいて異なっているという可能性が挙げられる。具体的に述べると、人が好んで用いるコントロールと実際に用いるコントロールが一致しないということである。相対説を主張する Weisz et al. (1984a) は、日本で二次的コントロールを志向するような環境が形成されているというが、Weisz et al. はさらに進んだ解釈をしており、あたかも日本人が二次的コントロールを“好んでいる”という解釈まで行っている。しかし、人の置かれている環境というのは常に好みに結びつくとは限らず、人のデフォルトの行動を決める誘因構造に過ぎないという可能性も考えられる (e.g., Yamagishi, Hashimoto, & Schug, 2008)。つまり、環境から誘導される行動というのは、その人が理想とする行動を必ずしも反映しているわけでは

ない。一方、Heckhausen & Schulz (1995, 1999) は適応という観点から主張を展開しており、一次的コントロールの機能的な優位性が文化や歴史を通じて共通であるとしている。これは生物学的な適応を論じたものであり、一次的コントロールは確かに個体の適応にとっての理想的な選択かもしれないが、実際にこれが実行されるかどうかについては記述していない。原文でも“preference for primary control” (e.g., p. 286) という言葉が使われており、実際に採用される行動は特に考慮されていない。

以上より、コントロールの優位性に関して対立する 2 つの立場を仲裁する可能性として、3 つの可能性を挙げた。1 つ目に扱われている状況や文脈が研究間で異なっている可能性、2 つ目にコントロールの概念が研究間で異なっている可能性、3 つ目に理想とする行動と実際に行われる行動という差異が考慮されていない可能性である。

本論文ではそれぞれの可能性について以下のようにアプローチしていく。1 つ目に、対人場面における問題を解決する方略としてコントロールを適用し、状況を (a) 個人達成場面 (b) 集団達成場面 (c) 対人葛藤場面の 3 つに分類する。2 つ目に、コントロールの概念分析として新しくコントロール分類法を提案し、その信頼性および妥当性を第 II 部にて実証的に示す。3 つ目に、理想とする行動と現実的な行動の 2 つを分離して測定する試みを第 III 部および第 IV 部にて実証的に示す。

1.4. 対人場面における問題の定義

導入部で述べたように、本論文では対人場面における問題を“対人場面で生じ、本人が変えたいと思っている事柄で容易に解決できないが、物理的あるいは対人的な環境や自己の側面を変化させることで解決可能なもの”と定義する。この定義に基づくと、本論文で扱う状況は (a) 対人場面 (b) 状況変化欲求 (c) 容易には解決不可能 (d) 外界変化または自己変化 (e) 解決可能という 5 つの構成要素から成る。

1 つ目の対人場面という要素により、本論文で扱う状況は本人以外に誰か他者が存在する状況に限定される。逆に言えば、本人のみが関わっている状況は本論文で

は扱わない。例えば、自分の部屋に一人でいる時に暑さを感じて冷房をつけるという行為は、同じ状況に別の他者が存在しないため、本論文の範囲外である。

2つ目の状況変化欲求という要素により、本論文で扱う状況は当人が状況を変えたいと感じている場面に限定される。逆に言えば、当人が現状に完全に満足しており、何も変化を起こそうと動機づけられていない状況は本論文では扱わない。したがって、特に変化を起こさなかった場合には（コントロールの放棄）、当人が望んでいる状況と現在の状況が一致しておらず、問題が残存したままであり、不満やフラストレーションが生じるような状況といえる。

3つ目の容易には解決不可能という要素により、本論文で扱う状況は当人が少しでも苦労や努力、働きかけをした結果によって解決に至る場面に限定される。逆に言えば、当人が特に苦労や努力もせず自然に解決してしまうような問題は本論文では扱わない。例えば、街中を真っ直ぐ歩いている時に自分の通るルートに他者が存在している場合、そのまま歩くとその人にぶつかってしまう。しかし、その人が自分の存在に気づいて道を譲ってくれることもあるだろう。このような場合には特に当人が苦労や努力もしていないため、このような状況は本論文の範囲外である。

4つ目の外界変化または自己変化という要素により、本論文で扱う問題解決方略はコントロールという構成概念と対応している。コントロールというのは自分の意図したように状況を変えていくことを指し（Weisz et al., 1984a, p. 958）、これを達成するために当人は外界変化もしくは自己変化を行っていくのである（Rothbaum et al., 1982）。したがって、本論文で取り上げる対人場面における問題解決方略をコントロールとして、操作的に定義づけることが可能であるといえる。

5つ目の解決可能という要素により、本論文で扱う状況はコントロールを行うことで解決できる場面に限定される。逆に言えば、どのような方略を取ったとしても解決されないような問題は本論文では扱わない。本論文で取り上げる対人場面における問題というのは、何かしらの解決策が存在するようなものである。

1.5. 問題の生じている対人場面の分類

上述の定義に基づき、本論文では問題の生じている対人場面を (a) 個人達成場面 (b) 集団達成場面 (c) 対人葛藤場面の 3 つに分類する。これらの模式図は図 2 にまとめられる。

個人達成場面とは、個人個人がある事柄を成し遂げようとしている場面である。目標が他の人々と共有されていることはあるが、基本的には協力して何かを成し遂げるような場面ではない。もちろん、他の人を巻き込んで一緒に目標に近づいていくということは可能である。例として、就職活動の面接場面 (e.g., 澤・森永, 2014)、エアロビクスのレッスン場面 (e.g., Morling, 2000) が挙げられる。

集団達成場面とは、集団としてある事柄を成し遂げようとしている場面である。目標が他の人々と共有されており、協力して何かを成し遂げるような場面である。他の人にわざわざ働きかけなくても、既に他の人が巻き込まれており、一緒に目標に近づいていくような状況である。例として、企業や組織での目標達成 (e.g., 遠藤, 2014)、大学のクラブやサークルの活動 (黒川, 2014) が挙げられる。

対人葛藤場面とは、個人個人が別の他者によって問題を引き起こされている場面である。葛藤内容が他の人々と共有されていることはあるが、基本的には協力して葛藤解決にあたるような場面ではない。もちろん、他の人を巻き込んで一緒に解決にあたることは可能である。例として、他者から物質的被害や身体的被害や心理的被害を受けている場面 (e.g., 高田・大淵, 2009)、他者から不合理な要求をされる場面 (e.g., 福島・大淵・小嶋, 2006) が挙げられる。

なお、他には集団葛藤場面という分類も考えられ、集団間紛争 (e.g., 縄田・山口, 2011) や民族間対立 (e.g., Ng, 2005) という枠組みで研究されている。しかし、集団葛藤場面では個人の力だけでは解決しないことが多く、本論文で扱う対人場面の構成要素 5 つ目 “解決可能” にあてはまらないため、本論文では扱わない。

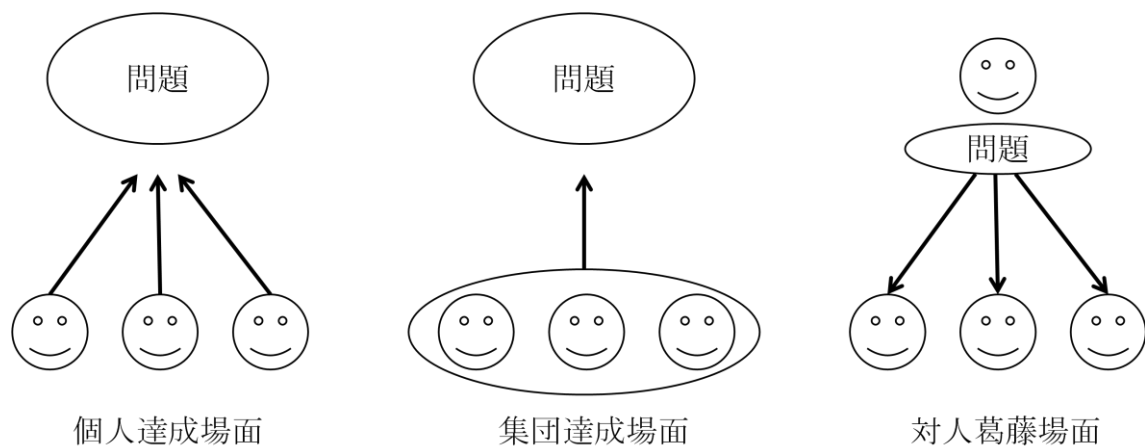


図 2: 問題の生じている対人場面の 3 分類

1. 6. 本論文で採用するコントロールの分類法

本論文ではコントロールの分類法という研究分野について、実証的な研究を積み重ねていき、コントロールの概念を明らかにしていく。それにより、コントロールの優位性に関する相対説と普遍説の対立に関して新しい視座を提供することを 1 つ目の目的とする。従来、分類法について信頼性や妥当性が検討されることは少なく、本論文で用いる新しい分類法の信頼性と妥当性を第 II 部で検討する。

本分類法に基づき、理想とするコントロールと現実に行うコントロールの分割を提案することを 2 つ目の目的とする。具体的には、第 III 部では実証データに基づいてコントロールの理想的選択と現実的選択の分離を提案し、第 IV 部では選択がその 2 種に分かれる事象について詳細に検討していく。

1. 6. 1. Yamaguchi (2001) を土台とした一次的コントロールの分類法

Yamaguchi (2001) によると、一次的コントロールは行為者と直接性によって 4 種に分類できるという。つまり、コントロールという行為を実際に行う者と、その行為がどの程度直接的かによって、一次的コントロールは (a) 個人直接コントロール (direct personal control) (b) 個人間接コントロール (indirect personal control) (c) 代理コントロール (proxy control) (d) 集団コントロール (collective control) の 4 種に分類されるという。

個人直接コントロールというのは、自分一人で直接的に問題に働きかけようとする試みのことである。冒頭段落で取り上げた対人場面を再掲すると、アパートや大学寮で隣人が深夜まで騒音を出していて、本人が睡眠不足になっている状況においては、その隣人に行方を辞めるよう自分が直接的に注意することが個人直接コントロールの一例である。個人直接コントロールは自律を重んじる文化で特に重視される解決法であり、個人直接コントロールがうまく行われることで自律や自己効力感が醸成されていくという (Yamaguchi, 2001)。ただし、直接的に相手に働きかけるので、相手との関係性を傷つけてしまう可能性も少なくない。また、個人直接コントロールは“コントロール”といったときに思い出される典型例であり (Skinner, 1996)、先行研究で扱われている一次的コントロールは基本的に個人直接コントロールのみが取り上げられてきた²。

個人間接コントロールというのは、自分一人で間接的に問題に働きかけようとする試みのことである。冒頭段落で描かれた状況では、自分の睡眠不足をほのめかして、隣人に問題を起こしていることを気付いてもらうことが個人間接コントロールの一例である。他にも Kojima (1984) が例示するように、落語において弟子が下手な歌を歌っているという事態に対して、その師匠が直接的に叱るのではなく、あえて「とても上手」と正反対の発言をすることで弟子に気付かせ、歌うのを辞めさせることもこのカテゴリに属する。皮肉以外にも、暗示などの間接的な発話によって意図を伝える方法も、個人間接コントロールであるといえる。個人間接コントロールでは、自律や自己効力感は育まれにくいものの対人関係は崩壊しにくい (Yamaguchi, 2001)。そのため、自律を重んじる文化では重視されないであろうが、調和を重んじる文化では好まれるであろう。

代理コントロールというのは、誰か別の人に頼って自分の代わりに問題に働きかけてもらう試みのことであり、第三者がプロキシ (proxy) の働きをしてくれるも

² ただし例外として Kojima (1984) は、個人直接コントロール以外のものも一次的コントロールとして取り上げられるべきだと主張している。例えば皮肉などのように間接的に相手に伝えたり、誰か第三者にお願いして解決したりすることなどを挙げている。

のである (Bandura, 1997)。冒頭段落で描かれた状況では、アパートや大学寮の管理人にお願いして、問題を起こしている隣人に注意してもらうことが代理コントロールの一例である。代理コントロールは、子供や部下のように弱い立場にいる人々が生存するために必要な方法であり、親や上司のように地位や権力のある者に頼るのである (Yamaguchi, 2001)。例えば、甘えという行為が代理コントロールにあたる (土居, 1971; Yamaguchi & Ariizumi, 2006)。代理コントロールも個人間接コントロールと同様に、自律や自己効力感を育みにくいものの対人関係を崩壊させにくいため (Yamaguchi, 2001)、自律や自己効力感を重んじる文化ではなく、対人的な調和を重んじる文化で好まれるであろう。

集団コントロールというのは、自分を含む複数人で共に問題に働きかけようとする試みのことである。冒頭段落で描写された状況では、自分と同じく隣人の騒音で困っている他の住人と協力して、問題を起こしている隣人に注意することが集団コントロールの一例である。集団コントロールの利点としては責任の分散が挙げられる (Latané, 1981)。つまり、集団コントロールを実行した結果により何か問題が生じて、その責任が一人に集中しないという利点がある。もう 1 つの利点として、個人よりも集団で行為を働く方が、自分にとって良い結果が生じやすいという人々の認知も指摘されている。例えば集団の中にいることで、本当はそうでもないにも関わらずリスクが減少するという認知がなされたり (Yamaguchi, 1998)、くじ引きで悪い結果を避けられるという認知がなされたりする (Yamaguchi et al., 2005)。集団コントロールも個人間接コントロールや代理コントロールと同じく、自律を重んじる文化ではなく、調和を重んじる文化で好まれるであろう (Yamaguchi, 2001)。

ここまで本論文が土台とする Yamaguchi (2001) の一次的コントロールの分類法を詳述した。本論文では集団コントロールの更なる厳密性を重視し、行為の直接性によって直接的なものと間接的なものに二分して検討する。つまり、集団で問題に直接的に働きかけようとする試みを集団直接コントロール、集団で問題に間接的

に働きかけようとする試みを集団間接コントロールと定義する。冒頭段落での状況において、前者の例としては上述したように、隣人に直接的に注意しに行くことが挙げられ、後者の例としては隣人や他の住人も含めて、アパートや大学寮の利用に関するマナーについて話し合うことが挙げられる。

以上の議論を踏まえ、本論文で扱う一次的コントロールの分類法は (a) 個人直接コントロール (b) 個人間接コントロール (c) 代理コントロール (d) 集団直接コントロール (e) 集団間接コントロールの 5 種から構成され、図 3 のようにまとめられる。つまり、行為を行う者と行為の直接性に基づいて分類されている。

本論文では Yamaguchi (2001) を参考にし、一次的コントロールを 5 種、二次的コントロールを 1 種のみとする分類法を採用する。このような詳細な分類法について重要なポイントを再度述べると、一次的コントロールと二次的コントロールの大きな違いは外界変化か自己変化かという違いである。

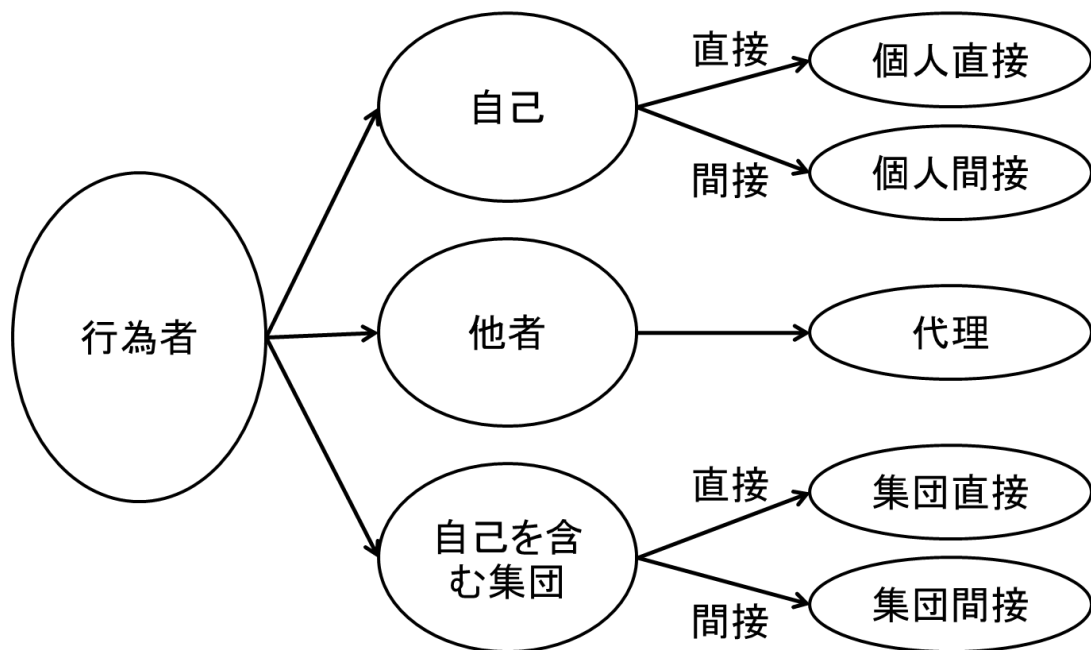


図 3: 本論文で採用する一次的コントロールの分類法

1.6.2. 二次的コントロールの分類法

一方、本論文では二次的コントロールを1種として定義する。このように定義する理由は、二次的コントロールという概念が自己を変化させるというもので、そもそも概念的にあいまいであり、さらに分割して定義しようとするとは様々な種類の操作的定義づけが可能になってしまうと考えられるからである (Yamaguchi, 2001)。そこで本論文では、外界ではなく自己の何かしらの側面を変化させようとする試みという意味合いを重視する。このような考えに基づいた先行研究は存在し、Chang et al. (1997) は“実在する現実に応応するよう自己の認知、感情、行動を変化させること”と定義しており、本論文でもこの定義を採用する。

二次的コントロールの定義について、一次的コントロールの詳細な分類法と比して簡素すぎる定義に見えるかもしれないが、これは二次的コントロールの分類法をめぐる論争を踏まえての判断である。詳細は“1.2.2. コントロールの分類法”で前述した通りである (Heckhausen & Schulz, 1995, 1999 vs. Gould, 1999; Morling & Evered, 2006, 2007 vs. Skinner, 2007)。

二次的コントロールの一部だけを抽出して調和コントロールというカテゴリを提案した研究もあるが (Morling & Fiske, 1999)、これは二次的コントロールのうち外界をそのまま受け入れるという側面のみしか取り出していない。二次的コントロールのうち、自己の側面を変える、特に自己の行動を変えるという要素について含まれていないため、本論文では扱わない。

1.6.3. 本論文で採用する分類法と他の分類法との比較

本論文では対人場面における問題解決方略として、Yamaguchi (2001) のコントロール分類法を更に発展させた分類法を用いる。対人場面における問題解決方略を検討する上で、他の分類法が適していないと思われる理由を以下に述べる。

1つ目に、二分法を最初に提案した Rothbaum et al. (1982) の論文で更なる四分分割がなされているが (予測的、代理的、架空的、解釈的)、同時に生起すること

が少なくないためか、この詳細な分類法はその後の先行研究ではほとんど引用されず、定着していない。著者たち自身も、この四分割は元々二次的コントロールを分類するためだけに編み出されたと認めている。

Seginer et al. (1993) は、この四分割の分類法を一次的コントロールに適用できるかどうかは今後の課題であると述べている。Seginer et al.は研究 1 にてこの四分割を採用しているが、研究 2 では元の一次的コントロールと二次的コントロールの包括的な二分法を採用している。さらに、Seginer et al.の研究 1 では二次的コントロールを下位カテゴリ 4 種に分割し、マレーシアとアメリカとドイツの比較を行っており、4 種の下位カテゴリともに同様の傾向を見出している（マレーシア、アメリカ、ドイツの順に高かった）。以上を踏まえると、Rothbaum et al. (1982) の提案する四分割を採用する積極的な理由は見当たらない。

本論文で採用するには適さない分類法の 2 つ目として、Heckhausen (2003) の選択的または補償的 (selective または compensatory) という分類がある。この分類法では選択的か補償的に関わらず、一次的コントロールを行動の変化、二次的コントロールを認知や感情の変化と分けており、一次的コントロールを外界の変化、二次的コントロールを自己の変化とする本論文の主要な考えとは一致しない。本論文では、外界に働きかけずに自己の行動を統制することも二次的コントロールと定義されるが、これが Heckhausen の定義するところの一次的コントロールと重複してしまう。

本論文で採用しない分類法の 3 つ目に塚原 (2010) の分類が挙げられる。塚原は研究 1 にて一次的コントロールを“解決・直接介入・帰属・分析思考”の 4 種、二次的コントロールを“思考転換・大局視野”の 2 種に分類し、研究 2 にて前者を“解決志向・因果分析”の 2 種、後者を“意味受容・思考調整”の 2 種に分類している。しかし、この分類法は元々認知的な作用を扱うために編み出されたものであり、行動側面は含まれていない。したがって、本論文で扱う“対人場面における問題”に対するアプローチとしては適していない。

以上述べてきた 3 つの分類法に比べて、本論文で採用する新しい分類法は以下の 2 つの利点があると考えられる。1 つ目に、一次的コントロールを行為者と行為の直接性という基準でのみ分類しており、カテゴリ間の重複が起りにくく、研究者ではない一般の人々にもわかりやすいという明瞭性が挙げられる³。

2 つ目に、理論的な厳密性が考えられる。先行研究では、個人直接コントロール以外は一次的コントロールの文脈では取り上げられず、見過ごされてきた (Skinner, 1996; Yamaguchi, 2001)。だが、外界変化という一次的コントロールの定義に基づくと、個人間接コントロール、代理コントロール、集団直接コントロール、集団間接コントロールはすべて外界に働きかけるような試みであり、一次的コントロールに含まれるべきである。特に、相手との直接対決を避ける傾向がある日本人のコントロールを検討する上では (Ohbuchi, Fukushima, & Tedeschi, 1999)、個人直接コントロール以外の一次的コントロールの包含は重要であるといえる。

1.7. コントロール “方略”

本論文では一次的コントロールを 5 種、二次的コントロールを 1 種と定義する新しい分類法に則って実証的な研究を示していく。以下の記述では対人場面における問題解決の方法として、コントロールという用語のみではなくコントロール “方略” という用語を用いる。その理由は、方略 (strategy) という言葉を含めることによって、(a) 受動的ではなく自分から能動的に行動や考えを選択するという意味合いが追加され、(b) 即断ではなく熟慮の末に選択されたものという意味合いが追加されると考えられるからである。

冒頭で述べたように、本論文では対人場面における問題を “対人場面で生じ、当人が変えたいと思っている事柄で容易に解決できないが、物理的あるいは対人的な環境や自己の側面を変化させることで解決可能なもの” と定義している。したがって、対人場面における “当人が変えたいと思っている事柄” を解決する際、誰かに指示されたり命令されたりして行動を起こすというよりも、自分の意志で選択する

³ 詳細は第 II 部の研究 1 で示す。

解決方法を本論文で扱う。これは、方略という言葉が持つ意味合いの1つ目“能動的な選択”という特徴と一致する。さらに、対人場面における“容易に解決できない”問題にアプローチする際、解決にある程度の労力やコストがかかるので、そのような要素を十分に考慮して解決策を選択すると考えるほうが自然である。これは方略という言葉が持つ意味合いの2つ目“熟慮の末の選択”という特徴と一致する。

コントロール方略という言葉を用いることにより、近接概念と混同されないという利点もある。例えば、統制の所在 (Rotter, 1966)、コントロール感 (sense of control または perceived control; Thompson, 1981) などの心理的構成概念は上記の2つの条件を満たさないため、差別化できると考えられる。これらは、能動的に選択されるわけでもなく、熟慮した末に選択されるわけでもない。コントロールの概念についての広範なレビューは Skinner (1996) に述べられているが、それらの概念1つ1つと本論文で扱うコントロール方略がどのように異なるのかを記述するのは本論文では省略する。

対人場面における問題解決方略として、対人葛藤場面での解決方略という研究枠組みが存在する (Ohbuchi, Chiba, & Fukushima, 1996; Ohbuchi et al., 1999; Ohbuchi & Tedeschi, 1997)。対人葛藤とは“個人の要求や期待が他者によって阻止されていると個人が認知することによって生じる”と定義される (藤森, 1989, p. 108)。このような状況に対する解決方法として、Ohbuchi 等の一連の研究では“対話方略”“対決方略”“第三者方略”“回避方略”というような分類法を採用しているが、これには二次的コントロール方略のように自己の側面を変化させることで要求と外界をフィットさせるという方略は含まれていない。回避方略とは、外界にも自己にも働きかけようとしないもので、コントロールの放棄であると考えられる。さらに、本論文で扱う対人場面における問題には対人葛藤も含まれるが、それ以外に個人達成場面と集団達成場面も含まれる。ゆえに、本論文で扱うコントロール方略と対人葛藤の解決方略とは別の枠組みであるといえる。

問題解決方略としてコーピングという手法も多く研究されている。Lazarus & Folkman (1984) の問題焦点型コーピングと情動焦点型コーピングの二分法が最も引用されている分類法であり、コーピングはしばしば “efforts to prevent or diminish threat, harm, and loss or reduce associated distress” と定義されている (Carver & Connor-Smith, 2010, p. 685)。それに対して、本論文で扱うコントロール方略は自分の意図したように状況を変えていくこと (causing an intended event; Weisz et al., 1984a, p. 958) を指す。つまり、コーピングは脅威や危害や損失などのネガティブな出来事にどのように対処するかを扱っているのに対し、コントロールは利得などのポジティブな出来事をどのように引き起こすかをも含んでおり、コーピングよりも広範な概念であると考えられる。さらに、本論文では対人場面での問題を扱っており、コーピングは学業場面での問題や健康上の問題という文脈で用いられることが多く、本論文で扱うコントロール方略と差別化できるといえる。

1.8. 本論文の目的

本論文では実証編として3つの部分に分け、対人場面における問題解決方略、つまりコントロール方略についての実証的な研究を報告し、コントロールの優位性に関する相対説と普遍説という2つの対立する理論に対して、新しい解釈の視点を提供することを目的とする。第Ⅱ部では、一次的コントロール方略を5つのカテゴリ、二次的コントロール方略を1つのカテゴリとする新しい分類法の信頼性および妥当性を研究1および研究2により示す。第Ⅲ部では、この新しい分類法に基づき、各コントロール方略を理想として取りたい度合いと現実取る度合いの2つに分割する必要性を研究3および研究4により示す。第Ⅳ部は、研究5および研究6より構成され、理想的選択と現実的選択の分離について、そのギャップに関する3分類モデルを提案し、ギャップの発生および消失メカニズムについて様々な要因からの説明を試みる。第Ⅱ部から第Ⅳ部までの概要は表1のようにまとめられる。

表 1: 第 II 部から第 IV 部までの概要

実証編	研究	内容
第 II 部 本論文で用いるコントロール方略の分類法の信頼性および妥当性の実証的検討	研究 1	質的データによる信頼性の実証
	研究 2	(a) 個人特性との関連に基づく妥当性の実証 (b) 状況要因との関連に基づく妥当性の実証
第 III 部 各コントロール方略の理想的な選択と現実的な選択の分離の必要性	研究 3	各コントロール方略の特徴分析
	研究 4	理想的な選択と現実的な選択の測定の試み
第 IV 部 理想的な選択と現実的な選択の分離に関する 3 分類モデルの提案とその発生メカニズム	研究 5	個人特性・状況要因との関連
	研究 6	個人特性・状況要因・文化との関連

第 II 部: コントロール方略の分類法の信頼性と妥当性の実証的検討⁴

2.1. 研究 1: 質的データによる信頼性の実証

2.1.1. 目的

研究 1 では行為を実行する者と行為の直接性という 2 つの基準により、一次的コントロールを (a) 個人直接コントロール (b) 個人間接コントロール (c) 代理コントロール (d) 集団直接コントロール (e) 集団間接コントロールの 5 種のカテゴリに分類し、二次的コントロールを 1 種のみとする新しい分類法の信頼性を示す。具体的には、対人場面における問題をシナリオ形式で参加者に提示し、それに対する

⁴ 研究 1 と研究 2b の内容は“Japanese control strategies regulated by urgency and interpersonal harmony: Evidence based on extended conceptual framework” という題目で Journal of Cross-Cultural Psychology に公刊される (Sawaumi, Yamaguchi, Park, & Robinson, in press)。

る解決方略をボトムアップ形式で記述してもらい、その質的データについて研究者でない2名がカテゴリ分けの分析を行う。

仮説としては、分類法の信頼性が高くなるであろう、つまり、2名のカテゴリ分けの判断が一致する確率が高くなるであろうと予測される。なぜならば、信頼性の高い分類法というのは明瞭であって誤解を招かず、評定者によって判断が変動しにくいと考えられるためである。

さらに、本分類法により、対人場面における問題解決方略の大半を網羅できるであろうと予測される。この理由は、信頼性の高い分類法というのは、扱われている問題解決方略を広い範囲および高い割合で包含することができると考えられるためである。

2.1.2. 方法

神奈川大学の学生85名（男性32名、女性53名、年齢 $M=20.49$ 、年齢 $SD=0.68$ ）と奈良大学の学生86名（男性47名、女性39名、年齢 $M=20.15$ 、年齢 $SD=1.14$ ）が研究に参加した。心理学系の講義時間の一部を借りて実施し、講義室内で一斉に下記の質問紙を配布し、回答してもらった。

質問紙では4種の架空の状況が提示されていた。そこでは対人場面においての問題が描かれており、各状況において問題の内容は異なっていた。1つ目は団体競技の運動サークルで、あるメンバーが練習をさぼりがちであるという場面（以下、サークルシナリオと表記する）、2つ目はゼミの共同作業で、ある学生が作業を真剣にやってくれないという場面（以下、共同作業シナリオと表記する）、3つ目は大学の授業で最終試験が近づいており、すべての授業に出席してノートを取っているある学生からノートを借りたいという場面（以下、試験シナリオと表記する）、4つ目は学園祭にてクラスのメンバーで屋台を出しており、客引きのうまいあるメンバーに食べ物を売るのを手伝って欲しいという場面であった（以下、学園祭シナリオと表記する）。

これら 4 つの状況は、コントロール方略が関係する対人場面を東京大学の複数の学部生に挙げてもらい、全員で話し合っそのシナリオプールの中から本研究での使用に適切と思われるシナリオとして選択されたものである。すべての状況は一般的な大学生が経験することがあり、容易に想像可能だということは東京大学の複数の学部生により確認済みである。すべてのシナリオの全文は付録 1 に記載してある。質問紙の中ではシナリオの提示順序をランダムにした。

“1.5. 問題の生じている対人場面の分類”で述べた 3 種の対人場面のうち、個人達成場面が試験シナリオ、集団達成場面がサークルシナリオ、共同作業シナリオ、学園祭シナリオである。

できる限り広範なコントロール方略を収集するために、状況要因としてコントロールの重要度と調和維持難易度という 2 種を操作した。つまり、状況が切迫しており、コントロールを行うことが重要である状況とそうでない状況、シナリオ主人公がコントロール方略の対象者との関係性や調和を維持することが困難である状況とそうでない状況を組み合わせ、合わせて 4 条件を各状況について設定した。参加者はそのうちの 1 条件にランダムに割り当てられた。ただし、条件間の比較は研究 1 の目的ではないので、本論文では報告しない。

参加者にシナリオを提示してから、参加者が各シナリオの主人公の立場に置かれたとして、最も取りうる対処法（つまりコントロール方略）を自由に記述してもらった。具体的には“あなたはどのようにして対処すると思いますか”という文言により回答を求めた。

その他、本研究の主眼から外れるが以下の質問項目も含まれていた。(a) コントロール方略実行が相手との関係に悪影響を与える可能性 (b) コントロール方略実行の必要性 (c) 同じ状況にいる他者にとってのコントロール方略実行の必要性 (d) コントロール方略の相手との調和維持必要性 (e) 状況に対する不満 (f) 二次的コントロール方略の望ましさであり、これら 6 つの項目は特に自由記述とは無関連な項目群であった。加えて、自由記述してもらったコントロール方略に関連する

項目として (g) その方略の自分にとっての望ましさ (h) 同じ状況にいる他者にとってのその方略の望ましさ (i) その方略の一般的な望ましさ (j) その方略実行による状況改善度 (k) その方略実行による相手との関係性への悪影響という 5 つの項目も含まれていた。なお、これらの項目は 5 件法 (1: 全く—5: かなり) で回答を求めた。例えば (a) コントロール方略実行が相手に悪影響を与える可能性という質問項目では、1 が“全く可能性はない”、5 が“かなり可能性がある”というラベルであった。

質問紙配布とは別の機会に、本論文で扱う分類法をまとめたコーディングマニュアルを作成した。一次的コントロール方略の 5 種 (個人直接、個人間接、代理、集団直接、集団間接)、二次的コントロール方略の 1 種、コントロールの放棄、その他、という合計 8 つのカテゴリを作成し、各シナリオにおいて具体例なども含めマニュアルを作成した。すべてのシナリオで使用したコーディングマニュアルは付録 2 に記載してある。

2.1.3. 結果：記述統計量

リッカート尺度で回答を求めた 11 項目の平均値と標準偏差をシナリオごとにまとめた (表 2 から表 5)。

表 2: 研究 1 のサークルシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係悪影響可能性	3.14	1.21
自分にとっての方略実行必要性	3.83	1.18
他者にとっての方略実行必要性	4.11	0.93
調和維持必要性	3.88	1.05
状況に対する不満	3.50	1.05
二次的コントロール方略の望ましさ	2.79	1.30
記述した方略の自分にとっての望ましさ	3.82	1.06
記述した方略の他者にとっての望ましさ	3.48	1.09
記述した方略の一般的な望ましさ	3.45	1.04
記述した方略による状況改善度	3.42	1.05
記述した方略実行による関係性悪影響	2.63	1.11

表 3: 研究 1 の共同作業シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係悪影響可能性	3.07	1.11
自分にとっての方略実行必要性	3.99	1.00
他者にとっての方略実行必要性	4.14	0.81
調和維持必要性	3.56	1.01
状況に対する不満	3.76	0.93
二次的コントロール方略の望ましさ	3.08	1.29
記述した方略の自分にとっての望ましさ	3.87	0.89
記述した方略の他者にとっての望ましさ	3.72	0.95
記述した方略の一般的な望ましさ	3.48	1.11
記述した方略による状況改善度	3.61	0.96
記述した方略実行による関係性悪影響	2.70	0.98

表 4: 研究 1 の試験シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係悪影響可能性	3.49	1.21
自分にとっての方略実行必要性	3.89	1.16
他者にとっての方略実行必要性	4.02	0.99
調和維持必要性	4.08	0.99
状況に対する不満	2.94	1.23
二次的コントロール方略の望ましさ	3.59	1.23
記述した方略の自分にとっての望ましさ	4.05	0.99
記述した方略の他者にとっての望ましさ	3.47	1.08
記述した方略の一般的な望ましさ	3.32	1.08
記述した方略による状況改善度	3.77	1.05
記述した方略実行による関係性悪影響	2.53	1.11

表 5: 研究 1 の学園祭シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係悪影響可能性	2.96	1.12
自分にとっての方略実行必要性	3.33	1.08
他者にとっての方略実行必要性	3.73	0.91
調和維持必要性	4.02	0.92
状況に対する不満	2.51	1.10
二次的コントロール方略の望ましさ	3.46	1.32
記述した方略の自分にとっての望ましさ	3.96	0.88
記述した方略の他者にとっての望ましさ	3.58	0.94
記述した方略の一般的な望ましさ	3.63	0.96
記述した方略による状況改善度	3.68	0.91
記述した方略実行による関係性悪影響	2.05	0.89

2.1.4. 結果：自由記述コーディング

本研究の仮説を知らない学生 2 名にコーディングマニュアルと自由記述データを渡し、独立にカテゴリ分けをしてもらった。具体的には、参加者が各状況で自由に記述した対処法を 1 つ 1 つ各評定者に眺めてもらい、各記述がどのカテゴリに分類されるかを判断してもらった。

その結果、2 名の評定者間の一致度を示すカッパ係数は $\kappa = .91$ となった (Cohen, 1960)。これはほぼ完璧な一致度であったといえる (Landis & Koch, 1977)。

対処法の記述は全部で 622 個あり、2 名の不一致が生じたものはそのうち 43 個であった。それを除いた 579 個のうち、2 名ともその他に分類されたものは 2 個のみであり、残りの 90% 程度の 520 個は一次的コントロール方略または二次的コントロール方略に分類されていた。各カテゴリの度数をまとめた結果、表 6 のようになった。

表 6: 研究 1 の各コントロール方略の度数分布表

シナリオ	一次的					二次的	放棄	合計
	個人		代理	集団				
	直接	間接		直接	間接			
サークル	65	44	4	6	7	9	19	154
共同作業	72	31	4	4	4	18	15	148
試験	62	30	4	5	0	30	11	142
学園祭	41	19	0	5	2	54	12	133
合計	240	124	12	20	13	111	57	577
(%)	(41.59)	(21.49)	(2.08)	(3.47)	(2.25)	(19.24)	(9.88)	(100)

全体的に個人直接コントロール方略の度数が最も高かった (41.59%)。それ以外の一次的コントロール方略も 4 種を合計すると 169 個あり、コントロール方略全体のうち 29.29%、一次的コントロール方略のうち 41.32%を占めていた。

2.1.5. 考察

独立な 2 名による評定間のカッパ係数が非常に高い値を示したことは注目に値する。これは、5 種の一次的コントロール方略と 1 種の二次的コントロール方略（およびそれに加えてコントロールの放棄とその他）という新しい分類法が意味を成し、分類についての詳しい理論を勉強したことがなく、研究者ではない人であっても十分に理解でき、重複や混乱が起りにくいものであるということを示している。加えて、一次的コントロール方略と二次的コントロール方略を合わせると、研究参加者から挙げられた対処法の約 9 割を説明しており、対人場面における問題解決方略を非常に高い割合で網羅できているといえる。以上より、本論文で提案する新しい分類法の信頼性が確認された。

コントロール方略のうち個人直接コントロール方略が最も記述されていた。これは Heckhausen & Schulz (1995, 1999) が主張するような一次的コントロールの優位性、つまり普遍説と一致する結果であった。先行研究で扱われている一次的コントロールの実体は、本分類法での個人直接コントロール方略であり、本研究の度数分布の結果は普遍説を支持するようなパターンであった。

個人直接コントロール方略以外の一次的コントロール方略は、対人場面における問題解決方略のうち約 3 割を占めていた。この結果は、古典的には扱われてこなかった一次的コントロール方略（個人間接、代理、集団直接、集団間接）を無視できないということを表している。

2.2. 研究 2: 個人特性・状況要因との関連に基づく妥当性の実証

2.2.1. 目的

研究 2 では本論文で用いる分類法の構成概念妥当性を示すため、目的 1 として各コントロール方略を志向する度合いと個人特性との関連を見る。個人特性として、

シャイネスおよび集団主義的傾向を取り上げる。目的 2 として各コントロール方略を志向する度合いと状況要因との関連を見る。状況要因として、同じ問題を共有する他者の有無、コントロール方略の対象者との親密性、状況に対する不満の有無を取り上げる。

シャイネスは様々な定義がなされており、本論文で採用するのは“特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群”という定義であり（相川, 1991, p. 150; Leary, 1986, p. 30）、対人場面においては不適応的な特性であると言われている⁵。そのような対人場面での不適応的な傾向として、コミュニケーションの相手からの拒絶や拒否を過剰に避けるという傾向が考えられる。つまり、シャイな人というのは、相手から拒否されることを回避しようとするのであり、実際にデータにおいてもシャイネスと拒否不安傾向や拒否回避行動と正の相関が実証されている（藤井・相川, 2013; Jackson, Flaherty, & Kosuth, 2000; Sawaumi, 2007）。また、コントロール方略のうち、個人直接コントロール方略は個人で直接的に対象者に働きかけるため、対象者との関係性や対人的な調和が崩れる可能性が最も高い（Yamaguchi, 2001）。個人直接コントロール方略は他の方略に比べ、対象者から嫌われる可能性が高く、拒否の可能性が高いといえる。以上を踏まえると、シャイな人は個人直接コントロール方略を避ける傾向があると考えられる。よって、シャイネスと個人直接コントロール方略志向性との間には負の相関が予測される。

一方、集団主義的傾向も様々な定義がなされており、本論文で採用するのは“特に個人的な自己（private self）と集団的な自己（collective self）が葛藤するような時に前者よりも後者を優先する傾向”という定義である（Yamaguchi, 1994, p. 178; Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori, 1995, p. 659）。換言すると、個人的な達成よりも集団的な達成や集団内で役割を果たすことに重きを置く傾向のことである。

⁵ ただしシャイネスの適応価については比較文化的な違いも指摘されており、日本のような文化では自分がシャイであることを表明することは謙虚で魅力的な印象も与えうるとの議論もある（Zimbardo, Pilkonis, & Norwood, 1975）。

る。このような集団を重視する傾向は、個人で行動することよりも集団で行動することを志向すると考えられる。以上を踏まえると、集団主義的な人は個人よりも集団で対象に働きかける方略、つまり集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略を選択する傾向があると考えられる。したがって、集団主義的傾向と集団直接コントロール方略志向性および集団間接コントロール方略志向性との間には正の相関が予測される。

続いて状況要因について1つ目に、対人場面における問題を共有する他者が周りに存在すると、その他者は同じ悩みを持つ者として協力してくれる可能性が高いであろう。逆に言えば、同じ問題を共有しない他者が代わりに行動を起こしてくれたり、一緒に行動に付き合ってくれたりするというのは、特別なケース（例えばその他者と非常に親しい時など）でない限り起こりにくいであろう。よって、同じ問題を共有する他者は1種のリソースとなりうるため、そのような他者がいる時の方がいない時の方よりも、他者を含むコントロール方略（つまり代理コントロール方略、集団直接コントロール方略、集団間接コントロール方略）を志向する度合いが高くなると予測される。

2つ目に、コントロール方略の対象者との親密性が高いと、わざわざ他者を巻き込んで解決する可能性が低くなるであろう。代理コントロール方略、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略は自分以外の人も巻き込んで解決にあたるものであり、それだけ余計にコストがかかるものである。よって、そのようなコストを避けるため、相手と親しい場合には自分一人で解決した方が周りにコストや迷惑をかけることがないので、他者を含むコントロール方略は避けられるであろう。また、コミュニケーションの相手と親しい場合、フェイス（ポジティブな社会的イメージ）に配慮する必要性が低く（Brown & Levinson, 1987）、その相手に直接的に働きかけても問題ないと認識されるであろう。以上の議論をまとめると、コントロール方略の対象者との親密性が高い時の方が低い時よりも、個人直接コントロール方略を志向する度合いが高く、他者を含むコントロール方略（代理コント

ロール方略、集団直接コントロール方略、集団間接コントロール方略)が低くなると予測される。

3つ目に、置かれた状況に対する不満が高いと、すぐに解決に結びつくものを選択する可能性が高くなるであろう。快樂原則に基づくと、人は快樂を求め苦痛を避ける生き物であり (Snyder & Lopez, 2007)、不満を抱えている状況が続くのを嫌がり、極力迅速に解決したいと思うであろう。そのような状況では、状況の打開に有効と思われる方略を志向する度合いが高くなるであろう。したがって、置かれた状況に対して不満がある時の方が無い時の方よりも、解決に直接的に結びつく個人直接コントロール方略を志向する度合いが高く、解決に最も有効でない二次的コントロール方略を志向する度合いが低くなると予測される⁶。

2.2.2. 方法

東京大学の学生 60 名 (男性 44 名、女性 16 名) と埼玉大学の学生 186 名 (男性 127 名、女性 57 名、性別無回答 2 名) が研究に参加した。前者では本論文の著者が主導する研究グループの学部生メンバーにお願いして、研究実施を担当してもらい、それぞれの個人的な知り合いに対して質問紙を配布して回収してもらった。後者では心理学系の講義時間の一部を借りて実施し、講義室内で一斉に下記の質問紙を配布し、回答してもらった。

質問紙では 5 種の架空の状況が提示されていた。そこでは対人場面においての問題が描かれており、各状況において問題の内容は異なっていた。1つ目から4つ目までは研究 1 と同一のシナリオであり、サークルシナリオ、共同作業シナリオ、試験シナリオ、学園祭シナリオであった。5つ目は大学寮にて交替で使用するという条件のもとでゲームを共同購入してあり、ある寮生がそれを使っている時にシナリオ主人公も使いたいと考えているという場面であった (以下、ゲームシナリオと表記する)。

⁶ 研究 2 において、各コントロール方略がどの程度解決に有効かという 5 件法の質問項目も含まれており、その分析の結果、個人直接コントロール方略が状況の解決に最も有効であり ($M = 3.81$)、二次的コントロールが状況の解決に最も有効でない ($M = 2.86$) ということが示されている。

これら 5 つの状況は、コントロール方略が関係する対人場面を東京大学の複数の学部生に挙げてもらい、全員で話し合っただけそのシナリオプールの中から本研究での使用に適切と思われるシナリオとして選択されたものである。すべての状況は一般的な大学生が経験することがあり、容易に想像可能だということは東京大学の複数の学部生により確認済みである。質問紙の中ではシナリオの提示順序をランダムにした。

“1.5. 問題の生じている対人場面の分類”で述べた 3 種の対人場面のうち、研究 1 では対人葛藤場面が含まれていなかった。研究 2 のゲームシナリオは対人葛藤場面であるので、研究 2 では対人場面が 3 種とも含まれていた。

状況要因として同じ問題を共有する他者の有無、コントロール方略の対象者との親密性、不満の有無という 3 つも操作されており、合わせて 8 条件が設定された。すべてのシナリオの全文は付録 3 に記載してある。

参加者にシナリオを提示し、参加者が各シナリオの主人公の立場に置かれた状況を想像してもらった。シナリオを提示した後に、操作チェックとして対象者との関係性や不満に関する質問項目が含まれていた。

具体的には、コントロール方略の対象者との親密性の操作チェックのため、対象者との関係性を維持していく必要性がどの程度あるかを 5 件法（1: 全く必要でない—5: 非常に必要である）で回答を求めた。例えばゲームシナリオでは“Kさんと仲良くやっていく必要がどれくらいあると思いますか”という文言により回答を求めた。これは、シナリオの本文中に“親しい”という表記があるのにも関わらず“相手と親しいかどうか”と尋ねるのは操作チェックの意図があからさまであると判断したため、その意図を隠す目的で関係維持必要性という質問項目で代用した。親しい間柄というのは他の間柄に比べてポジティブな関係性で見なされやすく(Endo, Heine, & Lehman, 2000)、そのようなポジティブな関係性は自分に多大なる利益をもたらすものなので、自分にとって重要であり、それを維持する必要性は高いと考えられる。

不満についてはシナリオの本文中に“不満”という表記は書いていなかったため、操作チェックとして状況にどの程度不満があるかを5件法（1: 全く不満でない—5: 非常に不満である）で直接尋ねた。例えばゲームシナリオでは“どれくらい不満を感じますか”という文言により回答を求めた。

加えて、操作チェックの目的から外れるが、コントロール方略を実行する必要性も5件法（1: 全く必要でない—5: 非常に必要である）で回答を求めた。続いて、行う可能性が高いコントロール方略をそう考えた理由とともに上位3つまで自由に記述してもらった。

その後、研究1で用いた分類法に基づき、5種の一次的コントロール方略と1種の二次的コントロール方略を具体的に提示した。すべてのシナリオでの各コントロール方略は付録3に記載してある。その後、すべてのコントロール方略についてどの程度行いたいと思うかを5件法（1: 非常に行いたい—5: 全く行いたくない）で回答を求めた⁷。具体的には“各行動が実際に行えるものとする、あなたは各行動をどれくらい行いたいと思いますか”という文言により回答を求めた。その他、本研究の主眼から外れるが、すべてのコントロール方略について以下の質問項目も含まれており、5件法で回答を求めた。(a) 各コントロール方略実行による状況改善度（1: 全く良くなる—5: 非常に良くなる）(b) 各コントロール方略実行による相手との関係性の変化（1: 非常に悪くなる—5: 非常に良くなる）という2つであった。以上がシナリオパートである。

質問紙の中には個人特性を測定する尺度も含まれていた。参加者のシャイネスを測定するために相川（1991）が作成した特性シャイネス尺度を使用した。16項目から構成され、“私は人がいる所では気おくれしてしまう”や“私は新しい友人がすぐできる（反転項目）”が項目例である。また、参加者の集団主義的傾向を測定するために Yamaguchi et al. (1995) が作成した集団主義的傾向尺度を使用した。14項目から構成され、“困難な状況にあっても自分の友人集団に留まる”や“自

⁷ 値が高いほど実行意図が高いということを示すために反転処理を行った。結果ではそれを用いる。

分の友人集団のために自分の利益を犠牲にすることはない（反転項目）”が項目例である。これらはいずれも5件法（1: 全くあてはまらない—5: 非常にあてはまる）で回答を求めた。その他、本研究の主眼から外れるが、Diener, Emmons, Larsen, & Griffin (1985) の人生満足感尺度5項目も7件法で測定された。個人特性尺度のうちどれを先に回答するかという順番はランダムに決定された。以上が個人特性尺度パートである。

以上、質問紙はシナリオパートと個人特性尺度パートの2つから構成されており、この2つの提示順はランダムに入れ替わっていた。

2.2.3. 結果：記述統計量

リッカート尺度で回答を求めた21項目の平均値と標準偏差をシナリオごとにまとめた（表7から表11）。

各シナリオで行う可能性が高いコントロール方略とそう考えた理由を上位3つまで自由に記述してもらった質的データは無回答が多く、サークルシナリオで33.20%、共同作業シナリオで27.78%、試験シナリオで19.78%、学園祭シナリオで41.46%、ゲームシナリオで38.35%であった。自由記述を三度にわたって繰り返し求めたことは回答者にとって大きな負担であり、妥当性の高い質的データは得られなかったと考えられる。したがって、これらの質的データについて積極的に分析を行うことは避ける。

表 7: 研究 2 のサークルシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係維持必要性	4.15	1.14
状況に対する不満	3.70	1.23
コントロール方略実行必要性	4.36	1.09
実行意図 (個人直接)	3.90	1.25
実行意図 (個人間接)	3.32	1.19
実行意図 (代理)	2.68	1.26
実行意図 (集団直接)	3.28	1.29
実行意図 (集団間接)	2.97	1.22
実行意図 (二次的)	3.14	1.26
方略実行後の状況改善度 (個人直接)	3.81	1.01
方略実行後の状況改善度 (個人間接)	3.18	0.97
方略実行後の状況改善度 (代理)	2.99	1.09
方略実行後の状況改善度 (集団直接)	3.29	1.09
方略実行後の状況改善度 (集団間接)	2.92	1.02
方略実行後の状況改善度 (二次的)	2.78	1.11
方略実行後の関係性変化 (個人直接)	3.21	0.93
方略実行後の関係性変化 (個人間接)	3.11	0.77
方略実行後の関係性変化 (代理)	2.72	0.74
方略実行後の関係性変化 (集団直接)	2.90	0.86
方略実行後の関係性変化 (集団間接)	2.89	0.79
方略実行後の関係性変化 (二次的)	2.98	0.82

表 8: 研究 2 の共同作業シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係維持必要性	3.93	1.08
状況に対する不満	3.48	1.20
コントロール方略実行必要性	4.26	0.97
実行意図 (個人直接)	3.68	1.28
実行意図 (個人間接)	3.78	1.13
実行意図 (代理)	2.63	1.23
実行意図 (集団直接)	3.17	1.25
実行意図 (集団間接)	3.13	1.20
実行意図 (二次的)	3.20	1.24
方略実行後の状況改善度 (個人直接)	3.80	0.98
方略実行後の状況改善度 (個人間接)	3.27	1.00
方略実行後の状況改善度 (代理)	2.99	1.01
方略実行後の状況改善度 (集団直接)	3.35	1.01
方略実行後の状況改善度 (集団間接)	2.98	1.00
方略実行後の状況改善度 (二次的)	2.82	1.17
方略実行後の関係性変化 (個人直接)	3.06	0.89
方略実行後の関係性変化 (個人間接)	3.17	0.69
方略実行後の関係性変化 (代理)	2.65	0.74
方略実行後の関係性変化 (集団直接)	2.85	0.80
方略実行後の関係性変化 (集団間接)	2.89	0.79
方略実行後の関係性変化 (二次的)	3.05	0.79

表 9: 研究 2 の試験シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係維持必要性	4.21	0.85
状況に対する不満	2.90	1.14
コントロール方略実行必要性	3.22	1.32
実行意図 (個人直接)	4.11	1.22
実行意図 (個人間接)	3.25	1.37
実行意図 (代理)	2.69	1.33
実行意図 (集団直接)	2.80	1.36
実行意図 (集団間接)	2.71	1.25
実行意図 (二次的)	3.06	1.26
方略実行後の状況改善度 (個人直接)	4.12	0.99
方略実行後の状況改善度 (個人間接)	3.33	1.06
方略実行後の状況改善度 (代理)	3.21	1.08
方略実行後の状況改善度 (集団直接)	3.33	1.08
方略実行後の状況改善度 (集団間接)	3.06	0.99
方略実行後の状況改善度 (二次的)	2.85	1.12
方略実行後の関係性変化 (個人直接)	3.06	0.91
方略実行後の関係性変化 (個人間接)	2.92	0.76
方略実行後の関係性変化 (代理)	2.59	0.79
方略実行後の関係性変化 (集団直接)	2.70	0.82
方略実行後の関係性変化 (集団間接)	2.78	0.72
方略実行後の関係性変化 (二次的)	3.00	0.67

表 10: 研究 2 の学園祭シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係維持必要性	3.81	1.02
状況に対する不満	2.81	1.24
コントロール方略実行必要性	3.75	1.09
実行意図 (個人直接)	3.77	1.26
実行意図 (個人間接)	3.33	1.16
実行意図 (代理)	2.78	1.25
実行意図 (集団直接)	3.09	1.24
実行意図 (集団間接)	2.93	1.14
実行意図 (二次的)	3.38	1.27
方略実行後の状況改善度 (個人直接)	3.83	1.02
方略実行後の状況改善度 (個人間接)	3.33	0.95
方略実行後の状況改善度 (代理)	3.23	0.97
方略実行後の状況改善度 (集団直接)	3.39	0.99
方略実行後の状況改善度 (集団間接)	3.18	0.95
方略実行後の状況改善度 (二次的)	3.11	1.01
方略実行後の関係性変化 (個人直接)	3.15	0.93
方略実行後の関係性変化 (個人間接)	3.05	0.69
方略実行後の関係性変化 (代理)	2.76	0.72
方略実行後の関係性変化 (集団直接)	2.91	0.79
方略実行後の関係性変化 (集団間接)	2.92	0.74
方略実行後の関係性変化 (二次的)	3.21	0.78

表 11: 研究 2 のゲームシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
関係維持必要性	3.94	1.11
状況に対する不満	3.41	1.42
コントロール方略実行必要性	3.12	1.57
実行意図 (個人直接)	3.59	1.44
実行意図 (個人間接)	3.12	1.32
実行意図 (代理)	2.40	1.21
実行意図 (集団直接)	2.74	1.32
実行意図 (集団間接)	2.70	1.25
実行意図 (二次的)	2.85	1.30
方略実行後の状況改善度 (個人直接)	3.49	1.15
方略実行後の状況改善度 (個人間接)	3.07	1.07
方略実行後の状況改善度 (代理)	2.86	1.08
方略実行後の状況改善度 (集団直接)	3.05	1.16
方略実行後の状況改善度 (集団間接)	2.93	1.07
方略実行後の状況改善度 (二次的)	2.66	1.05
方略実行後の関係性変化 (個人直接)	2.71	0.95
方略実行後の関係性変化 (個人間接)	2.71	0.82
方略実行後の関係性変化 (代理)	2.40	0.85
方略実行後の関係性変化 (集団直接)	2.45	0.87
方略実行後の関係性変化 (集団間接)	2.60	0.83
方略実行後の関係性変化 (二次的)	2.94	0.79

個人特性について α 係数を算出したところ、特性シャイネス尺度は $\alpha = .91$ 、集団主義的傾向尺度は $\alpha = .80$ 、人生満足感尺度は $\alpha = .82$ となった。内的一貫性は十分に高いと判断し、以下の分析では合算平均得点をそれぞれの個人特性の得点として使用する。個人特性の平均値と標準偏差は表 12 のようになった。

表 12: 研究 2 の個人特性の記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差	α
シャイネス	2.96	0.72	.91
集団主義	3.00	0.51	.80
人生満足感	3.82	1.24	.82

シャイネス尺度および集団主義的傾向尺度は 5 件法、人生満足感尺度は 7 件法であった。

各コントロール方略の実行意図について、5 つのシナリオ間で信頼性が高いかどうかを検討するため、クロンバックの α 信頼性係数を算出したところ、個人直接コントロール方略は $\alpha = .72$ 、個人間接コントロール方略は $\alpha = .75$ 、代理コントロール方略は $\alpha = .76$ 、集団直接コントロール方略は $\alpha = .77$ 、集団間接コントロール方略は $\alpha = .77$ 、二次的コントロール方略は $\alpha = .67$ となった。内的一貫性は十分に高いと判断し、以下の分析では 5 つのシナリオの平均値を各コントロール方略の志向性得点として使用する。いずれも得点が高いほど、そのコントロール方略を志向する度合いが高いことを表している。

2.2.4. 結果分析 1: 個人特性

各コントロール方略の志向性とシャイネスおよび集団主義的傾向との相関係数を算出したところ、表 13 のようになった。仮説通り、個人直接コントロール方略とシャイネスとの間に有意な負の相関が得られ ($r = -.159, p < .05$)、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略と集団主義的傾向との間に有意な正の相関が得られた (それぞれ $r = .153, p < .05$ 、 $r = .239, p < .01$)。また、個人間接コントロール方略と集団主義的傾向の間にも有意な正の相関が得られた ($r = .193, p < .05$)。ただし、相関係数の絶対値に着目すると、ほとんど相関なし、または弱い相関であり、解釈には注意を要する。その他の相関係数はすべて有意ではなかった。

表 13: 研究 2 の各コントロール方略と個人特性との相関係数

	個人直接	個人間接	代理	集団直接	集団間接	二次的
シャイネス	-.159*	-.050	.038	.008	-.046	-.027
集団主義	.079	.193**	.090	.153*	.239**	.032
平均値	3.80	3.34	2.63	3.00	2.87	3.14
標準偏差	0.89	0.88	0.89	0.93	0.88	0.83

* $p < .05$. ** $p < .01$.

2.2.5. 結果分析 2: 状況要因

操作チェック項目の関係維持必要性和不満度について、5つのシナリオ間で信頼性が高いかどうかを検討するため、クロンバックの α 信頼性係数を算出したところ、関係維持必要性は $\alpha = .74$ 、不満度は $\alpha = .79$ となった。内的一貫性は十分に高いと判断し、操作チェックでは5つのシナリオの平均値をそれぞれ使用する。いずれも得点が高いほど、関係維持必要性および不満度が高いことを表している。

親密性高条件は親密性低条件よりも関係維持必要性の評定値が有意に高かった ($M = 4.17$ vs. $M = 3.88$, $t(217) = 3.05$, $p = .003$)。また、不満あり条件は不満なし条件よりも不満度の評定値が有意に高かった ($M = 3.87$ vs. $M = 2.65$, $t(216) = 13.03$, $p < .001$)。したがって、コントロール方略の対象者との親密性および状況に対する不満の有無の2つの状況要因は、操作に成功していたと判断できる。

各コントロール方略を志向する度合いについて、シナリオごとにまとめたものが表 14 である。これを見ると明らかなように、共同作業シナリオを除いて4つのシナリオで個人直接コントロール方略の評定値が最も高く、研究 1 と同じようなパターンであった。

表 14: 研究 2 の各コントロール方略の実行意図

シナリオ	個人直接	個人間接	代理	集団直接	集団間接	二次的
サークル	3.90	3.32	2.68	3.28	2.97	3.14
共同作業	3.68	3.78	2.63	3.17	3.13	3.20
試験	4.11	3.25	2.69	2.80	2.71	3.06
学園祭	3.77	3.33	2.78	3.09	2.93	3.38
ゲーム	3.59	3.12	2.40	2.74	2.70	2.85
平均	3.81	3.38	2.64	3.02	2.90	3.13

状況要因の影響を見ていくため、結果分析 1 と同じく以下の分析では 5 つのシナリオの平均値を各コントロール方略の志向性得点として使用する（表 14 の最下段の条件間比較）。6（コントロール方略種類：参加者内要因）× 2（他者有無）× 2（親密性）× 2（不満有無）× 2（参加者性別）の多変量分散分析を行ったところ、コントロール方略種類の主効果が有意であった（Wilks' Lambda = .48, $F(5, 191) = 40.92$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .52$ ）。有意水準 5% で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、個人直接コントロール方略の評定値が最も高く、次いで個人間接コントロール方略が高かった。さらに、一次の交互作用効果が 3 つ（コントロール方略種類 × 他者有無、コントロール方略種類 × 親密性、コントロール方略種類 × 不満有無）、二次の交互作用効果が 2 つ（コントロール方略種類 × 他者有無 × 不満有無、コントロール方略種類 × 不満有無 × 参加者性別）有意であった（ $F(5, 191)s > 3.03$, $ps < .05$ ）。他の効果はすべて有意ではなかった（ $F(5, 191)s < 1.85$, $ps > .10$ ）。

以下では二次の交互作用効果についての積極的な解釈は控え、本研究の主眼である一次の交互作用効果について詳細に見ていく。関連する変数 2 つを要因とした多変量分散分析を三度実行し（コントロール方略種類 × 他者有無・親密性・不満有

無のどれか1つ)、下位検定には有意水準5%のBonferroni法による多重比較を一貫して使用した。

1つ目に、コントロール方略種類と他者有無の交互作用効果についての多変量分散分析の結果 (Wilks' Lambda = .77, $F(5, 207) = 12.28$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .23$)、仮説通り、同じ問題を共有する他者がいる条件の方がいない条件よりも代理コントロール方略、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略の評定値が有意に高く (それぞれ順番に $M = 2.81$ vs. 2.44 、 $M = 3.32$ vs. 2.71 、 $M = 3.01$ vs. 2.74)、個人直接コントロール方略は有意に逆のパターンを示した ($M = 3.60$ vs. 3.96)。個人間接コントロール方略と二次的コントロール方略では、他者あり条件と他者なし条件とで評定値に有意な差は見られなかった (それぞれ順番に $M = 3.22$ vs. 3.43 、 $M = 3.11$ vs. 3.16)。

2つ目に、コントロール方略種類と親密性の交互作用効果についての多変量分散分析の結果 (Wilks' Lambda = .91, $F(5, 207) = 4.03$, $p = .002$, $\eta_p^2 = .09$)、仮説通り、コントロール方略の対象者と親しくない条件の方が親しい条件よりも代理コントロール方略、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略の評定値が有意に高かった (それぞれ順番に $M = 2.84$ vs. 2.40 、 $M = 3.15$ vs. 2.85 、 $M = 3.04$ vs. 2.70)。しかし、仮説とは異なり、個人直接コントロール方略では親密性低条件と親密性高条件とで評定値に有意な差は見られず ($M = 3.69$ vs. 3.89)、個人間接コントロール方略と二次的コントロール方略でも同様であった (それぞれ順番に $M = 3.37$ vs. 3.30 、 $M = 3.17$ vs. 3.11)。

3つ目に、コントロール方略種類と不満有無の交互作用効果についての多変量分散分析の結果 (Wilks' Lambda = .78, $F(5, 207) = 11.81$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .22$)、仮説通り、状況に不満を抱えている条件の方がそうでない条件よりも個人直接コントロール方略の評定値が有意に高く ($M = 4.11$ vs. 3.50)、二次的コントロール方略の評定値が有意に低かった ($M = 2.86$ vs. 3.40)。また、代理コントロール方略と集団直接コントロール方略についても、不満あり条件の方が不満なし条件よりも評定値が

有意に高かった（それぞれ順番に $M = 2.76$ vs. 2.48 、 $M = 3.15$ vs. 2.86 ）。個人間接コントロール方略と集団間接コントロール方略では、不満あり条件と不満なし条件とで評定値に有意な差は見られなかった（それぞれ順番に $M = 3.43$ vs. 3.24 、 $M = 2.91$ vs. 2.83 ）。

2.2.6. 考察

コントロール方略分類法の構成概念妥当性を検討するため、各コントロール方略を志向する度合いとシャイネスおよび集団主義的傾向との相関係数を求めたところ、予測通りの相関パターンが得られた。

まず、個人直接コントロール方略を志向する度合いはシャイネスと負に相関していた。この結果はシャイな人が他者からの拒否を怖がり（藤井・相川, 2013; Jackson et al., 2000; Sawaumi, 2007）、そのような結果につながりやすい個人直接コントロール方略を好まないということを示している。

2つ目に、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略を志向する度合いは集団主義的傾向と正に相関していた。この結果は集団主義的な人は個人よりも集団を重視し（Yamaguchi, 1994; Yamaguchi et al., 1995）、集団として行動するコントロール方略を好むということを示している。また、個人間接コントロール方略を志向する度合いが集団主義的傾向と正に相関していた。これは予測していなかった結果であるが、集団主義的な人がユニークネス志向を避ける傾向より説明できると考えられる。集団主義的な人はユニークであることを嫌うので（Yamaguchi et al., 1995）、自分を目立たせるような方略を避けると考えられる。そのために、行為者の働き（agency）を隠す作用がある個人間接コントロール方略を用い（Yamaguchi, 2001）、自分がコントロール方略を行ったということを対象者に悟られないように行う方略であるといえる。

ただし、相関係数の絶対値が全体的に低かったことは、解釈に注意を要する。これはおそらく、目的2のために状況要因を操作してしまったことが原因であると思われる。3つの独立変数を操作し、計8条件のシナリオを使用したのだが、これら

の差異を無視して、各コントロール方略の志向性と個人特性との相関分析を行ったため、相関係数の絶対値が低くなってしまった可能性が挙げられる⁸。しかし、本分類法の構成概念妥当性から導かれた仮説と一致する方向で有意な相関が得られたため、構成概念妥当性を支持する結果であるといえる。

目的 2 については全体的に仮説通り、コントロール方略分類法の構成概念妥当性を支持する結果が得られた。1 つ目に、同じ問題を共有する他者が周りに存在する時は存在しない時に比べて、他者を巻き込んだ解決法である代理コントロール方略、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略がより志向されていた。この結果より、同じ問題や悩みを抱える人は協力してくれる可能性が高く、コントロール方略のリソースとしての機能を果たしてくれると見なされていると考えられる。また、個人直接コントロール方略に関しても有意差が検出され、周りに同じ問題を共有する他者がいない場合により志向されていた。同じ悩みを抱える人が周りにいなければ、他にリソースが少ないため一人で解決しなければならず、そのような状況では問題に直接的に働きかけたいと思ってしまうのであろう。

2 つ目の状況要因について、コントロール方略の対象者と親しい時は親しくない時に比べて、他者を含む 3 つのコントロール方略がより志向されていなかった。つまり、相手と親しい時にはわざわざ他者を巻き込む必要はなく、他者を取り込む際の余計なコストを避けられるためだと思われる。個人直接コントロール方略に関しては、相手と親しい方がより志向されると予測していたが、有意差を得る結果には至らなかった。これについては平均値を見て明らかなように、個人直接コントロール方略は全体的に評定値が高くなっていた（相手と親しくない条件でも 5 件法で $M = 3.69$ ）。つまり、相手と親しくない時にも個人直接コントロール方略を比較的に志向するという結果であるが、これを実際に選択するかは別の話であり、理想的な選択と現実的な選択の分離は第 III 部以降で詳細に検討する。

⁸ 条件ごとに相関分析を実施すると、概ね仮説通りの相関パターンが得られたが、各条件に割り当てられた人数が十分でなく、有意な相関に至ったものは減少した。

3つ目に、状況に対して不満を抱いている時はそうでない時に比べて、個人直接コントロール方略がより志向され、二次的コントロール方略がより避けられていた。これより、不満を生じさせるような状況においては迅速な解決を望み、解決に最も結びつきやすい個人直接コントロール方略を志向するのだと言える。さらに、二次的コントロール方略は外界に変化をもたらさず、迅速な解決には至りにくい方略であり、不満を抱える状況では避けられる方略であると言える。

以上より、コントロール方略の各分類と個人特性および状況要因との関連に基づいた構成概念妥当性が示された。

なお、全体的にコントロール方略のうち個人直接コントロール方略が最も志向されていた。これは研究1と同じく、Heckhausen & Schulz (1995, 1999) が主張する普遍説、つまり一次的コントロールの優位性と一致する結果であった。

2.3. 第Ⅱ部まとめ

第Ⅱ部では、Yamaguchi (2001) に基づいたコントロール方略の新しい分類法の信頼性および妥当性を実証的に示した。研究1にて、質的データの分析により分類法の信頼性が確認された。研究2にて、個人特性および状況要因との関連により構成概念妥当性が確認された。

第Ⅱ部での重要なポイントは、一次的コントロール方略の中にも個人直接コントロール方略以外に様々な方略が存在し、各コントロール方略が互いに差別化されるということである。これより、先行研究でしばしば行われてきた、一次的コントロールとして一括に扱うことの危険性が示された。

第Ⅲ部：コントロール方略の理想的選択と現実的選択の分離

3.1. 研究3：各コントロール方略の特徴分析

3.1.1. 目的

研究3では、本論文の核となるアイデアである一次的コントロール方略の詳細な分類について、各方略の特徴を更に掘り下げていく。具体的には、各一次的コント

ロール方略の持つ特徴を探索的に見ていく⁹。例えば、Yamaguchi (2001) によると、一次的コントロール方略の中でも個人直接コントロール方略は最も対人関係に悪影響を及ぼし、相手との関係性や調和を乱しやすいとされており、他の一次的コントロール方略は逆に調和の維持には有効であるとされている (p. 226, Table 12.1)。しかし、そのような特徴についてのデータはまだないため、研究 3 ではその点も含め、各方略の特徴を明らかにしていく。仮説としては、個人直接コントロール方略は他のコントロール方略に比して、対人関係に悪影響を及ぼしやすいと人々に捉えられていると予測される。

その他、研究 2 で個人直接コントロール方略が問題解決に最も有効であると評価されていた。この結果が再現されるかどうかも含めて検討する。

加えて、当人が望んで選択する方略と実際にとる方略が異なる可能性に着目する。日本人のコントロール志向性に関して、相対説と普遍説という対立する 2 つの立場があり、それに対する解釈として理想的な選択と現実的な選択の差異が十分に考慮されていないという可能性が挙げられた。したがって、理想的な選択の検討のため、すべてのコントロール方略について当人にとっての好ましさを調査する。現実的な選択の検討については、現実の世界では様々なコントロール方略のレパートリーの中から 1 つを選択し、それを実行することが多いと思われる。よって、提示したコントロール方略の中から実行する可能性の高いものを選んでもらう。

3.1.2. 方法

神奈川大学の学生 109 名（男性 76 名、女性 29 名、性別無回答 4 名、年齢 $M = 20.35$ 、年齢 $SD = 5.22$ ）が研究に参加した。心理学系の講義時間の一部を借りて実施し、講義室内で一斉に下記の質問紙を配布し、回答してもらった。

質問紙では 8 種の架空の状況が提示されていた。そこでは対人場面においての問題が描かれており、各状況において問題の内容は異なっていた。1 つ目と 2 つ目は

⁹ 二次的コントロール方略を研究 3 で含めなかった理由は、コントロール方略の実行が対象者との関係性に与える影響（悪くなる一良くなる）を尋ねる質問項目が含まれており、二次的コントロール方略は外界に全く働きかけないので、この質問が意味を成さないと判断したためである。

サークルシナリオおよび共同作業シナリオであり、研究 1・研究 2 と同じような状況であった。3 つ目は主人公が寮に住んでいて、ある隣人の部屋から漏れてくる音楽のせいで夜に寝られないという場面であった（以下、騒音シナリオと表記する）。4 つ目は主人公がアパートに住んでいて、ある近隣住民が犬の散歩をしている時にフンを片付けないという場面であった（以下、フンシナリオと表記する）。5 つ目は主人公がアパートに住んでいて、隣に住んでいるある住人の飼い犬の鳴き声がうるさいという場面であった（以下、鳴き声シナリオと表記する）。6 つ目は主人公の隣の家に住むある人が、ゴミ捨てるルールを守らずにゴミを出しているという場面であった（以下、ゴミシナリオと表記する）。7 つ目は主人公の大学のクラスで文化祭の出し物をする予定で、ある文化祭委員が役割を果たしていないという場面であった（以下、文化祭シナリオと表記する）。8 つ目は主人公があるバイトをしていて、同じシフトに入っているある同僚が手を抜いているという場面であった（以下、バイトシナリオと表記する）。

これら 8 つの状況は、コントロール方略が関係する対人場面を東京大学の複数の学部生に挙げてもらい、全員で話し合っただけでそのシナリオプールの中から本研究での使用に適切と思われるシナリオとして選択されたものである。すべての状況は一般的な大学生が経験することがあり、容易に想像可能だということは東京大学の複数の学部生により確認済みである。すべてのシナリオの全文は付録 4 に記載してある。質問紙の中ではシナリオの提示順序をランダムにした。

“1.5. 問題の生じている対人場面の分類” で述べた 3 種の対人場面のうち、集団達成場面がサークルシナリオ、共同作業シナリオ、文化祭シナリオであり、その他の 5 つは対人葛藤場面である。

はじめに参加者にシナリオを提示し、参加者が各シナリオの主人公の立場に置かれた状況を想像してもらった。次に、本論文のコントロール方略の分類法に基づき、5 種の一次的コントロール方略を具体的に提示した。すべてのシナリオでの各一次的コントロール方略は付録 4 に記載してある。その後、それぞれの方略につき (a)

問題解決にとっての有効性 (b) 相手との関係性への影響 (c) 自分にとっての好ましさを尋ねた。1つ目に、各方略を実行した結果、どの程度問題が解決すると思うかを5件法(1: ほとんど解決する—5: ほとんど解決しない)で回答を求めた。具体的には“一般的に上述の問題がどのくらい解決すると思いますか”という文言により回答を求めた。2つ目に、各方略を実行した結果、対象者との関係性がどうなると思うかを7件法(1: 非常に良くなる—7: 非常に悪くなる)で回答を求めた。例えばサークルシナリオでは“Nさんとの関係がどうなると思いますか”という文言により回答を求めた。3つ目に、各方略についてどの程度好ましいかを5件法(1: とても好ましい—5: とても好ましくない)で回答を求めた。具体的には“あなたにとってどのような解決の仕方が好ましいですか”という文言により回答を求めた。

最後に、行う可能性が最も高い方略および行う可能性が最も低い方略を5種の中から1つ選んでもらった。具体的には“自分が行う可能性が一番高いものはどれですか”および“自分が行う可能性が一番低いものはどれですか”という文言により回答を求めた。

3.1.3. 結果：記述統計量

リッカート尺度で回答を求めた各コントロール方略についての3種の評価項目はすべて反転処理を施し、それぞれ得点が高いほど、問題解決に有効である、相手との関係性が良くなる、個人的に好ましい、ということを表している。これらの平均値と標準偏差をシナリオごとにまとめた(表15から表22)。

表 15: 研究 3 のサークルシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.34	1.00
問題解決有効性 (個人間接)	2.78	1.25
問題解決有効性 (代理)	3.51	1.07
問題解決有効性 (集団直接)	3.87	0.84
問題解決有効性 (集団間接)	3.37	1.12
対人関係影響 (個人直接)	3.67	1.25
対人関係影響 (個人間接)	3.83	1.12
対人関係影響 (代理)	3.65	1.04
対人関係影響 (集団直接)	4.07	1.27
対人関係影響 (集団間接)	4.31	1.21
個人的好ましさ (個人直接)	3.51	0.97
個人的好ましさ (個人間接)	2.81	1.24
個人的好ましさ (代理)	3.36	1.09
個人的好ましさ (集団直接)	3.73	1.06
個人的好ましさ (集団間接)	3.42	1.22

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 16: 研究 3 の共同作業シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.59	0.95
問題解決有効性 (個人間接)	2.44	1.03
問題解決有効性 (代理)	3.41	1.03
問題解決有効性 (集団直接)	3.90	0.91
問題解決有効性 (集団間接)	3.29	1.08
対人関係影響 (個人直接)	3.28	1.22
対人関係影響 (個人間接)	3.62	1.13
対人関係影響 (代理)	3.28	1.18
対人関係影響 (集団直接)	3.83	1.21
対人関係影響 (集団間接)	4.01	1.17
個人的好ましさ (個人直接)	3.45	1.05
個人的好ましさ (個人間接)	2.47	1.05
個人的好ましさ (代理)	2.91	1.20
個人的好ましさ (集団直接)	3.77	0.95
個人的好ましさ (集団間接)	3.27	1.11

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 17: 研究 3 の騒音シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.84	1.06
問題解決有効性 (個人間接)	2.04	0.99
問題解決有効性 (代理)	4.11	0.82
問題解決有効性 (集団直接)	3.95	0.92
問題解決有効性 (集団間接)	3.29	1.14
対人関係影響 (個人直接)	2.94	1.21
対人関係影響 (個人間接)	3.83	1.07
対人関係影響 (代理)	3.58	1.05
対人関係影響 (集団直接)	3.33	1.06
対人関係影響 (集団間接)	4.03	1.00
個人的好ましさ (個人直接)	3.37	1.19
個人的好ましさ (個人間接)	2.21	1.09
個人的好ましさ (代理)	3.72	1.05
個人的好ましさ (集団直接)	3.60	1.02
個人的好ましさ (集団間接)	3.35	1.08

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 18: 研究 3 のフンシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.78	1.03
問題解決有効性 (個人間接)	2.62	1.08
問題解決有効性 (代理)	3.68	1.06
問題解決有効性 (集団直接)	3.97	0.99
問題解決有効性 (集団間接)	3.37	1.18
対人関係影響 (個人直接)	3.01	1.36
対人関係影響 (個人間接)	3.40	1.23
対人関係影響 (代理)	3.66	0.96
対人関係影響 (集団直接)	3.42	1.09
対人関係影響 (集団間接)	4.04	1.13
個人的好ましさ (個人直接)	3.42	1.16
個人的好ましさ (個人間接)	2.37	1.05
個人的好ましさ (代理)	3.43	1.07
個人的好ましさ (集団直接)	3.66	1.06
個人的好ましさ (集団間接)	3.40	1.07

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 19: 研究 3 の鳴き声シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.30	1.14
問題解決有効性 (個人間接)	1.92	0.87
問題解決有効性 (代理)	3.53	0.97
問題解決有効性 (集団直接)	3.75	0.99
問題解決有効性 (集団間接)	3.21	1.15
対人関係影響 (個人直接)	2.86	1.03
対人関係影響 (個人間接)	3.93	1.16
対人関係影響 (代理)	3.65	0.90
対人関係影響 (集団直接)	3.31	1.03
対人関係影響 (集団間接)	4.02	0.97
個人的好ましさ (個人直接)	3.19	1.09
個人的好ましさ (個人間接)	2.06	0.88
個人的好ましさ (代理)	3.38	1.05
個人的好ましさ (集団直接)	3.66	0.97
個人的好ましさ (集団間接)	3.42	1.07

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 20: 研究 3 のゴミシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.24	1.14
問題解決有効性 (個人間接)	2.32	1.10
問題解決有効性 (代理)	3.68	1.03
問題解決有効性 (集団直接)	3.77	0.91
問題解決有効性 (集団間接)	3.49	1.11
対人関係影響 (個人直接)	2.78	1.24
対人関係影響 (個人間接)	3.52	1.10
対人関係影響 (代理)	3.59	0.99
対人関係影響 (集団直接)	3.28	1.19
対人関係影響 (集団間接)	4.09	1.07
個人的好ましさ (個人直接)	2.96	1.20
個人的好ましさ (個人間接)	2.37	1.01
個人的好ましさ (代理)	3.36	1.09
個人的好ましさ (集団直接)	3.49	1.18
個人的好ましさ (集団間接)	3.50	1.18

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 21: 研究 3 の文化祭シナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.35	1.04
問題解決有効性 (個人間接)	3.35	1.15
問題解決有効性 (代理)	3.38	1.02
問題解決有効性 (集団直接)	3.84	0.81
問題解決有効性 (集団間接)	3.98	0.95
対人関係影響 (個人直接)	3.30	1.15
対人関係影響 (個人間接)	4.03	1.09
対人関係影響 (代理)	3.52	0.94
対人関係影響 (集団直接)	3.86	1.07
対人関係影響 (集団間接)	4.42	1.07
個人的好ましさ (個人直接)	3.17	1.01
個人的好ましさ (個人間接)	3.30	1.11
個人的好ましさ (代理)	3.12	1.02
個人的好ましさ (集団直接)	3.79	0.91
個人的好ましさ (集団間接)	3.93	0.94

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

表 22: 研究 3 のバイトシナリオの記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差
問題解決有効性 (個人直接)	3.56	1.09
問題解決有効性 (個人間接)	2.55	1.05
問題解決有効性 (代理)	3.99	1.01
問題解決有効性 (集団直接)	3.67	1.04
問題解決有効性 (集団間接)	3.33	1.08
対人関係影響 (個人直接)	2.81	1.22
対人関係影響 (個人間接)	3.70	1.04
対人関係影響 (代理)	3.60	1.07
対人関係影響 (集団直接)	3.31	1.11
対人関係影響 (集団間接)	4.16	1.06
個人的好ましさ (個人直接)	3.33	1.23
個人的好ましさ (個人間接)	2.42	1.05
個人的好ましさ (代理)	3.77	1.11
個人的好ましさ (集団直接)	3.50	1.04
個人的好ましさ (集団間接)	3.35	1.10

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

3.1.4. 結果: 各一次的コントロール方略の特徴分析

各一次的コントロール方略に対する 3 種の評価について、8 つのシナリオ間で信頼性が高いかどうかを検討するため、クロンバックの α 信頼性係数を算出したところ、問題解決にとっての有効性は $\alpha s > .78$ 、相手との関係性への影響は $\alpha s > .85$ 、自分にとっての好ましさは $\alpha s > .83$ となった。内的一貫性は十分に高いと判断し、以下の分析では 8 つのシナリオの平均値を各一次的コントロール方略の問題解決有効性得点、対人関係影響得点、個人的好ましさ得点として使用する。各方略に対するこれらの 3 種の評価の平均値は表 23 のようになった。

表 23: 研究 3 の各一次的コントロール方略に対する 3 種の評価

	個人直接	個人間接	代理	集団直接	集団間接
問題解決有効性	3.52	2.50	3.68	3.86	3.41
対人関係影響	3.07	3.73	3.55	3.54	4.13
個人的好ましさ	3.34	2.52	3.42	3.67	3.48

問題解決有効性は 5 件法、対人関係影響は 7 件法、個人的好ましさは 5 件法であった。

問題解決にとっての有効性得点に対して、コントロール方略種類 (5 水準) を要因とする参加者内分散分析を行ったところ、その主効果が有意であった ($F(4, 102) = 55.43, p < .001$)。そこで有意水準 5% で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、集団直接コントロール方略が他の 4 種よりも有意に高く、個人間接コントロール方略が他の 4 種よりも有意に低かった。また、代理コントロール方略が集団間接コントロール方略よりも有意に高かった。

相手との関係性への影響得点に対して、コントロール方略種類 (5 水準) を要因とする参加者内分散分析を行ったところ、その主効果が有意であった ($F(4, 102) = 31.22, p < .001$)。そこで有意水準 5% で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、集団間接コントロール方略が他の 4 種よりも有意に高く、個人直接コントロール方略が他の 4 種よりも有意に低かった。

自分にとっての好ましさ得点に対して、コントロール方略種類 (5 水準) を要因とする参加者内分散分析を行ったところ、その主効果が有意であった ($F(4, 100) = 27.15, p < .001$)。そこで有意水準 5% で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、個人間接コントロール方略が他の 4 種よりも有意に低かった。また、集団直接コントロール方略が個人直接コントロール方略および代理コントロール方略よりも有意に高かった。

次に、行う可能性が最も高いものとして選択された度数を表 24 にまとめる。これを見ると、シナリオによってばらつきがあるものの、個人直接コントロール方略、代理コントロール方略および集団直接コントロール方略が選択される傾向が見られ、個人間接コントロール方略が選択されない傾向が見られた。表 24 最下段の合計度数に対し 1×5 のカイ二乗検定を行ったところ、 $\chi^2(4) = 54.68, p < .001$ となった。有意水準 5%としたライアン法による多重比較の結果、個人直接コントロール方略、代理コントロール方略および集団直接コントロール方略が個人間接コントロール方略および集団間接コントロール方略よりも有意に選択されていた。

表 24: 研究 3 の選択可能性が最も高い一次的コントロール方略の度数分布表

	個人直接	個人間接	代理	集団直接	集団間接
サークル	29	16	10	36	17
共同作業	30	12	11	41	15
騒音	32	8	41	15	13
フン	40	5	25	26	13
鳴き声	25	9	20	35	19
ゴミ	19	11	30	21	26
文化祭	19	36	6	22	24
バイト	30	14	37	18	10
合計	224	111	180	214	137

続いて、行う可能性が最も低いものとして選択された度数を表 25 にまとめる。これを見ると、シナリオによってばらつきがあるものの、個人直接コントロール方略および個人間接コントロール方略が選択される傾向が見られ、集団直接コントロール

ール方略が選択されない傾向が見られた。表 25 最下段の合計度数に対し 1×5 のカイ二乗検定を行ったところ、 $\chi^2(4) = 227.72, p < .001$ となった。有意水準 5% としたライアン法による多重比較の結果、代理コントロール方略と集団間接コントロール方略のペアを除き、すべてのペアにおいて有意差が観測された。

表 25: 研究 3 の選択可能性が最も低い一次的コントロール方略の度数分布表

	個人直接	個人間接	代理	集団直接	集団間接
サークル	29	30	20	8	21
共同作業	23	33	28	6	19
騒音	37	48	6	6	12
フン	20	54	14	7	14
鳴き声	26	50	8	11	13
ゴミ	48	29	8	8	14
文化祭	40	16	36	5	10
バイト	20	47	11	11	20
合計	243	307	131	62	123

3.1.5. 考察

研究 3 では一次的コントロール方略間の差異に着目し、各方略の持つ特徴や選択されやすさを調査した。

問題解決にとっての有効性について、集団直接コントロール方略の評定値が最も高く、個人間接コントロール方略の評定値が最も低かった。これは、研究 2 の表 7 から表 11 に載せた状況改善度の平均値の結果と異なっており、そこでは個人直接コントロール方略が最も解決に有効だと評定されていた。これは研究 2 と研究 3

で使用したシナリオの違いに起因すると考えられる。研究 2 のシナリオでは“同じ問題を共有する人の有無”および“状況に対する不満の有無”が操作されていたのに対し、研究 3 で用いたシナリオでは、すべてにおいて問題を共有する他者が存在しており、描かれた状況に対して不満を持ってしまうような場面であった。同じ状況に置かれた人々が協力して問題に働きかけることで、集団的な働き (collective agency) を強く認知するという傾向は先行研究でも確認されており (Yamaguchi et al., 2005)、集団で直接的に働きかけることが有効であると見なされていたという研究 3 の結果はこれと一貫している。

コントロール方略を行った結果、その対象者との関係性がどうなるかについて尋ねたところ、集団間接コントロール方略の評定値が最も高く、個人直接コントロール方略の評定値が最も低く、後者の結果は仮説と一致していた。平均値に着目すると、この項目は 7 件法で尋ねており、集団間接コントロール方略以外の 4 種は中点の 4 を下回っていた。これは、そもそも研究 3 で提示したシナリオでは、相手が主人公に対して問題を引き起こしているような状況が多く、全体的にネガティブな評価に偏っていたためであると考えられる。よって、集団間接コントロール方略の評定値が他の方略よりも高いという結果であったが、ほぼ中点に位置していたため、積極的な解釈は控える。むしろ、個人直接コントロール方略の評定値が他よりも低かったという結果は着目に値する。これまで、個人直接コントロール方略 (つまり多くの先行研究でいうところの一次的コントロール) は相手との関係性や調和を乱すものとして扱われてきたが (e.g., Yamaguchi, 2001)、これに関する実証的なデータは存在していなかった。本研究ではそれを実証的に示したといえる。

個人的な好ましさについて、個人間接コントロール方略の評定値が最も低かった。また、集団直接コントロール方略の評定値が個人直接コントロール方略および代理コントロール方略よりも高かった。しかし、参加者に行う可能性の最も高いものを選択してもらったところ、個人直接コントロール方略、代理コントロール方略および集団直接コントロール方略が特に選択されており、行う可能性の最も低いものを

選択してもらったところ、集団直接コントロール方略が最も選択されなかった。前半部分の結果は“自分にとっての好ましき”についてであり、後半部分の結果は“実行可能性の高さ”についてである。この結果を踏まえると、最も好ましい方略（集団直接コントロール方略）と実際に行う方略（それに加えて個人直接コントロール方略および代理コントロール方略）は一致しない可能性が示唆される。

以上より、好ましい方略や望ましい方略（理想的選択）と実際に行う方略や現実的に行う方略（現実的選択）は不一致になる可能性があり、この2つを分けて検討する意義が示された。

3.2. 研究4：理想的選択度合いと現実的選択度合いの測定

3.2.1. 目的

研究3を踏まえ、研究4では各コントロール方略を理想的に取りたい度合いと現実的に取る度合いとに分離して測定することを目指す。

研究4以降で用いるシナリオでは、“1.5. 問題の生じている対人場面の分類”で述べた対人場面の3種の分類に基づき、個人達成場面、集団達成場面、対人葛藤場面を取り上げる。

本研究では、集団直接コントロール方略と集団間接コントロール方略を統合して集団コントロール方略とする。なぜなら、個人達成場面における集団コントロール方略では、行為者は行動を共にする者と協力するような立場には置かれておらず、そのような者と共に問題に働きかける際の行為の直接性を調整するのが難しいと思われるためである。

代わりに、達成場面に大きく関わると考えられる自己改善を通じたコントロール方略も含めて検討する（control via self-improvement; Kurman et al., 2012）。自己改善を通じたコントロール方略とは、最終的に一次的コントロール方略を行える十分な状態になるために、第一段階として二次的コントロール方略を行うというカテゴリである。

したがって、研究 4 では一次的コントロール方略を 4 種、二次的コントロール方略を 1 種、それらに自己改善を通じたコントロール方略を加えた分類法で検討する。本論文の第 II 部では、自己改善を通じたコントロール方略を含めた分類法の妥当性を示していないが、達成場面における分類法（個人直接コントロール、代理コントロール、自己改善を通じたコントロール、二次的コントロールの 4 つのカテゴリ）の妥当性は先行研究により示されている（Kurman et al., 2012）。

対人場面というのは他者が存在する状況であり、他者に働きかける一次的コントロール方略では相手からの反応が予測されるため、他者への配慮によってその方略を取りたいのだから実際には取らないということが起こりうると考えられる。しかし、二次的コントロール方略は、特に相手に影響を及ぼすような手法ではない。したがって仮説としては、一次的コントロール方略では理想的に取りたい度合いと現実的に取る度合いとの間に分離が生じるのに対し、二次的コントロール方略ではそのような分離が生じないと予測される。自己改善を通じたコントロール方略については、このカテゴリが一次的コントロール方略と二次的コントロール方略の混合種と定義されているので、理想的選択度合いと現実的選択度合いの分離が生じるものの、一次的コントロール方略より分離が小さくなると予測される。

3.2.2. 方法

文京学院大学の学生 90 名（男性 25 名、女性 64 名、性別無回答 1 名、年齢 $M=19.34$ 、年齢 $SD=1.10$ ）と奈良大学の学生 45 名（男性 30 名、女性 15 名、年齢 $M=20.89$ 、年齢 $SD=7.14$ ）が研究に参加した¹⁰。心理学系の講義時間の一部を借りて実施し、講義室内で一斉に下記の質問紙を配布し、回答してもらった。

質問紙では 6 種の架空の状況のうち 1 種のみが提示されていた。研究 1 から研究 3 までと異なり、研究 4 以降はシナリオが参加者間要因であり、参加者はラン

¹⁰ 奈良大学の参加者の年齢標準偏差が大きかったのは 68 歳の女性参加者が 1 名含まれていたからである。この 1 名を除外した奈良大学参加者の年齢については $M=19.82$ 、 $SD=0.72$ であり、以下ではこの 1 名のデータを除外した分析結果を報告する。

ダムに割り当てられた。これは、理想的選択度合いと現実的選択度合いのどちらも各方略について尋ねるので、参加者の回答時の負担を増やさないためであった。

各シナリオでは対人場面においての問題が描かれており、各シナリオにおいて問題の内容は異なっていた。1つ目と2つ目は個人達成状況であり、それぞれ就職試験でのプレゼンテーションが失敗に終わってしまった場面（以下、就職試験シナリオと表記する）、ダンス教室でインストラクターの指導する振り付けについていけない場面であった（以下、ダンスシナリオと表記する）。3つ目と4つ目は集団達成状況であり、それぞれ所属する学生団体が文化祭に参加するために提出する企画案に改善点がある場面（以下、文化祭参加シナリオと表記する）、授業のグループ課題で怠けている人がいる場面であった（以下、グループ課題シナリオと表記する）。5つ目と6つ目は対人葛藤状況であり、それぞれ大学寮のある隣人がギターの練習を深夜まで行っていて主人公が寝不足になっている場面（以下、寝不足シナリオと表記する）、大学寮の共有の冷蔵庫をある住人が占領している場面であった（以下、共有冷蔵庫シナリオと表記する）。

これら6つの状況は、コントロール方略が関係する対人場面を心理学の教員や研究員に挙げてもらい、全員で話し合っただけでそのシナリオプールの中から本研究での使用に適切と思われるシナリオとして選択されたものである。すべての状況は一般的な大学生が経験することがあり、容易に想像可能だということは東京大学の複数の学部生により確認済みである。すべてのシナリオの全文は付録5に記載してある。

はじめに参加者に各シナリオの主人公の立場に置かれた状況を想像してもらった。次に、本論文のコントロール方略の分類法のうち、4種の一次的コントロール方略（個人直接コントロール方略、個人間接コントロール方略、代理コントロール方略、集団コントロール方略）と1種の二次的コントロール方略、および自己改善を通じたコントロール方略を具体的に提示した。すべてのシナリオでの各コントロール方略は付録5に記載してある。その後、それぞれの方略につき（a）理想的選択度合い（b）現実的選択度合いを尋ねた。1つ目に、理想としては各方略を取りた

いか、4件法（1: 取りたくない—4: 取りたい）で回答を求めた。具体的には“あなたの理想としては、この対処法をとりたいでしょうか”という文言により数字を1つ選択してもらった。2つ目に、実際には各方略を取りそうか、4件法（1: 取りそうでない—4: 取りそう）で回答を求めた。具体的には“実際には、あなたはこの対処法をとりそうでしょうか”という文言により数字を1つ選択してもらった。

その他、本研究の主眼から外れるが、すべてのコントロール方略について以下の質問項目も含まれていた。1つ目に、各コントロール方略が状況改善に役立つ度合いを4件法により回答を求めた（1: 役立たない—4: 役立つ）。2つ目に、各コントロール方略実行による相手との関係性の変化を5件法により回答を求めた（1: 悪くなる—5: 良くなる）。

3.2.3. 結果：記述統計量

各コントロール方略についてリッカート尺度で回答を求めた4項目の平均値と標準偏差をまとめると表26から表29のようになった。

表 26: 研究4のすべてのシナリオを含めた理想的選択度合いの記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	2.90	0.96
個人間接	2.22	0.93
代理	2.33	1.01
集団	2.73	1.01
自己改善	2.43	1.13
二次的	2.00	1.08

表 27: 研究 4 のすべてのシナリオを含めた現実的選択度合いの記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	2.36	0.95
個人間接	2.19	1.00
代理	2.08	1.03
集団	2.51	0.99
自己改善	2.39	1.14
二次的	2.27	1.18

表 28: 研究 4 のすべてのシナリオを含めた状況改善役立ち度の記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	2.97	0.82
個人間接	2.22	0.83
代理	2.57	0.87
集団	2.93	0.97
自己改善	2.40	1.22
二次的	2.00	1.08

表 29: 研究 4 のすべてのシナリオを含めた相手との関係性変化の記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	2.65	0.88
個人間接	2.46	0.89
代理	2.51	1.01
集団	2.59	1.00
自己改善	2.87	0.96
二次的	2.76	1.03

相手との関係性変化のみ 5 件法により回答を求めた。

3.2.4. 結果：理想的選択度合いと現実的選択度合いのシナリオごとの比較

各シナリオに割り当てられた人数について、無回答のある参加者のデータを除外したところ、就職試験シナリオは 21 名、ダンスシナリオは 21 名、文化祭参加シナリオは 23 名、グループ課題シナリオは 23 名、寝不足シナリオは 19 名、共有冷蔵庫シナリオは 22 名であった。各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いについて、シナリオごとにまとめると表 30 および図 4 のようになった。

表 30: 研究 4 の各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い

シナリオ		個人直接	個人間接	代理	集団	自己改善	二次的
就職試験	理想	<u>2.57</u>	1.71	<u>2.71</u>	<u>2.48</u>	3.67	3.00
	現実	<u>1.76</u>	2.00	<u>1.86</u>	<u>2.10</u>	3.43	3.24
ダンス	理想	<u>2.24</u>	<u>1.76</u>	1.62	2.38	3.29	3.10
	現実	<u>1.86</u>	<u>2.10</u>	1.38	2.14	3.33	3.14
文化祭参加	理想	<u>3.13</u>	<u>2.61</u>	2.09	3.35	1.83	<u>1.48</u>
	現実	<u>2.48</u>	<u>2.26</u>	2.00	3.04	1.74	<u>2.13</u>
グループ課題	理想	<u>2.96</u>	2.30	2.52	3.13	<u>2.30</u>	<u>1.83</u>
	現実	<u>2.30</u>	2.22	2.48	2.91	<u>2.65</u>	<u>2.26</u>
寝不足	理想	<u>3.16</u>	2.42	3.26	2.47	1.90	1.32
	現実	<u>2.63</u>	2.21	2.95	2.26	1.84	1.58
共有冷蔵庫	理想	3.32	2.50	2.09	2.73	1.55	1.14
	現実	3.23	2.32	1.96	2.73	1.36	1.14

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

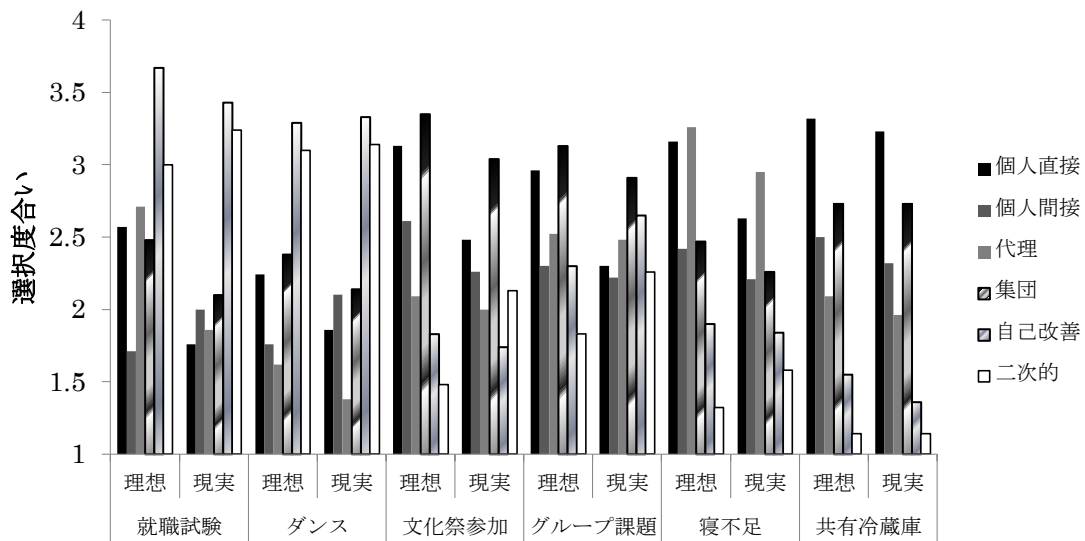


図 4: 研究 4 の各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い

各コントロール方略の選択度合い得点に対して、6 (コントロール方略種類: 参加者内要因) × 2 (選択種類: 参加者内要因) × 6 (シナリオ: 参加者間要因) × 2 (参加者性別: 参加者間要因) の多変量分散分析を行ったところ、参加者性別を含む効果はすべて有意ではなかった ($F_s < 1.29, p > .23$)。そこで参加者性別を除外して三要因の多変量分散分析を行ったところ、コントロール方略種類の主効果 (Wilks' Lambda = .65, $F(5, 119) = 13.05, p < .001, \eta_p^2 = .35$)、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .86, $F(1, 123) = 19.32, p < .001, \eta_p^2 = .14$)、およびシナリオの主効果が有意であった ($F(5, 123) = 2.57, p < .05, \eta_p^2 = .10$)。続いて一次の交互作用効果については、コントロール方略種類 × 選択種類の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .70, $F(5, 119) = 10.35, p < .001, \eta_p^2 = .30$) およびコントロール方略種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .25, $F(25, 444) = 8.01, p < .001, \eta_p^2 = .24$) は有意であったが、選択種類 × シナリオの交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .94, $F(5, 123) = 1.47, ns, \eta_p^2 = .06$)。さらに、コントロール方略種類 × 選択種類 × シナリオの二次の交互作用効果が有意で

あった (Wilks' Lambda = .63, $F(25, 444) = 2.32$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .09$)。以後ではこの二次の交互作用について単純主効果の検定を行っていく。

コントロール方略種類およびシナリオを固定し、理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較していく。その際、有意水準 5%で Bonferroni 法による多重比較を行った。なお、有意な差が見られたペアには表 30 で下線がついている。

多重比較の結果、就職試験シナリオにおいては、個人直接コントロール方略、代理コントロール方略および集団コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。ダンスシナリオにおいては、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高く、個人間接コントロール方略では逆のパターンを示した。文化祭参加シナリオにおいては、個人直接コントロール方略および個人間接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高く、二次的コントロール方略では逆のパターンを示した。グループ課題シナリオにおいては、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高く、自己改善を通じたコントロール方略および二次的コントロール方略では逆のパターンを示した。寝不足シナリオにおいては、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。共有冷蔵庫シナリオにおいては、どのコントロール方略も理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

3.2.5. 考察

研究 4 では、各コントロール方略を理想として取りたい度合いと現実的に取る度合いの 2 種に分離して測定することを試みた。仮説通り、個人直接コントロール方略は一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回り、6 つのシナリオのうち 5 つにおいてその差が有意であった。しかし仮説とは異なり、他の一次的コントロール方略では、理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回ることが多かったが、シナリオによっては逆転することもあり、有意な差の見られる箇所が少なかったりと、結果が一貫していなかった。自己改善を通じたコントロール方略では、1

つのシナリオにおいて現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回っていたが、他のシナリオではそのような差が観測されなかった。二次的コントロール方略についても仮説と異なり、現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回るケースが多く、6つのシナリオのうち2つにおいて有意に上回っていた。

以上より、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに関して、図5のような3分類モデルが提案される。理想的選択度合いから現実的選択度合いを引いた値が、個人直接コントロール方略で最大、二次的コントロール方略で最小となり、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略は中間に位置するというモデルである。このギャップは、絶対値が大きいほど心理的に不適応な状態をもたらすと考えられる。

1つ目に、個人直接コントロール方略にて“理想—現実”のギャップが最大であった。このような状態が続くと、本当は一人で直接的に解決したいのにも関わらず、実際にはそのような方略を選択できていないという状態が続くことになる。これは、本人が理想とする状態と現在の状態との乖離が生じており、心理的な不適応状態に結びつくと考えられる。

2つ目に、二次的コントロール方略にて“理想—現実”のギャップが負であり、状況によってはその絶対値が十分に大きかった。このような状態が続くと、本当は自分に関する側面を変化させることを望んでいなかったとしても、実際にはそのような方略を選択してしまうという状態が続くことになる。これも同様に、本人にとっての理想状態と現実状態との乖離が生じており、心理的な不適応状態に結びつくと思われる。

理想状態と現実状態の乖離が心理的不適応に結びつくという議論は、セルフディスクレパンシー理論から説明される (Higgins, 1987)。この理論によると、自分が理想とする自己像に実際の自己像が到達していないと、失意や落胆のような感情が生じるという。コントロール方略に関する自己像に基づいて説明すると、例えば自分が望む自己像は個人直接コントロール方略を取る自己であるが、現実の自己像は

二次的コントロール方略を取る自己であるという場合が考えられ、このような状態が何度も生じることで失意や落胆を繰り返し経験し、心理的な不適應状態に陥ると考えられる。

続く第Ⅳ部ではこの3分類モデルを実証的に検討していく。さらに、このギャップが最大であった個人直接コントロール方略について、そのギャップが生じるメカニズムについても第Ⅳ部で明らかにしていく。

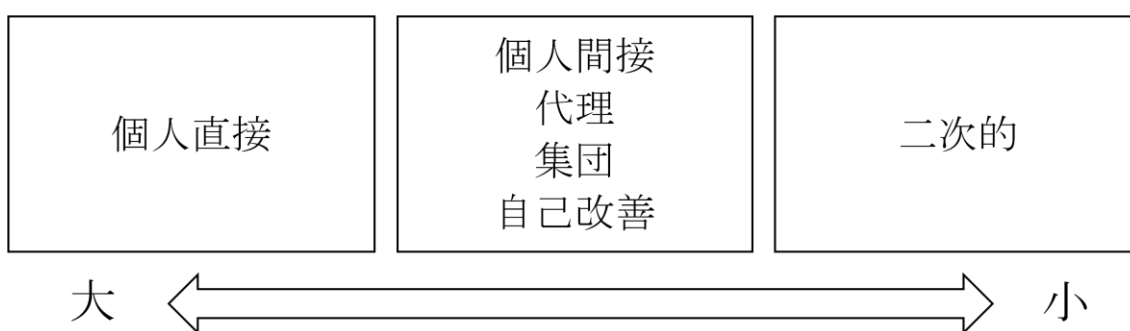


図 5: “理想的選択度合いー現実的選択度合い” のギャップに関する 3 分類モデル

3.3. 第Ⅲ部まとめ

第Ⅲ部では各コントロール方略の特徴を探索的に探り、それに基づいて理想的な選択度合いと現実的な選択度合いを分離する必要性を指摘し、その測定を試みた。研究 3 にて、各方略について様々な質問項目をリッカート式や多肢選択式で尋ね、個人的に好ましい方略や望ましい方略（理想的選択）が、現実的に取る方略や実際に行う方略（現実的選択）と一致しない可能性が示された。研究 4 にて、理想的選択度合いと現実的選択度合いを各方略について尋ね、個人直接コントロール方略は一貫して前者が後者を上回るのに対し、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略はそのようなパターンが観測されず、二次的コントロール方略では逆転したパターンが多く観測され、各選択度合いのギャップに関する 3 分類モデルが提案された。したがって、第Ⅳ部ではこの 3 分類モデルが頑健かど

うか検討していき、ギャップが最大であった個人直接コントロール方略について、ギャップの生成および消失に関する規定因を探っていく。

第Ⅲ部での重要なポイントは、あるコントロール方略を取り上げるにしても、測定レベル（理想または現実）によって評定値が大きく変化するということである。これより、先行研究でしばしば行われてきた各コントロール方略の一元的な測定法に待ったをかけ、コントロール志向性の相対説と普遍説の対立について、測定手法という新たな視座を提供することができた。

第Ⅳ部：理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに関する3分類モデルとその分離メカニズムの検討

第Ⅳ部では、各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに着目し、以下の2つを目的とする。1つ目に、第Ⅲ部で提案された、理想的選択度合いから現実的選択度合いを引いた差得点に関する3分類モデルが、状況を通じて頑健であるかを検討していく。このモデルでは、ギャップの得点が個人直接コントロール方略で最大、二次的コントロール方略で最小（負になることも）、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略がその間に位置するというもので、果たしてこれが状況や文脈を超えて一貫するかどうかを見ていく。

2つ目に、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップの発生および消失要因を解明する。他の方略には着目せず、主に個人直接コントロール方略を取り上げる理由は、研究4で示されたように、この方略は理想的選択度合いと現実的選択度合いの乖離が最大であり、詳細な検討の意義があると考えられるからである。なぜ、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いが分離してしまうのであろうか。第Ⅳ部では個人特性、状況要因、文化による説明を試みる。

個人特性による説明は、例えば予防焦点との関連が考えられる。予防焦点とは制御焦点理論のうち、否定的な出来事に対する感受性が高い人や義務を強く感じる人を表す特性である（Higgins, 1997）。予防焦点の高い人は、否定的な出来事に対し

て過敏に反応するため、そのような出来事を避ける傾向があると考えられる。ここでの否定的な出来事として1つには、対人場面における問題を解決する際に、相手との関係性が悪化してしまうことが挙げられる。個人直接コントロール方略は、それを実行した後に対象者との関係性に悪影響を及ぼす可能性が最も高い解決法であり、否定的な出来事を引き起こしやすいと言える¹¹。以上より、予防焦点の高い人は、たとえ問題解決に迅速に結びつく個人直接コントロールを取りたいと望んでいたとしても、相手との関係性に悪影響が及ぶのを恐れ、実際には取らないという可能性が考えられる。

状況要因による説明は、例えば対人葛藤場面とその他の達成場面の比較が考えられる。対人葛藤の状況では、問題を引き起こしているのは相手であり（藤森, 1989）、問題の責任や原因がどこにあるかが明らかである。そのような状況では相手に対して不満を抱きやすく、不満のはけ口もそこに向かうのではないだろうか。よって、対人葛藤場面ではその他の場面よりも、その相手に対して直接的な解決方略を望むであろうし実際にも取りやすくなり、“理想—現実”のギャップが小さくなると考えられる。

文化による説明は、例えば文化規範との関連が考えられる。日本のように間接的なコミュニケーションを重んじるような文化では（Gudykunst & Ting-Toomey, 1988）、それが行動規範となっており、日本人は間接的な解決方略を取らざるを得ないケースが多いと思われる。したがって、対人場面における問題に対してアプローチする際、たとえ個人直接コントロール方略を取りたいと思っていたとしても、それが文化規範にそぐわないために実際には取らないこともあると考えられる。

以上より、第IV部での2つ目の目的は、個人直接コントロール方略の“理想—現実”のギャップが発生および消失する原因を個人特性、状況要因、文化の側面から解明していく。

¹¹ 個人直接コントロール方略が他の方略に比べて相手との関係性に悪影響を及ぼしやすいというパターンは研究3で示されている。

4.1. 研究5：個人特性・状況要因との関連

4.1.1. 目的

研究5では1つ目に、“理想的選択度合い—現実的选择度合い”のギャップに関する3分類モデルについて、状況が変わっても頑健かどうかを検討する。状況要因として、本研究ではシナリオの種類および相手との親密性を取り上げる。

仮説としては、3分類モデルが支持されることが予測される。つまり、状況が変わったとしても“理想—現実”のギャップは個人直接コントロール方略で最も大きく、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略が続き、二次的コントロール方略で最も小さいと予測される。

2つ目の目的は、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップに対して、個人特性および状況要因がどのように結びつくかを明らかにしていく。個人特性として、本研究では相互協調的自己観と対人的傷つきやすさ、状況要因としてシナリオの種類および相手との親密性だけでなく、方略実行後の相手との関係性変化の予測を取り上げる。

個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップが生じる原因として、対象者との関係性への配慮が挙げられる。この方略が関係性に悪影響を及ぼしやすいということは一貫して示されており、相手との関係性に悪影響を与えたくない場合には、個人直接コントロール方略を行いたいけれども実際には行わないであろう。このように、相手との関係性を重視する傾向として、相互協調的自己観が挙げられる(Markus & Kitayama, 1991)。これは、他者との協調性や結びつきを重視する個人特性であり、ギャップと正の関連を示すと予測される。

対象者との関係性への配慮に関連して、もう1つ考えられるのが、本人自身が相手からの反応にどの程度敏感であるかということである。個人直接コントロール方略を実行した後は、相手からのネガティブフィードバックが返ってくる可能性が高く、そのようなネガティブ反応に対する脆弱性を表す個人特性として、本研究では対人的傷つきやすさを取り上げる(鈴木・小塩, 2002)。これは、相手からのネガ

タイプ反応に対しての落ち込みやすさを表す個人特性であり、ギャップと正の関連を示すと予測される。

さらに関連する要因として、方略実行後に関係性がどうなるかという予測も測定する。個人直接コントロール方略を実行した後に関係性が悪化するという予測を当人が持っている場合、その方略を当人は取りたいと思っていたとしても実際には取らないと思われる。よって、この状況認知の変数はギャップと正の関連を示すと予測される。

4.1.2. 方法

東京大学の学生 181 名（男性 133 名、女性 44 名、性別無回答 4 名、年齢 $M = 20.07$ 、年齢 $SD = 1.26$ ）と関東圏内の大学生 6 名（男性 2 名、女性 4 名、年齢 $M = 20.67$ 、年齢 $SD = 0.47$ ）が研究に参加した。本論文の著者が主導する研究グループの学部生メンバーにお願いして、研究実施を担当してもらい、それぞれの個人的な知り合いに対して質問紙を配布して回収してもらった。

質問紙では 4 種の架空の状況のうち 1 種のみが提示されていた。シナリオは参加者間要因であり、参加者はランダムに割り当てられた。使用されたシナリオは研究 4 で用いられたもののうち、集団達成状況と対人葛藤状況であり、具体的には文化祭参加シナリオ、グループ課題シナリオ、寝不足シナリオ、共有冷蔵庫シナリオであった。関連する状況要因として、コントロールの対象者との親密性が操作されていた（親密性高条件 vs. 親密性無記入条件）¹²。すべてのシナリオの全文は付録 6 に記載してある。

はじめに参加者に各シナリオの主人公の立場に置かれた状況を想像してもらった。その直後に、相手との親密性という状況要因の操作チェックのため、その相手に対してどの程度親しみを感じるかを 7 件法（1: 全く感じない—7: とても感じる）で回答を求めた。例えば文化祭参加シナリオでは“あなたはこの学生団体の責任者に対してどれくらい親しみを感じますか”という文言により問うた。

¹² 親密性無記入条件では相手との親密性についての情報が特に何も書かれていなかった。

次に、3種の一次的コントロール方略（個人直接コントロール方略、個人間接コントロール方略、代理コントロール方略）、自己改善を通じたコントロール方略、および二次的コントロール方略を具体的に提示した。すべてのシナリオでの各コントロール方略は付録6に記載してある。その後、それぞれの方略につき（a）理想的選択度合い（b）現実的選択度合いを尋ねた。1つ目に、理想としては各方略を取りたいか、7件法（1：全くあてはまらない—7：非常にあてはまる）で回答を求めた。2つ目に、実際には各方略を取りそうか、7件法（1：全くあてはまらない—7：非常にあてはまる）で回答を求めた。これら2項目の具体的な文言は研究4と同一であった。

続いて、それぞれの方略を行うことによって、相手との関係に悪影響を及ぼす可能性がどの程度あるか、5件法（1：全くない—5：非常にある）で回答を求めた。例えば文化祭シナリオでは“以下の行動によって学生団体の責任者との関係に悪影響を及ぼしてしまう可能性はどのくらいあると思いますか”という文言により問うた。その他、本研究の主眼から外れるが、一般的な日本人の学生が各コントロール方略を取りそうかという予測を7件法により回答を求めた（1：全くあてはまらない—7：非常にあてはまる）。以上がシナリオパートである。

質問紙には個人特性を測定する尺度も含まれていた。本研究では参加者の相互協調的自己観と対人的傷つきやすさが測定された。相互協調的自己観は文化的自己観の1種で、相互独立的自己観と対比して位置づけられ、個人は互いに結びついていて個別的ではないという考えのことである（Markus & Kitayama, 1991）。これを測定するため、高田・大本・清家（1996）が作成した相互独立的—相互協調的自己観尺度のうち、相互協調的自己観に対応する評価懸念下位尺度（4項目）と他者への親和・順応下位尺度（6項目）を使用した。“他者の視線が気になる（評価懸念）”や“仲間の中で和を維持することは大切だ（他者への親和・順応）”が項目例である。対人的傷つきやすさは、他者からネガティブな評価を受けた際に容易に落ち込み、精神的健康を害しやすい傾向のことである（鈴木・小塩, 2002）。これを測定す

るため、鈴木・小塩が作成した対人的傷つきやすさ尺度を使用した。10項目から構成され、“人から言われることに傷つくことが多い”や“自分についてどんなことを言われても気にしない（反転項目）”が項目例である。これらはいずれも5件法（1: まったくあてはまらない—5: 非常にあてはまる）で回答を求めた。その他、本研究の主眼から外れるが、人間の主体的創造的な生活態度を測定する生き方尺度のうち（板津, 1992）、能動的実践態度下位尺度7項目および自己の創造・開発下位尺度7項目も含まれており、5件法により回答を求めた（1: まったくあてはまらない—5: 非常にあてはまる）。

4.1.3. 結果：記述統計量

各コントロール方略についてリッカート尺度で回答を求めた4項目の平均値と標準偏差をまとめると表31から表34のようになった。

表 31: 研究 5 のすべてのシナリオを含めた理想的選択度合いの記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	6.39	1.16
個人間接	4.81	1.83
代理	4.11	1.82
自己改善	3.37	2.05
二次的	2.34	1.61

表 32: 研究 5 のすべてのシナリオを含めた現実的選択度合いの記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	4.44	1.66
個人間接	4.08	1.82
代理	3.87	1.87
自己改善	3.29	1.86
二次的	3.36	1.91

表 33: 研究 5 のすべてのシナリオを含めた相手との関係性悪影響の記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	3.19	1.11
個人間接	3.11	1.14
代理	2.89	1.08
自己改善	1.88	1.15
二次的	2.01	1.19

相手との関係性悪影響は 5 件法で回答を求めた。

表 34: 研究 5 のすべてのシナリオを含めた一般学生実行予測の記述統計量

コントロール方略	平均値	標準偏差
個人直接	3.64	1.34
個人間接	4.64	1.33
代理	4.67	1.41
自己改善	3.64	1.53
二次的	4.12	1.59

個人特性について α 係数を算出したところ、相互協調的自己観尺度のうち、評価懸念下位尺度は $\alpha = .77$ 、他者への親和・順応下位尺度は $\alpha = .58$ となった。対人的傷つきやすさ尺度は $\alpha = .88$ となった。生き方尺度のうち、能動的実践態度下位尺度は $\alpha = .78$ 、自己の創造・開発下位尺度は $\alpha = .62$ となった。一部、信頼性係数が低い尺度があったものの、他の尺度の内的一貫性は十分に高かったため、分析の一貫性を重視し、以下の分析では適切な反転処理を施し、合算平均得点をそれぞれの個人特性の得点として使用する。個人特性の平均値と標準偏差は表 35 のようになった。

表 35: 研究 5 の個人特性の記述統計量

質問項目	平均値	標準偏差	α
評価懸念	3.59	0.81	.77
他者への親和・順応	3.78	0.51	.58
対人的傷つきやすさ	3.23	0.73	.88
能動的実践態度	3.36	0.67	.78
自己の創造・開発	3.24	0.58	.62

個人特性尺度はすべて 5 件法であった。

4.1.4. 結果：操作チェック

前半部では“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルを検討していく。相手との親密性という状況要因の操作チェックのため、相手に対して感じる親しみの度合いを条件間で比較したところ、親密性高条件は親密性無記述条件よりも有意に評定値が高かった ($M = 4.26$ vs. 3.14 , $t(180) = 4.68$, $p < .001$)。よって、相手との親密性の条件操作は成功していたと判断できる。

4.1.5. 結果：3 分類モデルの検証

各シナリオに割り当てられた人数について、無回答のある参加者のデータを除外したところ、親密性高条件での文化祭参加シナリオは 24 名、グループ課題シナリオは 21 名、寝不足シナリオは 23 名、共有冷蔵庫シナリオは 20 名であった。親密性無記述条件での文化祭参加シナリオは 23 名、グループ課題シナリオは 26 名、寝不足シナリオは 25 名、共有冷蔵庫シナリオは 25 名であった。各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いについて、シナリオおよび親密性ごとにまとめると表 36 および図 6 のようになった。

表 36: 研究 5 の各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い

シナリオ	親密性		個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的
文化祭参加	高	理想	<u>6.25</u>	4.42	3.92	3.21	<u>2.33</u>
		現実	<u>4.67</u>	4.29	3.88	3.17	<u>3.50</u>
	無記述	理想	<u>6.52</u>	3.83	3.39	2.87	<u>2.00</u>
		現実	<u>4.87</u>	3.48	3.52	3.30	<u>3.52</u>
グループ課題	高	理想	<u>6.40</u>	<u>5.05</u>	3.38	3.57	<u>2.71</u>
		現実	<u>4.35</u>	<u>3.91</u>	2.76	3.67	<u>3.76</u>
	無記述	理想	<u>5.96</u>	<u>5.31</u>	4.19	4.19	3.35
		現実	<u>4.31</u>	<u>4.27</u>	4.12	4.77	3.73
寝不足	高	理想	<u>6.70</u>	<u>4.61</u>	4.52	3.00	<u>2.26</u>
		現実	<u>4.13</u>	<u>3.70</u>	3.96	2.87	<u>3.83</u>
	無記述	理想	<u>6.08</u>	<u>5.12</u>	5.32	<u>4.56</u>	<u>2.20</u>
		現実	<u>3.36</u>	<u>3.64</u>	5.04	<u>3.04</u>	<u>3.32</u>
共有冷蔵庫	高	理想	<u>6.65</u>	5.00	4.05	2.30	1.95
		現実	<u>5.25</u>	4.95	3.65	2.20	2.30
	無記述	理想	<u>6.60</u>	5.13	3.92	2.96	<u>1.84</u>
		現実	<u>4.76</u>	4.58	3.76	3.08	<u>2.84</u>

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

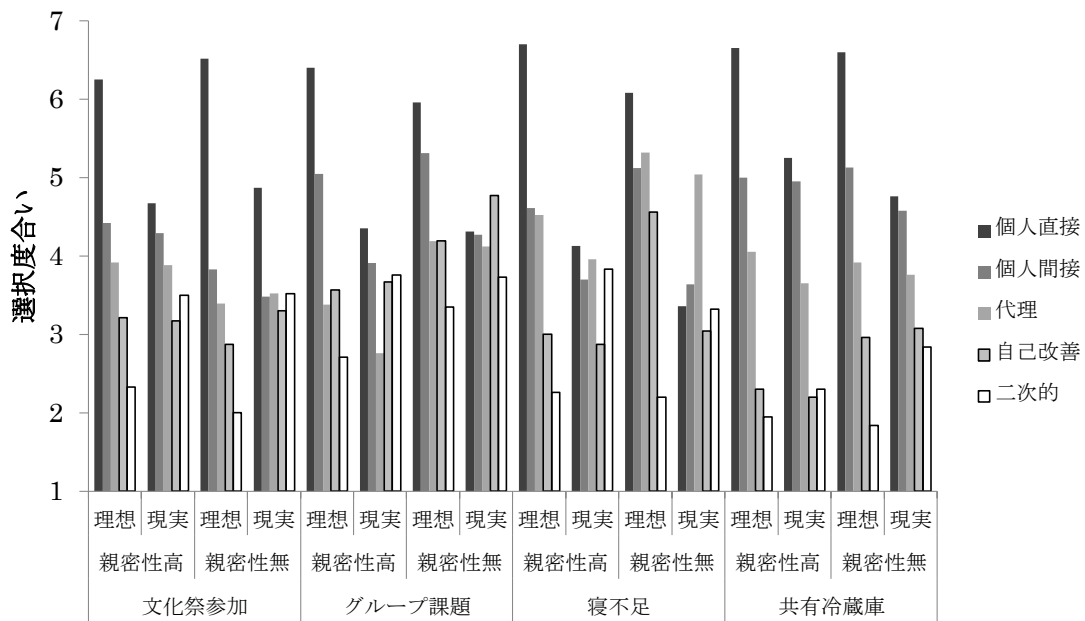


図 6: 研究 5 の各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い

コントロール方略の選択度合い得点に対して、2 (選択種類: 参加者内要因) × 2 (親密性: 参加者間要因) × 4 (シナリオ: 参加者間要因) の多変量分散分析をコントロール方略ごとに繰り返した。以下では解釈容易性を重視し、コントロール方略ごとに結果を記述していく。なお、表 36 で理想的選択度合いと現実的選択度合いのペアで下線がついているものは、下記に示すように有意な差が見られたということを表している。

個人直接コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .43, $F(1, 178) = 233.73$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .57$) およびシナリオの主効果 ($F(3, 178) = 4.19$, $p = .007$, $\eta_p^2 = .07$) は有意であったが、親密性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 178) = 2.21$, ns , $\eta_p^2 = .01$)。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果は有意であったが (Wilks' Lambda = .94, $F(3, 178) = 3.78$, $p = .012$, $\eta_p^2 = .06$)、選択種類 × 親密性の交互作用効果 (Wilks' Lambda = 1.00, $F(1, 178) = 0.07$, ns , $\eta_p^2 < .01$) および親密性 × シナリオの交互作用効果 ($F(3, 178) = 1.41$, ns , $\eta_p^2 = .02$) は有意ではなかった。選択種類 × 親密

性 × シナリオの二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .99, $F(3, 178) = 0.46$, *ns*, $\eta_p^2 = .01$)。

“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルの検討のため、親密性およびシナリオを固定し、個人直接コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。有意水準 5%で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、どの親密性条件とシナリオの組み合わせにおいても (全 8 ペア: 2 × 4)、一貫して個人直接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。

個人間接コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .86, $F(1, 178) = 29.80$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .14$) およびシナリオの主効果 ($F(3, 178) = 2.96$, $p = .034$, $\eta_p^2 = .05$) は有意であったが、親密性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 178) = 0.09$, *ns*, $\eta_p^2 < .01$)。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果は有意であったが (Wilks' Lambda = .94, $F(3, 178) = 3.91$, $p = .010$, $\eta_p^2 = .06$)、選択種類 × 親密性の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .99, $F(1, 178) = 1.30$, *ns*, $\eta_p^2 = .01$) および親密性 × シナリオの交互作用効果 ($F(3, 178) = 1.01$, *ns*, $\eta_p^2 = .02$) は有意ではなかった。選択種類 × 親密性 × シナリオの二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .99, $F(3, 178) = 0.35$, *ns*, $\eta_p^2 = .01$)。

“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルの検討のため、上記と同様に親密性およびシナリオを固定し、個人間接コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、グループ課題シナリオと寝不足シナリオにおいて、親密性高条件と親密性無記述条件のどちらであっても理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。一方、文化祭参加シナリオと共有冷蔵庫シナリオにおいては、親密性条件に関わらず理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

代理コントロール方略については、シナリオの主効果は有意であったが ($F(3, 179) = 5.18, p = .002, \eta_p^2 = .08$)、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .98, $F(1, 179) = 3.66, ns, \eta_p^2 = .02$) および親密性の主効果 ($F(1, 179) = 3.03, ns, \eta_p^2 = .02$) は有意ではなかった。続いて一次の交互作用効果については、親密性 × シナリオの交互作用効果 ($F(3, 179) = 2.67, p = .049, \eta_p^2 = .04$) は有意であったが、選択種類 × 親密性の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .99, $F(1, 179) = 1.39, ns, \eta_p^2 = .01$) および選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .99, $F(3, 179) = 0.62, ns, \eta_p^2 = .01$) は有意ではなかった。選択種類 × 親密性 × シナリオの二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = 1.00, $F(3, 179) = 0.10, ns, \eta_p^2 < .01$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様に親密性およびシナリオを固定し、代理コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、どの親密性条件とシナリオの組み合わせにおいても (全8ペア: 2 × 4)、一貫して代理コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

自己改善を通じたコントロール方略については、親密性の主効果 ($F(1, 179) = 6.78, p = .010, \eta_p^2 = .04$) およびシナリオの主効果は有意であったが ($F(3, 179) = 6.41, p < .001, \eta_p^2 = .10$)、選択種類の主効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = 1.00, $F(1, 179) = 0.23, ns, \eta_p^2 < .01$)。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果は有意であったが (Wilks' Lambda = .95, $F(3, 179) = 3.20, p = .025, \eta_p^2 = .05$)、選択種類 × 親密性の交互作用効果 (Wilks' Lambda = 1.00, $F(1, 179) = 0.03, ns, \eta_p^2 < .01$) および親密性 × シナリオの交互作用効果 ($F(3, 179) = 1.04, ns, \eta_p^2 = .02$) は有意ではなかった。選択種類 × 親密性 × シナリオの二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .96, $F(3, 179) = 2.39, ns, \eta_p^2 = .04$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様に親密性およびシナリオを固定し、自己改善を通じたコントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、寝不足シナリオでの親密性無記述条件において理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。その他、どの条件およびシナリオの組み合わせにおいても、自己改善を通じたコントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

二次的コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .81, $F(1, 179) = 43.34$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .20$) およびシナリオの主効果 ($F(3, 179) = 5.39$, $p = .001$, $\eta_p^2 = .08$) は有意であったが、親密性の主効果は有意ではなかった ($F(1, 179) = 0.01$, ns , $\eta_p^2 < .01$)。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × 親密性の交互作用効果 (Wilks' Lambda = 1.00, $F(1, 179) = 0.01$, ns , $\eta_p^2 < .01$)、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .98, $F(3, 179) = 1.46$, ns , $\eta_p^2 = .02$)、および親密性 × シナリオの交互作用効果 ($F(3, 179) = 0.49$, ns , $\eta_p^2 = .01$) のどれも有意ではなかった。選択種類 × 親密性 × シナリオの二次の交互作用効果も有意ではなかった (Wilks' Lambda = .98, $F(3, 179) = 1.02$, ns , $\eta_p^2 = .02$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様に親密性およびシナリオを固定し、二次的コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、文化祭参加シナリオと寝不足シナリオにおいて、親密性高条件と親密性無記述条件のどちらであっても現実的選択度合いが理想的選択度合いよりも有意に高かった。また、グループ課題シナリオでの親密性高条件、共有冷蔵庫シナリオでの親密性無記述条件において、同様の有意差が見られた。他のペアでは有意な差は観測されなかった。

4.1.6. 結果：“理想—現実”ギャップの解明

後半部では、個人直接コントロール方略の“理想的選択度合い—現実的選択度合い”のギャップの発生・消失メカニズムについて、個人特性と状況要因の側面から明らかにしていく。そのため、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いから現実的選択度合いを引き、差得点をギャップ得点とした。

個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点と各個人特性および状況認知との相関係数を算出したところ、表 37 のようになった。ギャップ得点は評価懸念 ($r = .097$)、能動的実践態度 ($r = .001$)、自己の創造・開発 ($r = -.058$) と有意な相関を示さなかったが、他者への親和・順応、対人的傷つきやすさ、実行による関係性への悪影響予測とは有意な正の相関を示し（それぞれ順番に $r = .251$, $p < .01$; $r = .152$, $p < .05$; $r = .230$, $p < .01$)、一般学生実行予測とは有意な負の相関を示した ($r = -.354$, $p < .01$)。

表 37: 研究 5 の個人直接ギャップ得点と個人特性および状況認知との相関係数

	評価懸念	他者への 親和・ 順応	対人的 傷つき やすさ	能動的 実践態度	自己の 創造・ 開発	関係性へ の悪影響 予測	一般学生 実行予測
相関係数	.097	.251**	.152*	.001	-.058	.230**	-.354**
平均値	3.59	3.78	3.23	3.36	3.24	3.19	3.64
標準偏差	0.81	0.51	0.73	0.67	0.58	1.11	1.34

* $p < .05$. ** $p < .01$.

個人直接コントロール方略以外の方略についてもギャップ得点を算出し、同様に相関分析を行ったところ、ここで扱った 7 つの変数のうち一般学生実行予測のみが有意な相関を示した。具体的には個人間接コントロール方略で $r = -.192$, $p < .01$ 、

代理コントロール方略で $r = -.273$, $p < .01$ 、二次的コントロール方略で $r = -.338$, $p < .01$ と有意な負の相関を示したが、自己改善を通じたコントロール方略で $r = .123$, ns と有意な相関を示さなかった。ギャップ得点はその他の変数とは有意な相関を示さなかった。

以上の相関分析を親密性条件およびシナリオごとに行うと、有意に至る相関係数は減るものの、概ね同様の傾向を示した。

4.1.7. 考察

研究 5 では理想的選択度合いと現実的選択度合いの差に関する 3 分類モデルが状況を超えて頑健なものであるかを検討し、その差に関連する要因として個人特性と状況要因を取り上げた。

前半部の分析では、個人直接コントロール方略は状況によらず一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回っており、その他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略は状況によって結果は一貫せず、二次的コントロール方略は大半の状況で (8 つのうち 6 つ) 現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回っていた。これより、“理想—現実” ギャップに関する 3 分類モデルが支持された。

後半部の分析では、個人直接コントロール方略の“理想—現実”のギャップに着目し、これが相互協調的自己観 (評価懸念、他者への親和・順応) および対人的傷つきやすさという個人特性、実行による相手との関係性への悪影響という状況認知とどう関連するのかを検討した。仮説通り、他者への親和・順応、対人的傷つきやすさ、関係性悪影響予測が正に相関していた。これらはすべて対人的な要因だといえ、他者との調和を大事にする人ほど、相手からのネガティブ評価で落ち込みやすい人ほど、方略実行後に相手との関係が悪くなると思っている時ほど、個人直接コントロール方略を理想的には取りたいが実際には取らないという現象が観測されるのであろう。

ただし、評価懸念についてはギャップ得点との間に正の相関が得られたものの、有意には至らなかった。また、その他取り上げた変数とギャップとの相関係数は有意であったものの、強い相関が得られたわけではない。したがって、個人変数や状況認知のみでは、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップの説明力が弱いことが示唆される。よって、続く研究 6 では文化という変数を追加して検討していく。

確かに個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点と各要因との関連が弱かったことが課題ではあるが、このようなギャップ得点と各要因との関連が他のコントロール方略については見られなかったのは特筆すべき点である。したがって、他の方略に比べ特に個人直接コントロール方略において、ここで取り上げた対人的な要因によって“理想—現実”ギャップが広がるのであろう。

各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いの差得点が、一般的な日本人学生の選択度合いの予測と負に相関しているケースが多かった。これは参加者の現実的選択度合いと一般学生選択予測が類似したものであったためと考えられる。実際にすべてのコントロール方略において、現実的選択度合いと一般学生選択予測との間に中程度以上の正の相関が得られている ($r_s > .346$, $p_s < .01$)。この正相関は、回答者がリッカート尺度に回答する際に近い集団を参考にするという参照集団効果 (reference-group effect) を反映しているものと思われる (Heine, Lehman, Peng, & Greenholtz, 2002)。差得点の算出では理想的選択度合いから現実的選択度合いを引いているため、減算に用いたものとパターンの似た変数が、その差得点と負の相関を示すのは自然な結果であろう。

以上より、ギャップに関する 3 分類モデルは支持された。さらに、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップが対人関係に関する個人特性や状況認知と関連しており、ギャップの発生および消失メカニズムについて個人特性と状況要因の側面から明らかになったものの、その説明力は弱かった。

4.2. 研究6：個人特性・状況要因・文化との関連¹³

4.2.1. 目的

研究6では1つ目に、“理想的選択度合い—現実的選択度合い”のギャップに関する3分類モデルについて、状況や文脈が変わっても頑健かどうかを検討する。要因として本研究では、シナリオの種類および文化を取り上げる。仮説としては、状況や文脈が変わったとしても“理想—現実”のギャップは個人直接コントロール方略が最も大きく、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略が続き、二次的コントロール方略が最も小さいと予測される。

2つ目の目的は、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップに対して、個人特性、状況要因および文化がどのように結びつくかを明らかにしていく。本研究では個人特性として比較文化研究でよく用いられる自尊心と制御焦点、状況要因としてシナリオの種類、さらに文化を取り上げる。

ソシオメーター理論に基づく（Leary & Baumeister, 2000）、自尊心は他者との良好な関係についての主観的な指標であるとされる。自尊心の高い者は他者からの被受容感が高く、対人関係についてもポジティブに見なしやすい（黒田・有年・桜井, 2004）。したがって、自尊心の高い者はコントロール方略の対象者との関係性について楽観的であり、個人直接コントロール方略を実行したとしても関係性に悪影響が及びにくいと考えているであろう。よって、自尊心とギャップとの間には負の関連が予測される。

自尊心は接近・回避志向とも関わっており、高自尊心は接近傾向、低自尊心は回避傾向と結びつくという（Baumeister, Tice, & Hutton, 1989）。接近・回避傾向を表す自己制御システムは制御焦点と呼ばれる。制御焦点とは Higgins (1997) が提唱した人間の基本的な2つの焦点であり、肯定的な出来事に対する感受性が高い人や理想を強く求める人を表す特性を促進焦点（promotion focus）、否定的な出来事に対する感受性が高い人や義務を強く感じる人を表す特性を予防焦点

¹³ 研究6の一部は International Association for Cross-Cultural Psychology 2013 regional conference にて発表された（Kurman, Sagie, Yamaguchi, Sawaumi, & Park, 2013）。

(prevention focus) という。つまり、促進焦点の高い人は利得に接近する傾向があり、予防焦点の高い人は損失を回避する傾向があるといえる。促進焦点の高い人は目標を達成しようとする傾向が強く、問題解決に有効である個人直接コントロール方略を取りたいと思うだけでなく、実際にも取るであろうと考えられる。一方、予防焦点の高い人は第IV部の導入部で記述したように、個人直接コントロール方略を実行した後の関係性悪化を懸念し、取りたいと思っけていても実際には取らないであろうと考えられる。以上より、促進焦点とギャップとの間には負の相関、予防焦点とギャップとの間には正の関連が予測される。

本研究で取り上げるのは西洋文化と東アジア文化の二分法であり、西洋文化からはイスラエルとニュージーランド、東アジア文化からは日本と韓国がサンプリングされる¹⁴。仮説としては、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップは、西洋文化よりも東アジア文化で大きいと予測される。なぜなら、間接的なコミュニケーションを重んじる東アジア文化では (Gudykunst & Ting-Toomey, 1988)、直接的に相手に働きかけないことが行動規範となっており、個人直接コントロール方略を取りたいと思っけていても、実際には取らないであろうと考えられるからである。

さらに、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップに関する文化差は、比較文化的な個人特性（自尊心および制御焦点）の差に還元されるかどうかを検討する。価値観の分散について比較文化的に検討した研究によると、価値観の文化間分散よりも文化内分散の方が大きいという (Fischer & Schwartz, 2011)。もし、価値観と同様に行動傾向や志向性も文化間分散より文化内分散の方が大きい、つまりコントロール志向性の文化間分散よりも個人差による分散の方が大きいという話が成り立つのであれば、“理想—現実”ギャップの説明項として、文化よりも個人特性による説明力の方が強いであろうと考えられる。以上より、ギャップの文化差を個人特性に還元させることを試みる。

¹⁴ イスラエルは中東地域に位置するが、西洋文化に近いとされる (Seginer & Halabi, 1991)。

4.2.2. 方法

日本在住の大学生 151 名（男性 80 名、女性 71 名、年齢 $M = 21.17$ 、年齢 $SD = 4.34$ ）、イスラエル在住の大学生 150 名（男性 66 名、女性 84 名、年齢 $M = 23.43$ 、年齢 $SD = 2.61$ ）、韓国在住の大学生 156 名（男性 69 名、女性 85 名、性別無回答 2 名、年齢 $M = 22.14$ 、年齢 $SD = 2.01$ ）、ニュージーランド在住の大学生 180 名（男性 50 名、女性 129 名、性別無回答 1 名、年齢 $M = 18.97$ 、年齢 $SD = 1.63$ ）が研究に参加した¹⁵。心理学系の講義時間の一部を借りて実施し、講義室内で一斉に下記の質問紙を配布し、回答してもらった。

質問紙では 6 種の架空の状況のうち 1 種のみが提示されていた。シナリオは参加者間要因であり、参加者はランダムに割り当てられた。使用されたシナリオ 6 つ（就職試験、エアロビ、文化祭参加、グループ課題、寝不足、共有冷蔵庫）は研究 4 と実質的に同一であり、付録 5 に記載されている¹⁶。はじめに参加者に各シナリオの主人公の立場に置かれた状況を想像してもらった。次に、本論文のコントロール方略の分類法のうち、一次的コントロール方略 3 種（個人直接コントロール方略、個人間接コントロール方略、代理コントロール方略）、自己改善を通じたコントロール方略および二次的コントロール方略を具体的に提示した。すべてのシナリオでの各コントロール方略は研究 4 と同一であった。

その後、それぞれの方略につき (a) 理想的選択度合い (b) 現実的選択度合いを尋ねた。1 つ目に、理想としては各方略を取りたいか、7 件法（1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる）で回答を求めた。2 つ目に、実際には各方略を取りそうか、7 件法（1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる）で回答を求めた。これら 2 項目の具体的な文言は研究 4 と同一であった。

その他、本研究の主眼から外れるが、提示されたシナリオでの状況改善の重要性を 7 件法により問うた（1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる）。例えば就

¹⁵ 他国の国籍を持つ者は日本で 1 名、イスラエルで 2 名、韓国で 0 名、ニュージーランドで 42 名であった

¹⁶ 研究 4 で用いたダンスシナリオのみ若干の変更があり、ダンスという言葉を変えてエアロビクスに置き換えて研究 6 で使用した。

職試験シナリオでは“あなたにとって就職試験を成功させることは重要である”という文言により、数字を1つ選択してもらった。さらに、すべてのコントロール方略について以下の質問項目も含まれていた。(a) 自文化に所属する一般的な学生がその方略を取りそうかという予測 (b) その方略実行による相手との関係性への悪影響 (c) その時点で自分のためになる度合い (d) 長期的に見た際に自分のためになる度合いという4つの項目も含まれていた。なお、これらの項目は7件法(1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる)で回答を求めた。加えて、一次的コントロール方略3種について、その方略実行の状況改善役立ち度を7件法により問うた(1: 全く役に立たない—7: 非常に役に立つ)。なお、すべてのコントロール方略について良い点、悪い点や気がかりなことなどを自由に記述してもらったが、これらの質的データについての分析は省略する。以上がシナリオパートである。

質問紙の中には個人特性を測定する尺度も含まれていた。本研究では参加者の自尊心と制御焦点が測定された。自尊心 (self-esteem) は自分に対する肯定的あるいは否定的な態度を意味する (Rosenberg, 1965, p. 30)。これを測定するため、Rosenberg が作成した自尊心尺度を使用した。10項目から構成され、“私は自分を少なくとも人並みの価値のある人間だと感じている”や“大体において、私は自分が敗北者であると感じがちである(反転項目)”が項目例である。また、制御焦点 (regulatory focus) は Higgins (1997) が提唱した人間の基本的な2つの焦点のことを意味し、肯定的な出来事に対する感受性が高い人や理想を強く求める人を表す特性を促進焦点、否定的な出来事に対する感受性が高い人や義務を強く感じる人を表す特性を予防焦点という。これらを測定するため、Lockwood, Jordan, & Kunda (2002) が作成した促進焦点—予防焦点尺度を使用した。18項目から構成され、“自分の理想とする将来の人物像についてよく考える(促進焦点)”や“将来自分がなっては困る人物像についてよく考える(予防焦点)”が項目例である。自尊心尺度は5件法(1: 全くあてはまらない—5: 非常にあてはまる)、促進焦点—予防焦点尺度は7件法(1: 全くあてはまらない—7: 非常にあてはまる)で回答を求めた。

質問紙は英語で作成され、その後すべて **committee approach** に従い、バイリンガルのグループにおいて各国で使用される言語に翻訳された (Brislin, 1980)。

4.2.3. 結果：記述統計量

各コントロール方略について理想的選択度合いと現実的選択度合いの平均値と標準偏差を文化ごとにまとめると表 38 と表 39 のようになった。

表 38: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた理想的選択度合いの記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	5.91	1.57
	個人間接	4.47	1.99
	代理	4.71	2.03
	自己改善	4.19	2.29
	二次的	3.44	2.35
イスラエル	個人直接	5.97	1.47
	個人間接	4.08	1.93
	代理	3.59	2.32
	自己改善	4.84	2.23
	二次的	3.42	2.37
韓国	個人直接	6.03	1.27
	個人間接	5.03	1.98
	代理	5.16	1.97
	自己改善	4.77	2.20
	二次的	3.85	2.31
NZ	個人直接	6.06	1.27
	個人間接	4.64	1.78
	代理	4.74	1.85
	自己改善	5.00	2.06
	二次的	4.01	2.35

表 39: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた現実的選択度合いの記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	3.69	1.85
	個人間接	3.93	1.76
	代理	3.74	1.97
	自己改善	4.00	1.91
	二次的	3.61	2.02
イスラエル	個人直接	4.67	1.74
	個人間接	4.21	1.77
	代理	3.19	2.03
	自己改善	4.37	2.04
	二次的	3.40	2.05
韓国	個人直接	4.22	1.58
	個人間接	4.11	1.76
	代理	4.45	1.93
	自己改善	4.26	1.98
	二次的	3.61	2.06
NZ	個人直接	3.91	1.57
	個人間接	4.39	1.63
	代理	3.82	1.92
	自己改善	4.21	1.87
	二次的	3.63	1.86

提示されたシナリオでの状況改善の重要性の平均値と標準偏差をまとめると表 40 のようになった。

表 40: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた状況改善重要性の記述統計量

文化	平均値	標準偏差
日本	5.29	1.73
イスラエル	6.19	1.02
韓国	5.83	0.97
NZ	5.64	1.25

各コントロール方略についてリッカート尺度で回答を求めた 4 項目（一般学生
 選択予測、相手との関係性悪影響、短期的ためになる度合い、長期的ためになる度
 合い）の平均値と標準偏差をまとめると表 41 から表 44 のようになった。

表 41: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた一般学生選択予測の記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	3.48	1.41
	個人間接	4.14	1.43
	代理	4.26	1.64
	自己改善	4.40	1.57
	二次的	3.99	1.60
イスラエル	個人直接	5.11	1.31
	個人間接	4.86	1.48
	代理	4.47	1.97
	自己改善	3.62	1.70
	二次的	3.46	1.77
韓国	個人直接	3.72	1.32
	個人間接	4.16	1.49
	代理	4.41	1.64
	自己改善	4.09	1.58
	二次的	3.74	1.61
NZ	個人直接	4.07	1.23
	個人間接	4.62	1.22
	代理	4.45	1.50
	自己改善	4.15	1.47
	二次的	3.88	1.38

表 42: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた相手との関係性悪影響の記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	4.91	1.53
	個人間接	4.44	1.77
	代理	3.67	1.57
	自己改善	2.24	1.71
	二次的	2.17	1.74
イスラエル	個人直接	4.43	1.73
	個人間接	3.83	1.75
	代理	4.58	2.26
	自己改善	2.11	1.91
	二次的	1.95	1.79
韓国	個人直接	4.23	1.81
	個人間接	4.03	1.85
	代理	3.75	1.80
	自己改善	2.12	1.71
	二次的	2.10	1.73
NZ	個人直接	4.81	1.42
	個人間接	3.56	1.73
	代理	3.69	2.15
	自己改善	1.77	1.57
	二次的	1.75	1.49

表 43: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた短期的ためになる度合いの記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	5.13	1.59
	個人間接	4.12	1.69
	代理	4.39	1.70
	自己改善	3.91	2.14
	二次的	3.16	2.08
イスラエル	個人直接	5.41	1.50
	個人間接	4.28	1.49
	代理	4.95	1.77
	自己改善	3.83	2.21
	二次的	3.20	2.09
韓国	個人直接	5.37	1.44
	個人間接	4.11	1.79
	代理	4.67	1.48
	自己改善	4.07	1.98
	二次的	3.15	2.05
NZ	個人直接	5.35	1.37
	個人間接	4.28	1.50
	代理	4.99	1.49
	自己改善	3.67	2.03
	二次的	3.24	1.98

表 44: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた長期的ためになる度合いの記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	5.01	1.66
	個人間接	3.87	1.88
	代理	4.03	1.84
	自己改善	4.54	2.25
	二次的	3.12	2.19
イスラエル	個人直接	5.27	1.54
	個人間接	3.84	1.70
	代理	3.77	2.01
	自己改善	5.31	2.03
	二次的	3.21	2.40
韓国	個人直接	5.10	1.66
	個人間接	3.99	1.82
	代理	4.04	1.59
	自己改善	4.29	2.21
	二次的	3.24	2.31
NZ	個人直接	5.42	1.57
	個人間接	3.68	1.75
	代理	4.61	1.73
	自己改善	5.24	2.01
	二次的	3.18	2.26

一次的コントロール方略 3 種について、状況改善にどの程度役立つかという質問項目の平均値と標準偏差をまとめると表 45 のようになった。

表 45: 研究 6 のすべてのシナリオを含めた状況改善役立ち度の記述統計量

文化	コントロール方略	平均値	標準偏差
日本	個人直接	5.70	1.39
	個人間接	4.03	1.61
	代理	4.79	1.45
イスラエル	個人直接	5.70	1.42
	個人間接	4.06	1.45
	代理	4.94	1.68
韓国	個人直接	5.74	1.35
	個人間接	4.25	1.65
	代理	4.81	1.39
NZ	個人直接	5.63	1.19
	個人間接	3.78	1.38
	代理	4.91	1.57

個人特性について文化ごとに α 係数を算出したところ、自尊心尺度は $\alpha s > .84$ 、促進焦点尺度は $\alpha s > .76$ 、予防焦点尺度は $\alpha s > .75$ となった。各尺度の内的一貫性は十分に高かったため、以下の分析では適切な反転処理を施し、合算平均得点をそれぞれの個人特性の得点として使用する。個人特性の平均値と標準偏差は表 46 のようになった。

表 46: 研究 6 の個人特性の記述統計量

文化	個人特性	平均値	標準偏差
日本	自尊心	2.68	0.74
	促進焦点	4.22	0.94
	予防焦点	4.53	1.03
イスラエル	自尊心	4.17	0.73
	促進焦点	5.66	0.78
	予防焦点	3.89	1.17
韓国	自尊心	3.74	0.67
	促進焦点	5.33	0.78
	予防焦点	4.52	0.93
NZ	自尊心	3.75	0.85
	促進焦点	5.40	0.95
	予防焦点	4.15	1.05

自尊心尺度は 5 件法、促進焦点尺度および予防焦点尺度は 7 件法であった。

4.2.4. 結果: 3 分類モデルの検証

前半部では“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルの頑健性を検討する。各シナリオに割り当てられた人数について、シナリオごとおよび文化ごとに表 47 にまとめた。

表 47: 研究 6 の各条件に割り当てられた人数

シナリオ	日本	イスラエル	韓国	NZ
就職試験	26	25	28	30
エアロビ	23	25	27	30
文化祭参加	28	25	25	30
グループ課題	25	25	26	30
寝不足	25	25	25	30
共有冷蔵庫	24	25	25	30

各コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いについて、シナリオおよび文化ごとにまとめると表 48 から表 53 および図 7 から図 12 のようになった。

表 48: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い（就職試験）

シナリオ	文化		個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的
就職試験	日本	理想	<u>5.42</u>	3.31	<u>5.42</u>	<u>6.46</u>	<u>5.19</u>
		現実	<u>2.46</u>	3.65	<u>3.73</u>	<u>5.46</u>	<u>4.23</u>
	イスラエル	理想	<u>5.88</u>	4.16	<u>5.84</u>	6.80	<u>5.60</u>
		現実	<u>4.24</u>	3.88	<u>4.76</u>	6.40	<u>4.76</u>
	韓国	理想	<u>5.93</u>	<u>3.39</u>	<u>5.64</u>	6.54	<u>6.21</u>
		現実	<u>3.21</u>	<u>2.54</u>	<u>4.86</u>	6.04	<u>5.32</u>
	NZ	理想	<u>5.97</u>	3.83	<u>5.70</u>	<u>6.80</u>	<u>6.23</u>
		現実	<u>3.10</u>	4.40	<u>4.67</u>	<u>5.60</u>	<u>3.83</u>

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

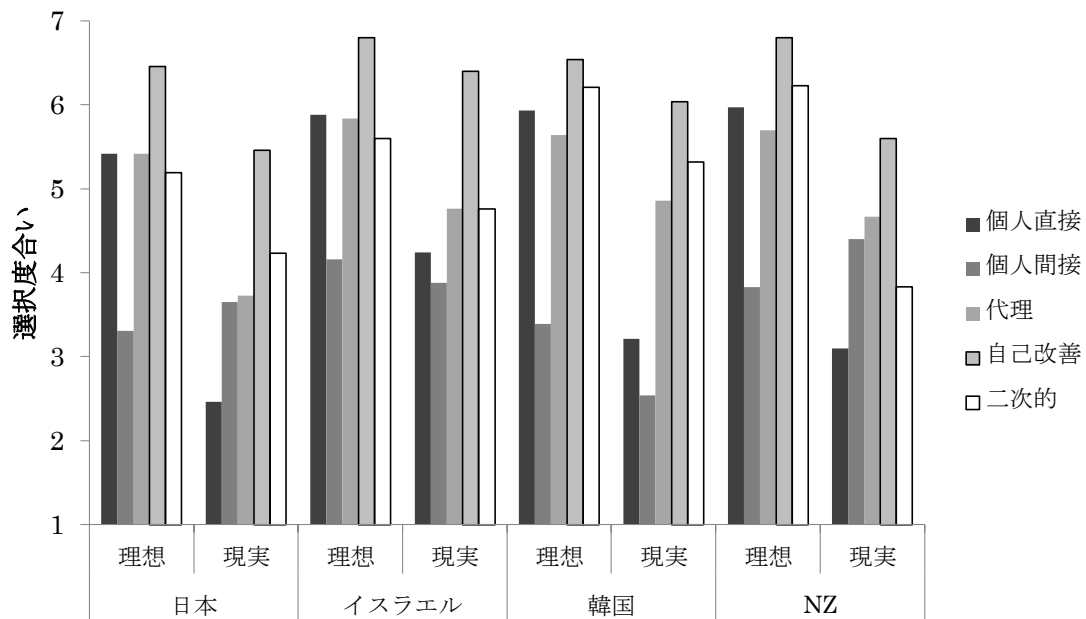


図 7: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (就職試験)

表 49: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (エアロビ)

シナリオ	文化	個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的	
エアロビ	日本	理想	<u>4.87</u>	2.96	<u>3.22</u>	<u>5.61</u>	<u>5.48</u>
		現実	<u>2.39</u>	3.09	<u>1.83</u>	<u>4.48</u>	<u>4.74</u>
	イスラエル	理想	<u>5.68</u>	4.32	<u>3.52</u>	<u>6.08</u>	<u>6.32</u>
		現実	<u>4.08</u>	3.92	<u>2.72</u>	<u>5.28</u>	<u>5.60</u>
	韓国	理想	<u>5.15</u>	4.26	<u>5.22</u>	<u>6.11</u>	<u>5.26</u>
		現実	<u>3.82</u>	4.00	<u>4.26</u>	<u>5.15</u>	<u>4.19</u>
	NZ	理想	<u>5.10</u>	3.80	<u>4.00</u>	<u>6.23</u>	<u>6.23</u>
		現実	<u>2.57</u>	3.60	<u>2.47</u>	<u>4.80</u>	<u>4.70</u>

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

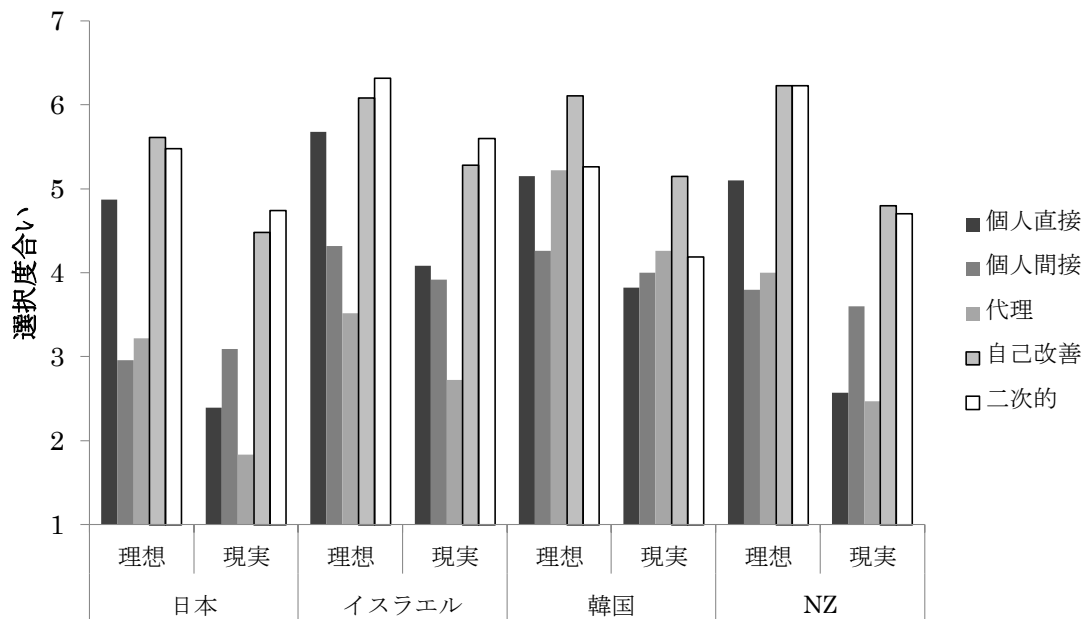


図 8: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (エアロビ)

表 50: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (文化祭参加)

シナリオ	文化	個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的
文化祭参加	日本	理想 <u>6.29</u>	<u>4.68</u>	<u>3.75</u>	3.04	<u>3.14</u>
	現実	<u>4.54</u>	<u>3.68</u>	<u>2.96</u>	3.14	<u>4.07</u>
文化祭参加	イスラエル	理想 <u>6.52</u>	4.52	3.80	4.12	2.64
	現実	<u>5.04</u>	4.12	3.24	3.72	3.16
文化祭参加	韓国	理想 <u>5.92</u>	<u>5.52</u>	<u>3.52</u>	<u>4.04</u>	2.56
	現実	<u>4.64</u>	<u>4.72</u>	<u>2.68</u>	<u>3.32</u>	2.96
文化祭参加	NZ	理想 <u>6.20</u>	<u>5.30</u>	<u>4.33</u>	4.03	3.70
	現実	<u>3.93</u>	<u>4.30</u>	<u>3.47</u>	3.70	4.33

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

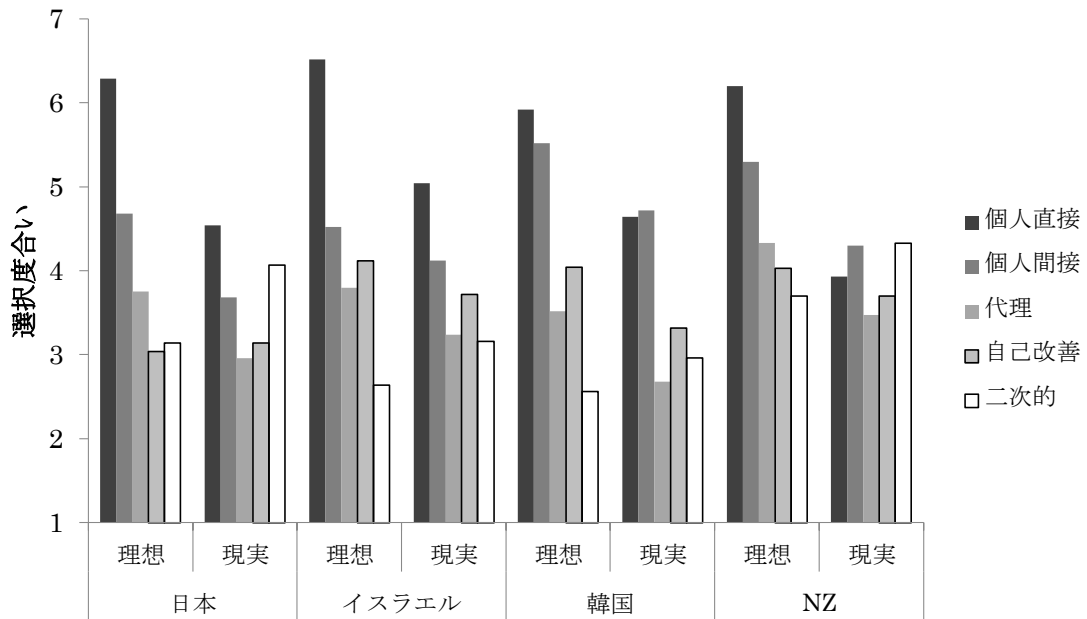


図 9: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (文化祭参加)

表 51: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (グループ課題)

シナリオ	文化	個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的	
グループ課題	日本	理想	<u>6.32</u>	<u>5.68</u>	<u>4.72</u>	4.60	<u>3.44</u>
		現実	<u>3.96</u>	<u>4.24</u>	<u>4.00</u>	4.52	<u>4.24</u>
	イスラエル	理想	<u>6.12</u>	3.76	<u>3.04</u>	5.28	2.56
		現実	<u>4.80</u>	4.20	<u>3.84</u>	5.72	3.12
	韓国	理想	<u>6.58</u>	<u>5.46</u>	<u>5.69</u>	5.31	4.24
		現実	<u>4.27</u>	<u>4.23</u>	<u>4.54</u>	5.31	4.40
	NZ	理想	<u>6.30</u>	5.50	4.17	4.90	3.53
		現実	<u>4.07</u>	4.87	3.60	5.00	4.07

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

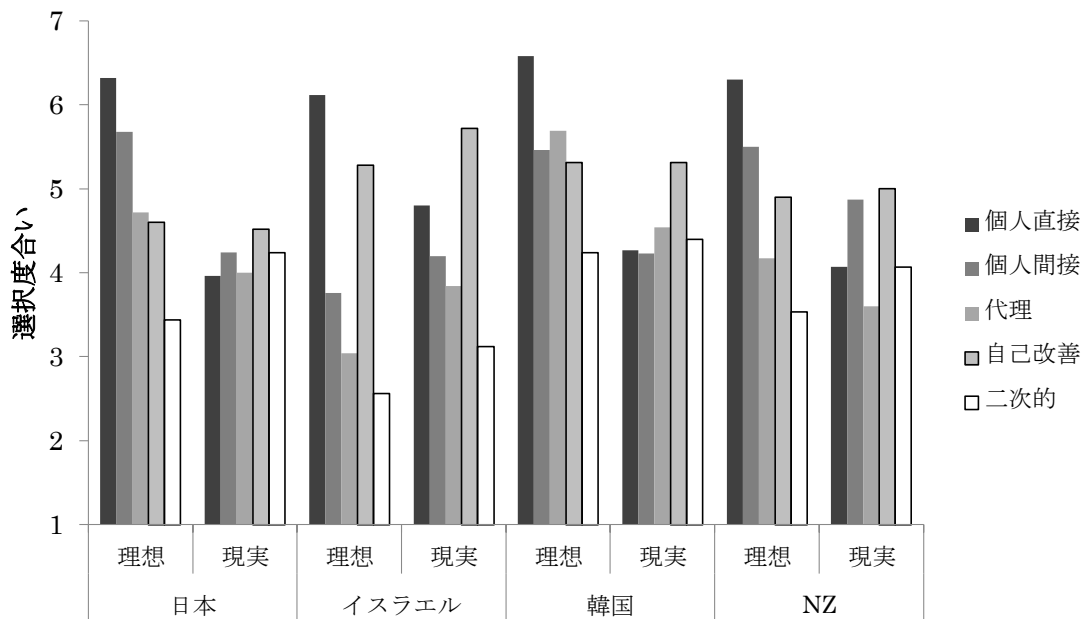


図 10: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (グループ課題)

表 52: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (寝不足)

シナリオ	文化	個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的	
寝不足	日本	理想	<u>6.04</u>	<u>4.92</u>	<u>6.16</u>	2.56	1.88
		現実	<u>4.00</u>	<u>4.17</u>	<u>5.44</u>	2.68	2.16
	イスラエル	理想	<u>6.28</u>	3.88	3.52	<u>3.44</u>	1.84
		現実	<u>5.28</u>	4.54	2.96	<u>2.48</u>	1.64
	韓国	理想	<u>6.48</u>	<u>6.04</u>	5.84	2.52	1.76
		現実	<u>4.88</u>	<u>4.88</u>	5.72	2.76	1.84
	NZ	理想	<u>6.53</u>	4.90	5.93	3.90	2.10
		現実	<u>4.60</u>	4.50	5.40	3.50	2.40

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

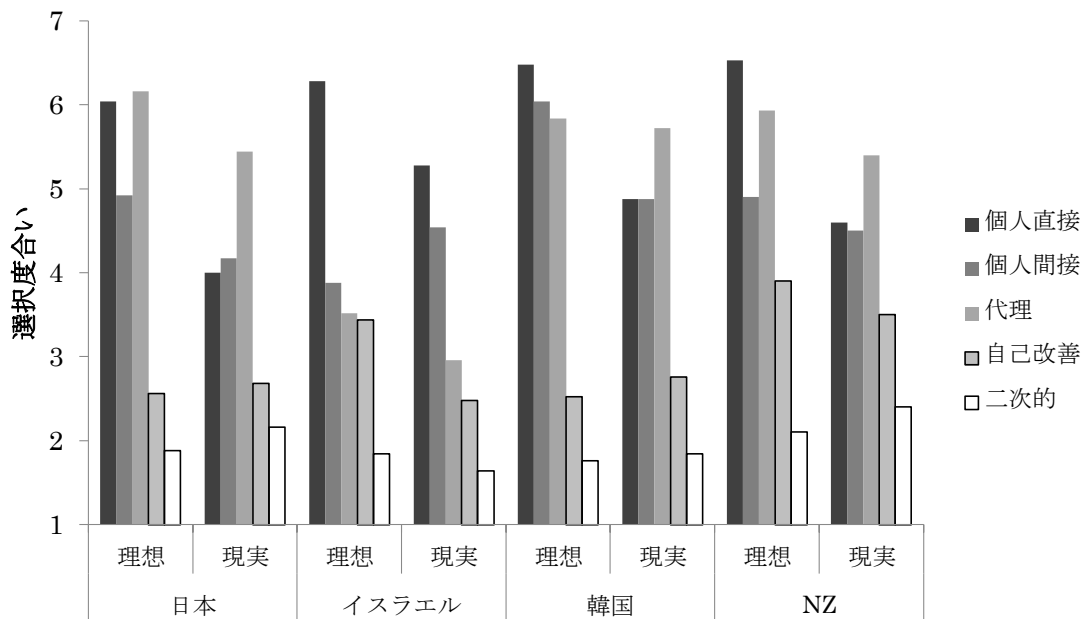


図 11: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (寝不足)

表 53: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (共有冷蔵庫)

シナリオ	文化	個人直接	個人間接	代理	自己改善	二次的	
共有冷蔵庫	日本	理想	<u>6.46</u>	5.25	4.96	<u>3.00</u>	1.58
		現実	<u>4.67</u>	4.79	4.42	<u>3.79</u>	2.17
	イスラエル	理想	<u>5.36</u>	<u>3.84</u>	1.84	<u>3.32</u>	1.56
		現実	<u>4.56</u>	<u>4.64</u>	1.60	<u>2.60</u>	2.12
	韓国	理想	<u>6.20</u>	<u>5.72</u>	4.96	<u>3.76</u>	2.68
		現実	<u>4.68</u>	<u>4.48</u>	4.60	<u>2.68</u>	2.72
	NZ	理想	<u>6.23</u>	4.53	<u>4.30</u>	<u>4.13</u>	2.27
		現実	<u>5.17</u>	4.70	<u>3.33</u>	<u>2.63</u>	2.47

値に下線が付いている箇所は理想的選択度合いと現実的選択度合いとで有意な差があった。

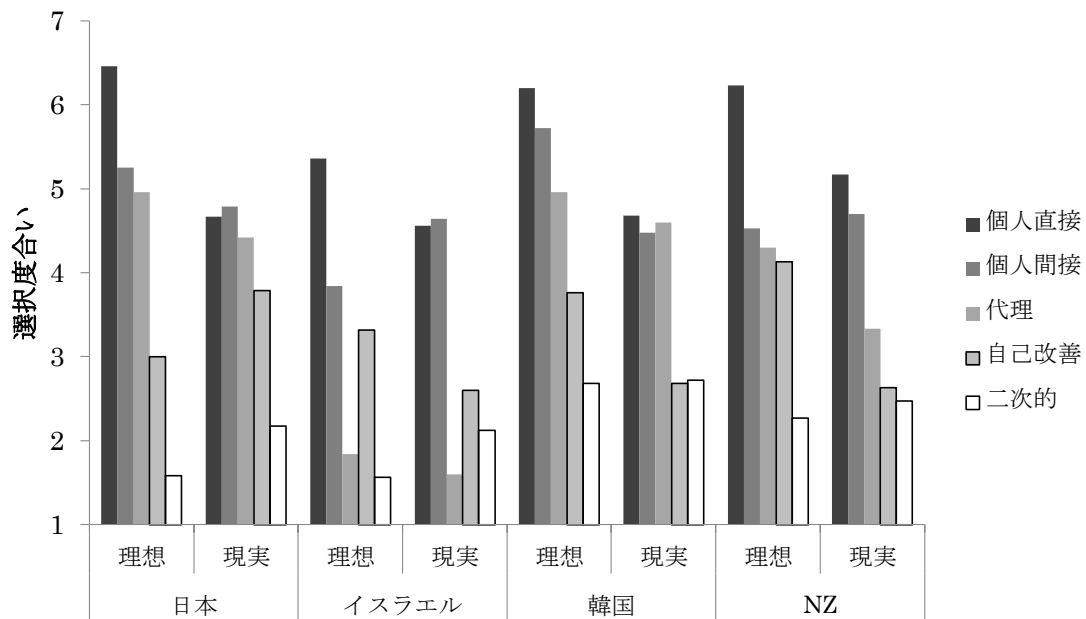


図 12: 研究 6 の各方略の理想的選択度合いと現実的選択度合い (共有冷蔵庫)

コントロール方略の選択度合い得点に対して、2 (選択種類: 参加者内要因) × 6 (シナリオ: 参加者間要因) × 4 (文化: 参加者間要因) の多変量分散分析をコントロール方略ごとに繰り返した。以下では解釈容易性を重視し、コントロール方略ごとに結果を記述していく。なお、表 48 から表 53 で理想的選択度合いと現実的選択度合いのペアについている下線は、下記に示すように有意な差が見られたということを表している。

個人直接コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .45, $F(1, 613) = 759.79$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .55$)、シナリオの主効果 ($F(5, 613) = 23.53$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .16$)、および文化の主効果 ($F(3, 613) = 5.90$, $p = .001$, $\eta_p^2 = .03$) が有意であった。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .95, $F(5, 613) = 6.69$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .05$)、選択種類 × 文化の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .96, $F(3, 613) = 9.40$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .04$) およびシナリオ × 文化の交互作用効果 ($F(15, 613) = 2.17$, p

= .006, $\eta_p^2 = .05$) のどれも有意であった。選択種類 × シナリオ × 文化の二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .98, $F(15, 613) = 0.98$, *ns*, $\eta_p^2 = .02$)。

“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルの検討のため、シナリオおよび文化を固定し、個人直接コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。有意水準 5%で Bonferroni 法による多重比較を行った結果、どのシナリオおよび文化の組み合わせにおいても (全 24 ペア: 6 × 4)、一貫して個人直接コントロール方略の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。

個人間接コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .96, $F(1, 611) = 28.59$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .05$)、シナリオの主効果 ($F(5, 611) = 13.70$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .10$)、および文化の主効果 ($F(3, 611) = 3.77$, $p = .011$, $\eta_p^2 = .02$) が有意であった。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .98, $F(5, 611) = 2.98$, $p = .011$, $\eta_p^2 = .02$)、選択種類 × 文化の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .96, $F(3, 611) = 9.12$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .04$) およびシナリオ × 文化の交互作用効果 ($F(15, 611) = 2.81$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .07$) のどれも有意であった。選択種類 × シナリオ × 文化の二次の交互作用効果も有意であった (Wilks' Lambda = .95, $F(15, 611) = 2.15$, $p = .007$, $\eta_p^2 = .05$)。

“理想—現実”ギャップに関する 3 分類モデルの検討のため、上記と同様にシナリオおよび文化を固定し、個人間接コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、就職試験シナリオおよび共有冷蔵庫シナリオにおいて、韓国参加者の理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。同様のパターンが文化祭参加シナリオにおける日本参加者、韓国参加者およびニュージーランド参加者、グループ課題参加シナリオと寝不足シナリオにおける日本参加者および韓国参加者で観察されたが、逆のパターンが共有冷蔵庫シナリオにおけるイスラエル参加者で観察された。その他のペアについては差が有意では

なく、特にエアロビシナリオにおいては、文化に関わらず理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

代理コントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .82, $F(1, 613) = 137.48, p < .001, \eta_p^2 = .18$)、シナリオの主効果 ($F(5, 613) = 25.10, p < .001, \eta_p^2 = .17$)、および文化の主効果 ($F(3, 613) = 20.45, p < .001, \eta_p^2 = .09$) が有意であった。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .96, $F(5, 613) = 4.66, p < .001, \eta_p^2 = .04$)、選択種類 × 文化の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .98, $F(3, 613) = 3.94, p = .008, \eta_p^2 = .02$) およびシナリオ × 文化の交互作用効果 ($F(15, 613) = 6.43, p < .001, \eta_p^2 = .14$) のどれも有意であった。選択種類 × シナリオ × 文化の二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .96, $F(15, 613) = 1.54, ns, \eta_p^2 = .04$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様にシナリオおよび文化を固定し、代理コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、就職試験シナリオおよびエアロビシナリオにおいて、文化に関わらず理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。同様のパターンが文化祭参加シナリオにおける日本参加者、韓国参加者およびニュージーランド参加者、グループ課題シナリオにおける日本参加者および韓国参加者、寝不足シナリオにおける日本参加者、共有冷蔵庫シナリオにおけるニュージーランド参加者で観察されたが、逆のパターンがグループ課題シナリオにおけるイスラエル参加者で観察された。その他のペアでは有意な差は見られなかった。

自己改善を通じたコントロール方略については、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = .93, $F(1, 613) = 47.43, p < .001, \eta_p^2 = .07$)、シナリオの主効果 ($F(5, 613) = 97.99, p < .001, \eta_p^2 = .44$)、および文化の主効果 ($F(3, 613) = 4.28, p = .005, \eta_p^2 = .02$) が有意であった。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .96, $F(5, 613) = 5.83, p < .001, \eta_p^2 = .05$) および選択種類 × 文化の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .99, $F(3, 613)$)

= 3.02, $p = .029$, $\eta_p^2 = .02$) は有意であったが、シナリオ × 文化の交互作用効果 ($F(15, 613) = 1.22$, ns , $\eta_p^2 = .03$) は有意ではなかった。選択種類 × シナリオ × 文化の二次の交互作用効果は有意であった (Wilks' Lambda = .95, $F(15, 613) = 2.09$, $p = .009$, $\eta_p^2 = .05$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様にシナリオおよび文化を固定し、自己改善を通じたコントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、エアロビシナリオにおいて、文化に関わらず一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。同じパターンが就職試験シナリオにおける日本参加者とニュージーランド参加者、文化祭参加シナリオにおける韓国参加者、寝不足シナリオにおけるイスラエル参加者、共有冷蔵庫シナリオにおけるイスラエル参加者、韓国参加者およびニュージーランド参加者で観察された。逆のパターンは共有冷蔵庫シナリオにおける日本参加者でのみ観察された。その他のペアについては差が有意ではなく、特にグループ課題シナリオにおいては、文化に関わらず理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

二次的コントロール方略については、シナリオの主効果 ($F(5, 612) = 106.16$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .46$) は有意であったが、選択種類の主効果 (Wilks' Lambda = 1.00, $F(1, 612) = 2.69$, ns , $\eta_p^2 < .01$) および文化の主効果 ($F(3, 612) = 2.61$, ns , $\eta_p^2 = .01$) は有意ではなかった。続いて一次の交互作用効果については、選択種類 × シナリオの交互作用効果 (Wilks' Lambda = .84, $F(5, 612) = 22.58$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .16$)、選択種類 × 文化の交互作用効果 (Wilks' Lambda = .99, $F(3, 612) = 2.71$, $p = .045$, $\eta_p^2 = .01$) およびシナリオ × 文化の交互作用効果 ($F(15, 612) = 3.21$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .07$) のどれも有意であった。選択種類 × シナリオ × 文化の二次の交互作用効果は有意ではなかった (Wilks' Lambda = .97, $F(15, 612) = 1.15$, ns , $\eta_p^2 = .03$)。

“理想—現実”ギャップに関する3分類モデルの検討のため、上記と同様にシナリオおよび文化を固定し、二次的コントロール方略において理想的選択度合いと現実的選択度合いを比較した。その結果、仮説とは逆に、個人的な達成状況の2つ、就職試験シナリオとエアロビシナリオにおいて、文化に関わらず一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いよりも有意に高かった。逆のパターン、つまり仮説通りのパターンは文化祭参加シナリオとグループ課題シナリオにおける日本参加者で観察された。その他のペアについては差が有意ではなく、特に寝不足シナリオと共有冷蔵庫シナリオにおいては、文化に関わらず理想的選択度合いと現実的選択度合いとの間に有意な差は見られなかった。

4.2.5. 結果：“理想—現実”ギャップの解明

後半部では、個人直接コントロール方略の“理想的選択度合い—現実的選択度合い”のギャップの発生・消失メカニズムについて、個人特性、状況要因および文化の側面から明らかにしていく。個人直接コントロール方略の理想的選択度合いから現実的選択度合いを引き、差得点をギャップ得点とした。その平均値を文化ごとにまとめると、図13のようになった。

予備的な分析として、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点が国によってどのように異なるのかを見るため、この得点を従属変数、国を要因とする参加者間分散分析を行ったところ、国の主効果が有意であった ($F(3, 633) = 8.88, p < .001$)。そこで、有意水準5%でBonferroni法による多重比較を行ったところ、仮説とは異なる傾向ではあったが、日本 ($M = 2.23$) とニュージーランド ($M = 2.15$) はイスラエル ($M = 1.31$) よりも有意に高く、韓国 ($M = 1.81$) は他国と有意に異なっていなかった。

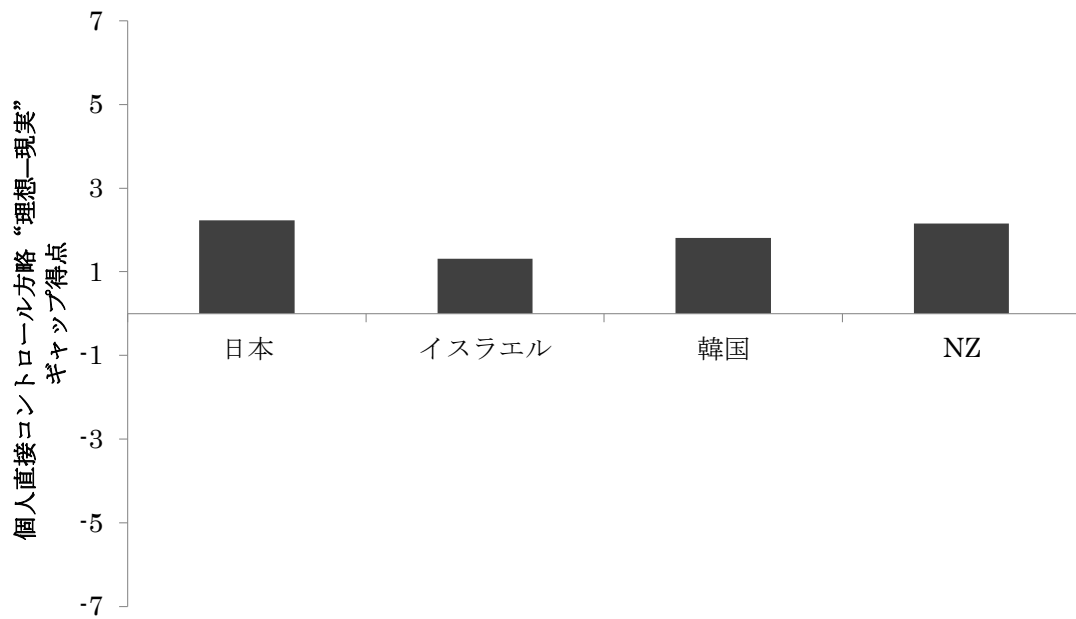


図 13: 研究 6 の各国の個人直接コントロール方略“理想—現実”ギャップ得点

予備的な分析の 2 つ目として、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点が各個人特性とどう関連しているかを見るため、国ごとに相関係数を算出したところ、表 54 のようになった。仮説通り、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点と自尊心との間に有意な負の相関が日本とイスラエルで観測され（それぞれ順番に $r = -.335, p < .001$; $r = -.250, p = .002$ ）、韓国とニュージーランドでは負の相関が有意傾向であった（それぞれ順番に $r = -.149, p = .063$; $r = -.139, p = .063$ ）。同様に、ギャップ得点と促進焦点との間に有意な負の相関がイスラエルとニュージーランドで観測され（それぞれ順番に $r = -.229, p = .005$; $r = -.202, p = .007$ ）、日本と韓国ではその相関が有意でなかった（それぞれ順番に $r = -.013, p = .878$; $r = .011, p = .890$ ）。さらに、ギャップ得点と予防焦点との間に正の相関が日本と韓国で観測され（それぞれ順番に $r = .399, p < .001$; $r = .235, p = .004$ ）、イスラエルでは正の相関が有意傾向であり（ $r = .137, p = .099$ ）、ニュージーランドではその相関が有意でなかった（ $r = .085, p = .258$ ）。以上の相関分析の

結果より、全体的に自尊心と促進焦点は“理想—現実”ギャップを縮める効果、予防焦点は“理想—現実”ギャップを広げる効果があるといえる。

なお、以上の分析をシナリオごとに行ったところ、有意になる箇所は減ったものの、有意傾向や有意である箇所は正負の方向が同一であった。

表 54: 研究 6 の個人直接ギャップ得点と各個人特性との国別相関係数

	自尊心	促進焦点	予防焦点
日本	-.335 ^{***}	-.013	.399 ^{***}
イスラエル	-.250 ^{**}	-.229 ^{**}	.137 [†]
韓国	-.149 [†]	.011	.235 ^{**}
NZ	-.139 [†]	-.202 ^{**}	.085
平均値	3.59	5.16	4.27
標準偏差	0.92	1.02	1.08

[†] $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

本研究で用いた 3 つの個人特性は比較文化研究でよく使用され、文化差が観測されている。例えば、自己報告によるアメリカ人の自尊心得点は中国人や日本人のそれよりも高いという文化差 (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999; Yamaguchi, Greenwald, Banaji, Murakami, Chen, Shiomura, Kobayashi, Cai, & Krendl, 2007)、自己報告によるイスラエル人の促進焦点得点は日本人よりも高く、予防焦点の高低は逆転するという文化差も示されている (Kurman, Liem, Ivancovsky, Morio, & Lee, in press)。そこで、本研究でも同様に文化差が見られるかどうかを検討するため、表 46 にまとめられた各個人特性の平均値について、国を要因とする参加者間分散分析を行ったところ、国の主効果が有意であった (自

自尊心 $F(3, 632) = 106.57, p < .001$; 促進焦点 $F(3, 624) = 80.68, p < .001$; 予防焦点 $F(3, 619) = 13.12, p < .001$ 。そこで、有意水準 5%で Bonferroni 法による多重比較を行ったところ、自尊心得点と促進焦点得点についてはイスラエルが他国よりも有意に高く、韓国とニュージーランドが日本よりも高かった。予防焦点得点については日本と韓国がイスラエルとニュージーランドよりも有意に高かった。よって、個人特性について、上記の先行研究と一致した文化差が得られたといえる。

以上、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップが文化および比較文化的な個人特性と結びついていた。以下では還元主義に基づき、ギャップの文化差を比較文化的な個人特性により説明することを試みる。つまり、本研究で用いた 3 つの個人特性は比較文化研究でよく用いられるものであり、ギャップの文化差が個人特性の差に還元されるかどうかを検討していく。

第一段階として、個人特性を投入する前に、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップ得点を国というカテゴリ変数で説明する重回帰分析を行う。そのため、日本を基準とし、各国を表すダミー変数を 3 つ作成した（日本は常に 0）。ギャップ得点を被説明変数、国を表すダミー変数 3 つを説明変数とした重回帰分析を行ったところ、表 55 のような結果になった。これより、日本ではなくイスラエル ($\beta = -.219, p < .001$) または韓国 ($\beta = -.101, p < .05$) であるほどギャップが縮まるという有意な予測力が得られた。

表 55: 研究 6 のギャップを予測する重回帰分析 (国のみ)

	<i>B</i>	<i>SE(B)</i>	β
切片	2.225	0.142	
イスラエル	-0.918	0.201	-.219***
韓国	-0.417	0.199	-.101*
NZ	-0.075	0.193	-.019

$R^2 = .040$. Adjusted $R^2 = .036$.

* $p < .05$. *** $p < .001$.

第二段階として、3つの個人特性を中心化し、国、個人特性、国と個人特性の交互作用項 (9つ: 3×3) により“理想—現実”ギャップを予測する。投入可能な説明変数が合計 15 個とあるため、重回帰分析のステップワイズ法により変数選択を行ったところ、表 56 のような結果になり、以下の 6 つの説明変数が投入された。

国の説明変数に関して、日本ではなくニュージーランドであるほどギャップが広がるという有意な予測力が得られた ($\beta = .147, p < .001$)。個人特性の説明変数は 3 つとも投入され、自尊心が低いほど ($\beta = -.139, p < .05$)、促進焦点が低いほど ($\beta = -.111, p < .05$)、予防焦点が高いほど ($\beta = .382, p < .001$)、ギャップが広がるという有意な予測力が得られた。交互作用については、イスラエル \times 予防焦点で有意な負の予測力 ($\beta = -.182, p < .001$)、ニュージーランド \times 予防焦点でも有意な負の予測力 ($\beta = -.204, p < .001$) が得られた。この結果は、日本に比べてイスラエルやニュージーランドのような西洋文化においては、ギャップに与える予防焦点の影響が弱まるということを表している。

表 56: 研究 6 のギャップを予測する重回帰分析 (国、個人特性、交互作用)

	<i>B</i>	<i>SE(B)</i>	β
切片	1.659	0.083	
NZ	0.582	0.153	.147***
自尊心	-0.270	0.113	-.139*
促進焦点	-0.195	0.089	-.111*
予防焦点	0.633	0.109	.382***
イスラエル × 予防	-0.555	0.156	-.182***
NZ × 予防	-0.648	0.156	-.204***

$R^2 = .132$. Adjusted $R^2 = .124$.

* $p < .05$. *** $p < .001$.

4.2.6. 考察

研究 6 では、理想的選択度合いと現実的選択度合いの差に関する 3 分類モデルが状況を超えても頑健なものであるかを検討し、その差に関連する要因として個人特性と状況要因と文化を取り上げた。

前半部の分析結果で、個人直接コントロール方略はシナリオおよび文化によらず、一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回っていた。その他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略は、理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回っているケースが多かったものの、シナリオや文化によって一貫せず、逆転するというケースも見受けられた。ここまでは、ギャップに関する 3 分類モデルと一致する結果であった。

二次的コントロール方略はシナリオによって大きく変動し、個人達成状況（就職試験シナリオおよびエアロビシナリオ）においては 3 分類モデルに反し、すべての

国で理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回っていた。他のシナリオにおいては一箇所を除いて3分類モデルと一致し、現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回っていたが（表50から表53を参照）、その差が有意に至ったものは少なかった。個人達成状況では、自分の能力やスキルを伸ばすこと自体が目標なのであり、そのために外界よりも自分自身を変化させるという二次的コントロールが望ましく思われたのであろう。

後半部では、個人直接コントロール方略の“理想—現実”のギャップに着目し、これが自尊心および制御焦点（促進焦点と予防焦点）という個人特性と関連するかを検討し、さらに文化という要因も加えて議論した。はじめにギャップ得点と個人特性との関連、ギャップ得点と文化との関連を別々に示した後で、個人特性の文化差を示し、最終的には個人特性と文化を同時に用いてギャップを説明しようと試みた。その結果、ギャップの文化差は個人特性にすべて還元されず、比較文化的な個人特性を用いても文化差は依然として残存することが示された。

以上、研究6では状況や文化を変化させ、ギャップに関する3分類モデルの頑健性を検討したところ、個人達成場面における二次的コントロール方略を除き、3分類モデルは概ね支持された。さらに、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップの発生および消失メカニズムについて、個人特性と文化の側面から詳細に検討したところ、要因のどれか1つのみが作用するのではなく、これらのインタープレイも含めてモデルを構築する必要性が示唆された。

第V部：総合考察

5.1. 各研究のまとめ

研究1では、本論文で採用したコントロール方略の分類法の信頼性が確認された。具体的には、研究参加者が自由に記述したコントロール方略を2名の評定者がカテゴリ分けしたところ、その評定者間での判断が非常に高い割合で一致していた。これは、その分類法がしっかりとした意味を成し、研究者以外の人でも十分に理解でき、重複や混乱が起こりにくいものであるということを示している。さらに、一次

的コントロール方略と二次的コントロール方略を合わせると、対人場面における問題解決方略を非常に高い割合で網羅できていた。

研究 2 の目的 1 では、各コントロール方略の志向性と個人特性との関連に基づき、分類法の構成概念妥当性を示した。具体的には、個人直接コントロール方略の志向性がシャイネスと負に関連し、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略の志向性が集団主義的傾向と正に関連していた。

研究 2 の目的 2 では、各コントロール方略の志向性と状況要因との関連に基づき、分類法の構成概念妥当性を示した。具体的には、同じ問題を共有する他者が周りに存在すると、代理コントロール方略、集団直接コントロール方略および集団間接コントロール方略がより志向されていた。また、コントロール方略の対象者と親しくない時にも、これらのコントロール方略がより志向されていた。さらに、状況に対して不満を抱いていると、個人直接コントロール方略がより志向され、二次的コントロール方略がより避けられていた。

研究 3 では、各一次的コントロール方略の持つ特徴や選択されやすさを探索的に調査した。具体的には、問題解決に最も有効だと判断されたのは集団直接コントロール方略、最も有効でないとは個人間接コントロール方略であった。また、方略実行によって相手との関係性が最も良くなりやすいと判断されたのは集団間接コントロール方略、最も悪くなりやすいと判断されたのは個人直接コントロール方略であった。さらに、最も“好ましい”方略と最も“行うであろう”方略が一致しない可能性が示された。

研究 4 では、各コントロール方略を理想として取りたい度合いと、現実的に取る度合いの 2 種に分離して測定することを試みた。その結果、個人直接コントロール方略は、一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回り、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略では、理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回ることが多かったが、そうならないケースも見受けられた。二次的コントロール方略は、一貫して現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回

っていた。これらより、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに関しての3分類モデル（個人直接コントロール方略—他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略—二次的コントロール方略）が提案された。

研究5では、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに関する3分類モデルが、状況を超えても頑健なものであるかを検討し、そのギャップに関連する要因として個人特性と状況要因を取り上げた。その結果、状況を変動させてもギャップのパターンが頑健であり、3分類モデルは支持された。また、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップを個人特性（相互協調的自己観、対人的傷つきやすさ）および状況認知（実行による相手との関係性変化の予測）と相関させ、これら対人的な要因と関連することを明らかにした。さらに、このような傾向は個人直接コントロール方略のみで、他のコントロール方略では観察されなかった。

研究6では、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに関する3分類モデルが、状況を超えても頑健なものであるかを検討し、そのギャップに関連する要因として個人特性と状況要因と文化を取り上げた。その結果、一部がモデルとは一致しなかったものの、概ね3分類モデルは支持された。また、個人直接コントロール方略の“理想—現実”のギャップに着目し、この発生および消失メカニズムを個人特性（自尊心、促進焦点、予防焦点）と文化により説明を試みたところ、要因のどれか1つのみが作用するのではなく、これらのインタープレイに着目する必要性が示された。

5.2. 本論文のインプリケーション

5.2.1. 本分類法について

本論文では、Yamaguchi (2001) の議論を土台とし、一次的コントロール方略の更なる分類に着目してきた。第II部にて本分類法の信頼性および妥当性が示されており、この分類法は以下の2つの利点を持つと思われる。1つに、明瞭性が挙げられる。コントロール方略が (a) 行為を行う者 (b) 行為の直接性という2つの基準のみによって分類されている。実際に、研究1にて分類法の分かりやすさが確認さ

れており、これは Rothbaum et al. (1982) 等の先行研究（例えば各コントロールの更なる 4 分類）で問題となっていたカテゴリの重複を回避できるものだと考えられる。

2 つ目の利点として、理論的な厳密性が挙げられる。個人間接コントロール方略、代理コントロール方略、集団直接コントロール方略、集団間接コントロール方略はどれも外界に変化を起こそうと試みるものであり、一次的コントロール方略に分類されるべきものである。これまで西洋を中心とする先行研究では、一次的コントロールとして個人直接コントロール方略しか着目されてこなかった。しかし、研究 1 が示したように、個人直接コントロール方略以外の一次的コントロール方略は、対人場面における問題解決方略のうち約 3 割を占めていた。これは日本人もしくは東アジア人のコントロール方略を研究する上では無視できないカテゴリである。これらの拡張された一次的コントロール方略を分類法に含めたおかげで、対人場面における問題解決方略の大半を網羅することができた。

対人場面における問題解決方略として、本論文ではコントロール方略の新しい分類法を提案してきたが、どの範囲まで一般化できるかは今後の課題であろう。本論文ではすべての研究で大学生のみを対象としており、社会心理学において大学生サンプルのみを対象とすることの危険性は以前から指摘されてきた (e.g., Sears, 1986)。本分類法が大学生ではない人々にも適用可能かどうかを厳密にチェックするためには、研究 1 と同様に質的データの分析から始めなければならない。

一般化可能性について、6 つの研究の実施後にフォローアップ調査が行われた。その結果、本論文の研究 1、研究 4 から研究 6 で扱った計 10 個のシナリオにおける各コントロール方略の分類法はすべて分かりやすい（カテゴリ間が重複してい

ない) と一般人にも評価されていた¹⁷。したがって、本分類法は大学生ではない人々にも理解できるものであり、利点の1つ目、分類法の明瞭性については大学生以外の集団についても担保されると考えられる。

本論文では研究6以外で日本人のみを対象としており、本分類法が他の文化に属する人々に適用可能かどうかは今後の検討課題である。1つ目に、個人直接コントロール方略は昔から多くの先行研究で検討されてきたため、他の文化でも存在するカテゴリであると思われる。

2つ目に、個人間接コントロール方略について、例えばこのカテゴリに含まれるアイロニーは、アメリカの学生の間でも一定の割合で使用されているという(Gibbs, 2000)。よって、使用程度の文化差はあるとしても、個人間接コントロール方略はアメリカのような他文化においても使用されていると思われる。

3つ目に、代理コントロール方略について、この1つの形態として、何らかの仲介者を頼るやり方が挙げられる。例えば中国とシンガポールの有職者は、転職する際に自身と新しい雇用先の仲介役というグァンシー (guanxi) を頼る傾向があるという(Bian & Ang, 1997)。よって、代理コントロール方略は、中国やシンガポールのような他文化においても使用されていると思われる。

4つ目に、集団コントロール方略について、これは人と人とが協力することであり、日常的にも仕事の上でも行われていることであろう。例えば中国人を対象とした研究では、集団でいると手を抜くという社会的な手抜きが起らず、むしろ集団状況では更に努力するというパターンが示されており(Earley, 1989)、問題解決や課題達成において個人よりも集団の方が有効であると認知されているのであろう。よ

¹⁷ 放送大学の通信制課程の学生24名(男性8名、女性16名、年齢 $M = 49.39$ 、年齢 $SD = 10.03$) が調査に参加した。研究1で用いたシナリオ4つ、研究4から研究6で用いたシナリオ6つ、合計10個をコントロール分類法とともに提示し、その分類法がどの程度分かりやすいか(カテゴリ間重複していない等)を5件法(1: わかりにくい—5: わかりやすい)で回答を求めた。24名の平均値を求めたところ、すべての評定値は中点の3よりも高く、最低値は3.21、最高値は4.00、平均値は3.61、中央値は3.57であった。なお、放送大学の学生は通常の四年制大学と異なり、社会人や主婦の方々が多いのが特徴である。

って、集団コントロール方略は、中国のような他文化においても使用されていると思われる。

以上より、本論文で扱ってきたコントロール方略の分類法は、他の文化においても適用可能であると予測され、今後検討していく意義がある。

個人直接コントロール方略以外の一次的コントロール方略を含めることは、学術的に見て意義のあるものだといえる。対人場面における問題が生じる状況は様々であり、現実的に取りうる解決方略は社会規範やその他のルールによって制約を受けることもあるだろう。例えば、文化の窮屈さ (tightness) が高い社会にいと、逸脱行動に対して他者からの寛容性が低く (Gelfand et al., 2011)、人々がそのような逸脱行動を行いたいと思っていたとしても実際には行えないであろう。つまり、そのように窮屈な社会に存する人が個人直接コントロール方略を取りたいと思っていたとしても、実際には取らないということが起こりうる。その際、それ以外の一次的コントロール方略の存在を無視してしまうと、その時点で二次的コントロール方略もしくはコントロールの放棄という選択肢に限られてしまうのである。実際にはそうではなく、その他の一次的コントロール方略に移行することも可能である。この点が先行研究で見過ごされており、“日本人は一次的コントロールよりも二次的コントロールを志向する” という相対説においては (Weisz et al., 1984a)、個人直接コントロール方略以外の方略は特に取り上げられていない。このような誤解を生じさせないためにも、今後のコントロール研究では、個人直接コントロール方略以外の一次的コントロール方略も含めて検討していかなければならない。

5.2.2. 3分類モデルについて

本論文では、各コントロール方略を理想的に取りたい度合いと現実的に取る度合いとに分離し、そのギャップについて3分類モデル (個人直接コントロール方略—その他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略—二次的コントロール方略) を提案し、第IV部においてその頑健性を実証的に検討してきた。本論文ではギャップに着目してきたが、他の特徴に基づいてもこのような3

分類モデルが構築されると思われる。例えば、コントロール方略を実行したことによる調和 (harmony) の維持であろう。個人直接コントロール方略は本論文の研究 3 で示されたように、実行後には相手との関係性に悪影響を最も及ぼしやすいものであり、調和の維持には不利な方略である。一方、他の一次的コントロール方略は、間接的に相手に働きかけたり、別の第三者に行為を代わりに行ってもらったり、集団で働きかけることで責任が分散されたりして、個人直接コントロール方略ほどには調和を乱さないものと思われる。二次的コントロール方略はそもそも外界に働きかけないため、調和への悪影響は全くないと思われる。中間のカテゴリである自己改善を通じたコントロール方略は、外界変化と自己変化の両要素を含むため、個人直接コントロール方略ほどには調和に悪影響を及ぼさないと思われる。このように、調和の維持という側面においても、3 分類モデルが構築できると予想される。

本論文では一貫して、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップが他の方略に比べて大きかった。このようなギャップが消失する条件を実証的に検討するのは、これから期待される研究テーマであると考えられる。具体的には、個人直接コントロール方略を現実的に取る度合いが上昇し、理想的に取りたい度合いに近づく条件を見つけていくことを指す。このような理想状態と現実状態の乖離が消失する条件を明らかにしていくことは、社会的に見て意義があるものといえよう。なぜなら、セルフディスクレパンシー理論に基づくと (Higgins, 1987)、個人直接コントロール方略を取るという理想的な自己像を達成できず、そのような方略を取ることができないという自己像が現実であるとする、理想自己と現実自己が一致しておらず、失意や落胆のような感情を経験する。理想状態と現実状態の乖離が消失することで、このような心理的な不適応状態を避けることができるのであろう。

このような理想状態と現実状態の乖離が消失する条件は、本論文の研究 5 および研究 6 より示唆される。研究 5 では、他者との関係性に対する否定的な信念やそれに関連する個人特性が増加することによって、個人直接コントロール方略において、理想的選択度合いに比べ現実的選択度合いが低下するという現象が見られた。

この結果を逆に解釈すると、例えば相手との関係性が強固であって、個人直接コントロール方略を実行したとしても相手との関係が壊れず、否定的なフィードバックも返ってこない、という信念を持っていたとしたら、おそらく実際に個人直接コントロール方略を選択する度合いが上昇するであろう。研究 6 では、文化と個人特性によって、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップが変動することが示された。例えば、自尊心や促進焦点が高く予防焦点が低いほど、理想的選択度合いに現実的選択度合いが近づくという結果が見られ、このような効果は文化と交互作用を持つことも示された。以上より本論文で示されたのは、他者との関係性に対する信念やそれに関連する個人特性、および人間の基本的な心理傾向や文化によって“理想—現実”ギャップが変動するということであり、これらは 3 分類モデルに影響する要因であるといえる。

研究 5 および研究 6 では、個人直接コントロール方略については、状況によらず一貫して理想的選択度合いが現実的選択度合いを上回っていた。しかし、他の一次的コントロール方略および自己改善を通じたコントロール方略では、状況によって各選択度合いの高低が一貫せず、二次的コントロール方略では、理想的選択度合いと現実的選択度合いの高低が状況によって逆転していた。具体的には、個人的な達成状況では、どの文化でも二次的コントロール方略の現実的選択度合いが理想的選択度合いを上回っていた。これは、個人的な達成状況では他の状況に比べ、コントロールの意味合いが変わってくるためだと考えられる。コントロールとは自分の意図した結果を引き起こすことであり (Weisz et al., 1984a, p. 958)、個人達成場面でのコントロールの目的には自分を変化させること、つまり二次的コントロールも含まれてしまい、この点が集団的な達成場面や対人葛藤場面と異なってくる。以上より、3 分類モデルにおいては、状況特性が個人直接コントロール方略以外のコントロール方略の“理想—現実”ギャップに影響するといえる。

本論文では、個人直接コントロール方略の理想的選択度合いと現実的選択度合いが常に分離していた。もしかしたら、これはシナリオや方略そのものが持つ性質に

よるものかもしれない。本論文で使用したシナリオはすべて、対人場面における問題が提示されたものであり、研究 2 以降ではそこでの具体的な方略を研究者の側で設定して提示していた。しかし、個人直接コントロール方略という 1 つのカテゴリの中に、バリエーションがあることは否めない。コントロール方略の対象者に直接的に意見を言うにしても、表情や声のトーンなどの非言語コミュニケーションが変われば、相手からの反応も変わるであろう。そのような違いは本論文では検討できていなかった。今後は、そのような非言語コミュニケーションについての要因が 3 分類モデルに与える影響も検討する意義があるといえる。

5.2.3. コントロールの優位性について

研究 4 から研究 6 を通じて、どの文化および状況においても、個人直接コントロール方略は理想的ではあるが現実的にはそれほど選択されないという一貫した結果が得られた。この結果は、コントロールの優位性に関して先行研究で見られている矛盾を解く鍵となりうる。

日本人のコントロールの優位性に関して、主に以下の 2 つの主張が存在する。1 つは Weisz et al. (1984a) に代表される相対説であり、日本人にとっては一次的コントロールよりも二次的コントロールの方が優勢であるとされる。もう 1 つは Heckhausen & Schulz (1995, 1999) に代表される普遍説であり、日本のみに限らずどの文化に属する人であっても、またどのような年齢の人であっても、二次的コントロールよりも一次的コントロールの方が優勢であるとされる。このように対立した主張が見受けられており、本論文の序論で 3 つの可能性を挙げた。1 つ目に扱われている状況や文脈が研究間で異なっている可能性、2 つ目にコントロールの概念が研究間で異なっている可能性、3 つ目に理想とする行動と実際に行われる行動という差異が考慮されていない可能性である。

1 つ目の可能性について本論文から示されたのは、コントロールという概念を扱う際に、当人の置かれている場面や状況を特定する必要性である。本論文の研究 4 および研究 6 では、個人達成場面において個人直接コントロール方略よりも自己改

善を通じたコントロール方略や二次的コントロール方略の度合い（理想と現実の違いに関わらず）が高いという傾向が得られている（表 30 および表 48 から表 53 を参照）。一方、集団達成場面と対人葛藤場面ではそのような傾向は得られていない。よって、相対説と普遍説の対立を論じる際には、人の置かれている場面や状況を特定した上で、コントロール志向性を議論する必要があるといえよう。

2 つ目の可能性について、本論文のインプリケーションを以下に記述する。本論文で扱ってきた分類法に基づくと、一次的コントロールというのは一人で直接的に相手に働きかける手法だけでなく、間接的に働きかけたり、第三者にお願いして代わりに解決してもらったり、周りの人と協力して解決したりすることも含まれる。先行研究では、個人直接コントロールが取り上げられることが多かったが、相対説を支持する Weisz et al. (1984a) や普遍説を支持する Heckhausen & Schulz (1995, 1999) では特にそのような点は明示されておらず、別のタイプの一次的コントロールを含めていないとは言い切れない。したがって、俎上に載せられている一次的コントロールの概念がそもそも異なっているのかもしれない。

3 つ目の可能性について、本論文のインプリケーションを以下に記述する。Weisz et al. (1984a) の主張は現実的な選択、Heckhausen & Schulz (1995, 1999) の主張は理想的な選択について議論している可能性が考えられる。Weisz et al. は子育て、社会化、宗教、哲学、労働、精神療法という分野での先行研究をレビューし、日本で二次的コントロールを志向するような環境が形作られていくと主張している。Weisz et al. はさらに、日本人が二次的コントロールを“好む”という踏み込んだ解釈までしている。しかし、人が置かれている環境は常に選好を生み出すわけではなく、人のデフォルトの行動を決める誘因構造に過ぎないという解釈もあり得る (e.g., Yamagishi et al., 2008)。つまり、環境から誘導される行動というのは、その人が理想的には取りたいと思う行動を必ずしも反映しているわけではない。一方、Heckhausen & Schulz は適応的な価値という観点から主張を展開しており、二次的コントロールと比した一次的コントロールの機能的な優位性が、文化や歴史

を通じて普遍的であるとしている。これは生物学的な適応で、個体の適応にとって理想的な選択は確かに一次的コントロールなのかもしれないが、実際にこれが実行されやすいかどうかについては述べておらず、現実的な選択というのは特に考慮されていない。

以上より、コントロールの優位性に関して先行研究で見られている矛盾した2つの立場を仲裁する可能性として、本論文からのインプリケーションとして3つの可能性を挙げた。今後のコントロール研究では、これらの点を意識しながら論じることが望まれる。

5.3. 今後の展望

今後の研究展望として1つ目に、分類法およびギャップに関する3分類モデルの更なる精緻化が挙げられる。本論文の研究1から研究3まで、自己改善を通じたコントロール方略が含まれておらず、それを含めた分類法の妥当性は確認されていない。よって、第II部で扱った分類法に自己改善を通じたコントロール方略を加えた分類法を提案し、信頼性や妥当性を確認していくことが望まれる。

本論文の第IV部では、集団コントロール方略を含めずに実証的研究を進めていた。これは、用いた対人場面のうち個人達成場面において、集団コントロール方略の実施が現実的でなく、想像困難だと判断したためである。例えば就職試験シナリオで、ある企業の就職試験のプレゼンテーションで失敗した同じ境遇の他者を見つけ、その他者とともにも集団コントロール方略を行うというのは現実的に起こりにくいであろう。よって、本論文では研究6でのシナリオ間の方法論的一貫性を重視し、第IV部では集団コントロール方略を含めなかった。しかし、他の集団達成場面や対人葛藤場面では、むしろ集団コントロール方略が有効であることもある（研究3において集団直接コントロール方略が最も有効であると示されている）。今後は研究デザインを工夫し、このカテゴリも含め、3分類モデルの頑健性を検証していくべきであろう。

2つ目に、外的妥当性の検証が挙げられる。本論文で扱ったのはすべて架空の状況であり、参加者が実際に体験した状況ではない。質問紙で描かれた状況を想像してコントロール方略を選択する場合と、実際に相手の面前でコントロール方略を選択する場合とでは、心の中で行われる認知や評価が異なり、選択される方略も変わってくると考えるのが自然であろう。

外的妥当性に関して、本論文で用いたシナリオは対人場面における問題を網羅できていたわけではない。例えば、本論文で用いたシナリオは就職試験やエアロビクスの場面など一部を除き、対等な地位の関係性を扱っていた。ポライトネス理論に基づくと (Brown & Levinson, 1987)、相手よりも立場が上か下かにより、フェイス (ポジティブな社会的イメージ) に配慮する必要性が変わってくるという。フェイス脅威の大きさがコントロール間で異なっているとすると、立場の違いによってフェイス配慮の必要性も変化し、それに応じて選択されるコントロールも変わってくるであろう。したがって、今後の研究では更に幅広い対人場面、例えば上下関係を含めた検討が必要であろう。

3つ目に、各コントロール方略の先行要因だけでなく、帰結にも着目することが挙げられる。本論文ではコントロール方略を選択するにあたっての先行要因を取り上げたが、方略実行後の帰結については検討していなかった。よって、コントロール方略を実際に行った現場をサンプリングし、実行した後の帰結についても検討する意義があると思われる。例えば、実行した後の気分や感情、対象者との関係性の変化について研究することが望まれる。特に検討すべき点は、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップが大きいコントロール方略を実行した場合と、そのギャップが小さいコントロール方略を実行した場合との比較であろう。本論文で述べたように、このギャップが大きい状態というのは理想状態と現実状態が乖離しており、失意や落胆のようなネガティブ感情に結びつくと思われるが、この点に関しては実証されていない。したがって、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギ

ギャップが大きいコントロール方略を取り続けることで、方略実行後に心理的な不適応状態に結びつくかどうかを検討する意義があるといえる。

4つ目に、測定レベルの拡張が挙げられる。本論文では理想的選択 (ideal choice) と現実的選択 (actual choice) の2つを取り上げた。これらに加え、義務的選択 (ought choice) も含めて今後は検討する価値があるだろう。義務的選択とは“取るべき選択”のことであり、周りの他者からの期待や社会規範により規定される行動だといえる。これは Gelfand et al. (2011) の文化の窮屈さ (tightness) と大きく関わり、例えば窮屈さの高い社会 (ルールを守らなければいけない社会、逸脱行動に厳しい社会) では現実的選択が義務的選択に近づくのに対し、窮屈さの低い社会では現実的選択が理想的選択に近づくだろうと予想される。このような点を比較文化的に検討する意義があるだろう。

5つ目に、個人直接コントロール方略の“理想—現実”ギャップの説明項として、国レベルの変数を投入することが挙げられる。本論文では、理想的選択度合いと現実的選択度合いのギャップに対する説明項として、個人特性、状況要因、文化を取り上げた。研究6では、そのギャップの文化差を説明するために比較文化的な個人特性を使用し、文化差が個人特性の差に還元されるかどうかを試みたが、文化差は残存したままであった。個人特性は個人レベルの変数であり、文化差とはレベルが異なる。したがって、今後はこのような文化差を説明するために、GDP や人口など国レベルの変数も投入することが望まれる。そのようにしてミクロレベルとマクロレベルの変数を同時に投入することで、ギャップの文化差の説明力が上がることで期待される。

最後に、コントロール方略とウェルビーイングとの関連について今後の展望を述べる。先行研究は序論で紹介したとおり、ネガティブイベントを経験している人や高齢者を対象にした研究が進んでいる。しかし、比較文化的な検討はほとんど行われていない。ウェルビーイングに結びつく要因には文化差があることが様々な研究で指摘されており (Bond, 2013; Diener, 2012)、コントロールも例外ではないだろ

う。コントロールとウェルビーイングの関係に関する先行研究で、東アジア文化に行われたものは非常に少ないという状況である。したがって、コントロールからウェルビーイングに結びつくルートのうち、東アジア文化に特有のものを発見していくことは、西洋文化の研究者に対して警鐘を鳴らすという意味でも大切である。主観的なウェルビーイングに結びつくのは、自尊心のような西洋的な価値観だけではない (Diener, Oishi, & Lucas, 2003)。日本のような集団主義的な文化では、対人関係が良好であることも人生満足感に重要であるという (Kwan, Bond, & Singelis, 1997)。ゆえに、対人場面での問題自体は解決しなくとも、実行の後に対人関係が良好になるようなコントロールを用いることで、ウェルビーイングが上昇する可能性は考えられないだろうか。このように文化特定の価値とそれがウェルビーイングに結びつくルートを明らかにしていく必要があり (Diener et al., 2003)、それが社会心理学の役目であり、今後のコントロール研究が期待される。

引用文献

- 相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, **62**, 149-155.
- Ashman, O., Shiomura, K., & Levy, B. R. (2006). Influence of culture and age on control beliefs: The missing link of interdependence. *The International Journal of Aging and Human Development*, **62**, 143-157.
- Azuma, H. (1984). Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, **39**, 970-971.
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: Freeman.
- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, **57**, 547-579.
- Bian, Y., & Ang, S. (1997). Guanxi networks and job mobility in China and Singapore. *Social Forces*, **75**, 981-1005.
- Bond, M. H. (2013). The pan-cultural of well-being: But how does culture fit into the equation? *Asian Journal of Social Psychology*, **16**, 158-162.
- Brislin, R. W. (1980). Translation and content analysis of oral and written materials. In H. C. Triandis & J. W. Berry (Eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology: Vol. 2. Methodology*. Boston: Allyn and Bacon. pp. 389-444.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carver, C. S., & Connor-Smith, J. (2010). Personality and coping. *Annual Review of Psychology*, **61**, 679-704.

- Chang, W. C., Chua, W. L., & Toh, Y. (1997). The concept of psychological control in the Asian context. In K. Leung, U. Kim, S. Yamaguchi, & Y. Kashima (Eds.), *Progress in Asian social psychology*. Vol. 1. Singapore: Wiley. pp. 95-117.
- Cheng, C., Cheung, S.-F., Chio, J. H.-M., & Chan, M.-P. S. (2013). Cultural meaning of perceived control: A meta-analysis of locus of control and psychological symptoms across 18 cultural regions. *Psychological Bulletin*, **139**, 152-188.
- Christopher, A. N., Saliba, L., & Deadmarsh, E. J. (2009). Materialism and well-being: The mediating effect of locus of control. *Personality and Individual Differences*, **46**, 682-686.
- Cialdini, R. B., Borden, R. J., Thorne, A., Walker, M. R., Freeman, S., & Sloan, L. R. (1976). Basking in reflected glory: Three (football) field studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 366-375.
- Cohen, J. (1960). A coefficient of agreement for nominal scales. *Educational and Psychological Measurement*, **20**, 37-46.
- Dan, O. (2011). Under vs. over primary control discrepancies and their relationships to well-being in a primary control culture. *Psychology*, **2**, 440-444.
- Diener, E. (2012). New findings and future directions for subjective well-being research. *American Psychologist*, **67**, 590-597.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 71-75.

Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, culture, and subjective well-being: Emotional and cognitive evaluations of life. *Annual Review of Psychology*, **54**, 403-425.

土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂

Earley, P. C. (1989). Social loafing and collectivism: A comparison of the United States and the People's Republic of China. *Administrative Science Quarterly*, **34**, 565-581.

遠藤可奈美 (2014). 高齢者福祉施設における組織マネジメントと人材育成との関連に関する研究—「おむつゼロ」を達成した施設における取り組みを通して— 北星学園大学大学院論集, **5**, 83-102.

Endo, Y., Heine, S. J., & Lehman, D. R. (2000). Culture and positive illusions in close relationships: How my relationships are better than yours. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1571-1586.

Essau, C. A., & Trommsdorff, G. (1996). Coping with university-related problems: A cross-cultural comparison. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **27**, 315-328.

Fischer, R., & Schwartz, S. (2011). Whence differences in value priorities? Individual, cultural, or artifactual sources. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **42**, 1127-1144.

藤井 勉・相川 充 (2013). シャイネスの二重分離モデルの検証—IATを用いて— 心理学研究, **84**, 529-535.

藤森立男 (1989). 日常生活にみるストレスとしての対人葛藤の解決過程に関する研究 社会心理学研究, **4**, 108-116.

- 福島 治・大淵憲一・小嶋かおり (2006). 対人葛藤における多目標—個人資源への関心、評価的観衆、及び丁寧さが解決方略の言語反応に及ぼす効果— 社会心理学研究, **22**, 103-115.
- Gelfand, M. J., Raver, J. L., Nishii, L., Leslie, L. M., Lun, J., Lim, B. C., . . . Yamaguchi, S. (2011). Differences between tight and loose cultures: A 33-nation study. *Science*, **332**, 1100-1104.
- Gibbs, R. W. Jr. (2000). Irony in talk among friends. *Metaphor and Symbol*, **15**, 5-27.
- Gould, S. J. (1999). A critique of Heckhausen and Schulz's (1995) life-span theory of control from a cross-cultural perspective. *Psychological Review*, **106**, 597-604.
- Gudykunst, W. B., & Ting-Toomey, S. (1988). *Culture and interpersonal communication*. Newbury Park: Sage.
- Haynes, T. L., Heckhausen, J., Chipperfield, J. G., Perry, R. P., & Newall, N. E. (2009). Primary and secondary control strategies: Implications for health and well-being among older adults. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **28**, 165-197.
- Heckhausen, J. (2003, May). *The life-span theory of control as a paradigm to study illness and disability in old age*. Paper session presented at the UC/APA Conference on Health Psychology and Aging, Lake Arrowhead, CA.
- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1995). A life-span theory of control. *Psychological Review*, **102**, 284-304.

- Heckhausen, J., & Schulz, R. (1999). The primacy of primary control is a human universal: A reply to Gould's (1999) critique of the life-span theory of control. *Psychological Review*, **106**, 605-609.
- Heidemeier, H., & Göritz, A. S. (2013). Perceived control in low-control circumstances: Control beliefs predict a greater decrease in life satisfaction following job loss. *Journal of Research in Personality*, **47**, 52-56.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, **106**, 766-794.
- Heine, S. J., Lehman, D. R., Peng, K., & Greenholtz, J. (2002). What's wrong with cross-cultural comparisons of subjective Likert scales?: The reference-group effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 903-918.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- 板津裕己 (1992). 生き方の研究—尺度構成と自己態度の関わりについて— カウンセリング研究, **25**, 85-93.
- Jackson, T., Flaherty, S. R., & Kosuth, R. (2000). Culture and self-presentation as predictors of shyness among Japanese and American female college students. *Perceptual and Motor Skills*, **90**, 475-482.
- Kojima, H. (1984). A significant stride toward the comparative study of control. *American Psychologist*, **39**, 972-973.

- Kurman, J., & Dan, O. (2007). Unpackaging cross-cultural differences in initiation between Israeli subgroups: Tradition and control orientations as mediating factors. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **38**, 581-594.
- Kurman, J., Hui, C. M., & Dan, O. (2012). Changing the world through changing the self: Understanding a new control strategy through self-reported coping plans in two cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **43**, 15-22.
- Kurman, J., Liem, G. A., Ivancovsky, T., Morio, H., & Lee, J. (in press). Regulatory focus as an explanatory variable for cross-cultural differences in achievement-related behavior. *Journal of Cross-Cultural Psychology*.
- Kurman, J., Sagie, I., Yamaguchi, S., Sawaumi, T., & Park, J. (2013, June). *Control strategies, culture, and regulatory focus*. Paper session presented at the International Association for Cross-Cultural Psychology 2013 regional conference, Los Angeles, California.
- 黒田祐二・有年恵一・桜井茂男 (2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係—相互協動的-相互独立的自己観を踏まえた検討— 教育心理学研究, **52**, 24-32.
- 黒川光流 (2014). 集団活動への参加および自集団評価に及ぼす振り返りの効果 富山大学人文学部紀要, **61**, 41-58.
- Kwan, V. S. Y., Bond, M. H., & Singelis, T. M. (1997). Pancultural explanations for life satisfaction: Adding relationship harmony to self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 1038-1051.
- Lam, A. G., & Zane, N. W. S. (2004). Ethnic differences in coping with interpersonal stressors: A test of self-construals as cultural mediators. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **35**, 446-459.

- Landis, J. R., & Koch, G. G. (1977). The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, **33**, 159-174.
- Langer, E. L. (1975). The illusion of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 311-328.
- Latané, B. (1981). The psychology of social impact. *American Psychologist*, **36**, 343-356.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company.
- Leary, M. R. (1986). Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment*. New York: Plenum Press. pp. 27-38.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 32. San Diego: Academic Press. pp. 1-62.
- Levenson, H. (1981). Differentiating among internality, powerful others, and chance. In H. M. Lefcourt (Ed.), *Research with the locus of control construct*. Vol. 1. New York: Academic Press. pp. 15-63.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 854-864.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

- Mo, S., Shen, C., & Zhou, Z. (2009). Research on the relationship among subjective well-being, locus of control and coping style of college students. *Chinese Journal of Clinical Psychology, 17*, 292-294.
- Morling, B. (2000). "Taking" an aerobics class in the U.S. and "entering" an aerobics class in Japan: Primary and secondary control in a fitness context. *Asian Journal of Social Psychology, 3*, 73-85.
- Morling, B., & Evered, S. (2006). Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin, 132*, 269-296.
- Morling, B., & Evered, S. (2007). The construct formerly known as secondary control: Reply to Skinner (2007). *Psychological Bulletin, 133*, 917-919.
- Morling, B., & Fiske, S. T. (1999). Defining and measuring harmony control. *Journal of Research in Personality, 33*, 379-414.
- Morling, B., Kitayama, S., & Miyamoto, Y. (2002). Cultural practices emphasize influence in the United States and adjustment in Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28*, 311-323.
- 縄田健悟・山口裕幸 (2011). 個人間の危害行動が集団間紛争へと拡大するとき— 一時集団における集団間代理報復の萌芽的生起— 実験社会心理学研究, **51**, 52-63.
- Ng, S. H. (2005). Intergroup behaviour and ethnicity: A social psychological perspective. *Asian Ethnicity, 6*, 19-34.
- Norem, J. K., & Cantor, N. (1986). Defensive pessimism: Harnessing anxiety as motivation. *Journal of Personality and Social Psychology, 51*, 1208-1217.
- Oerter, R., Oerter, R., Agostiani, H., Kim, H.-O., & Wibowo, S. (1996). The concept of human nature in East Asia: Etic and emic characteristics. *Culture and Psychology, 2*, 9-51.

- Ohbuchi, K., Chiba, S., & Fukushima, O. (1996). Mitigation of interpersonal conflicts: Politeness and time pressure. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **22**, 1035-1042.
- Ohbuchi, K., Fukushima, O., & Tedeschi, J. T. (1999). Cultural values in conflict management: Goal orientation, goal attainment, and tactical decision. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **30**, 51-71.
- Ohbuchi, K., & Tedeschi, J. T. (1997). Multiple goals and tactical behaviors in social conflicts. *Journal of Applied Social Psychology*, **27**, 2177-2199.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 5-37.
- Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs: General and Applied*, **80**, 1-28.
- Sastry, J., & Ross, C. E. (1998). Asian ethnicity and the sense of personal control. *Social Psychology Quarterly*, **61**, 101-120.
- 澤 成都子・森永康子 (2014). 就職面接場面における自己高揚呈示が大学生に及ぼすネガティブな影響の検討 広島大学心理学研究, **13**, 45-59.
- Sawaumi, T. (2007, July). *Shyness and collectivism among Japanese college students: Mediating effects of affiliative tendency and sensitivity to rejection*. Paper session presented at the 7th biennial conference of Asian Association of Social Psychology, Sabah, Malaysia.

- Sawaumi, T., Yamaguchi, S., Park, J., & Robinson, A. R. (in press). Japanese control strategies regulated by urgency and interpersonal harmony: Evidence based on extended conceptual framework. *Journal of Cross-Cultural Psychology*.
- Sears, D. O. (1986). College sophomores in the laboratory: Influences of a narrow data base on social psychology's view of human nature. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 515-530.
- Seginer, R., & Halabi, H. (1991). Cross-cultural variations of adolescents' future orientation: The case of Israeli Druze versus Israeli Arab and Jewish male. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **22**, 224-237.
- Seginer, R., Trommsdorff, G., & Essau, C. (1993). Adolescent control beliefs: Cross-cultural variations of primary and secondary orientations. *International Journal of Behavioral Development*, **16**, 243-260.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Skinner, E. A. (1996). A guide to constructs of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 549-570.
- Skinner, E. A. (2007). Secondary control critiqued: Is it secondary? Is it control? Comment on Morling and Evered (2006). *Psychological Bulletin*, **133**, 911-916.
- Snyder, C. R., & Lopez, S. J. (2007). *Positive psychology: The scientific and practical explorations of human strengths*. Thousand Oaks: Sage.
- Sommers, S. (2011). *Situations matter: Understanding how context transforms your world*. New York: Riverhead Books.

- 鈴木英一郎・小塩真司 (2002). 対人的傷つきやすさ尺度作成の試み—信頼性・妥当性の検討— 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 278.
- 高田奈緒美・大淵憲一 (2009). 対人葛藤における寛容性の研究—寛容動機と人間関係— 社会心理学研究, **24**, 208-218.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的—相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, **24**, 157-173.
- Thiruchelvi, A., & Supriya, M. V. (2012). An investigation on the mediating role of coping strategies on locus of control: Wellbeing relationship. *The Spanish Journal of Psychology*, **15**, 156-165.
- Thompson, S. C. (1981). Will it hurt less if I can control it? A complex answer to a simple question. *Psychological Bulletin*, **90**, 89-101.
- Tobin, S. J., & Raymundo, M. M. (2010). Causal uncertainty and psychological well-being: The moderating role of accommodation (secondary control). *Personality and Social Psychology Bulletin*, **36**, 371-383.
- 塚原拓馬 (2008). 2次コントロール研究の展望—学習性無力感理論修正と生涯発達心理学への示唆— 心理学評論, **51**, 396-414.
- 塚原拓馬 (2010). 1次/2次コントロールにおける Back/up モデルの検証—尺度作成と否定的事態に対するコントロール方略の作動関係— 教育心理学研究, **58**, 186-197.
- Wang, Y. Z., Rothbaum, F., & Weisz, J. (2010, April). *Primary/Secondary control and their relationship with youths' self/world views*. Paper session presented at the Jacobs Foundation Conference on the Role of Values and Religion in Youth Development: A Culture-Informed Perspective, Marbach Castle, Germany.

- Weisz, J. R., Eastman, K. L., & McCarty, C. A. (1996). Primary and secondary control in East Asia: Comments on Oerter et al. (1996). *Culture and Psychology, 2*, 63-76.
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984a). Standing out and standing in: The psychology of control in America and Japan. *American Psychologist, 39*, 955-969.
- Weisz, J. R., Rothbaum, F. M., & Blackburn, T. C. (1984b). Swapping recipes for control. *American Psychologist, 39*, 974-975.
- Wrosch, C., Heckhausen, J., & Lachman, M. E. (2000). Primary and secondary control strategies for managing health and financial stress across adulthood. *Psychology and Aging, 15*, 387-399.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science, 19*, 579-584.
- Yamaguchi, S. (1994). Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagitcibasi, S. C. Choi, & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications*. Thousand Oaks: Sage. pp. 175-188.
- Yamaguchi, S. (1998). Biased risk perceptions among Japanese: Illusion of interdependence among risk comparisons. *Asian Journal of Social Psychology, 1*, 117-131.
- Yamaguchi, S. (2001). Culture and control orientations. In D. Matsumoto (Ed.), *The handbook of culture and psychology*. New York: Oxford University Press. pp. 223-243.

- Yamaguchi, S., & Ariizumi, Y. (2006). Close interpersonal relationships among Japanese: Amae as distinguished from attachment and dependence. In U. Kim, K.-S. Yang, & K.-K. Hwang (Eds.), *Indigenous and cultural psychology: Understanding people in context*. New York: Springer Science and Business Media. pp. 163-174.
- Yamaguchi, S., Gelfand, M., Ohashi, M. M., & Zemba, Y. (2005). The cultural psychology of control: Illusions of personal versus collective control in the United States and Japan. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **36**, 750-761.
- Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A. (2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science*, **18**, 498-500.
- Yamaguchi, S., Kuhlman, D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **26**, 658-672.
- Zimbardo, P. G., Pilkonis, P. A., & Norwood, R. M. (1975). The social disease called shyness. *Psychology Today*, **8**, 69-72.

謝辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々からご指導やご支援をいただきました。

唐沢かおり教授（東京大学大学院）、亀田達也教授（同）、相川充教授（筑波大学）、村本由紀子准教授（東京大学大学院）にはご多忙な中、非常に短い期間で拙稿に数多くの有益なコメントをいただきました。本論文がいくらかでも学術的および社会的に意義を持つものとするれば、その大半は上記の方々コメントによるものです。唐沢教授、村本准教授には、リサーチ・ミーティングへの参加を許可していただき、現在に至るまで非常に多くの刺激をいただくことができました。相川教授には数年前から開始した共同研究にて多大なる助力をいただき、研究発表では研究者でない人々が見ても分かるくらいに平易な言葉を使うべきだ、という研究者が見落としがちな点を何度もご指導くださいました。ここに記して御礼申し上げます。

山口勸教授（東京大学大学院）には学部生の頃から長年ご指導いただき、本論文に収められた研究の全ては山口教授との共同研究によるものです。本論文のテーマは山口教授の研究プロジェクトの一環として始まったもので、先生のご指導なくしては達成し得ないものでした。些末に見えるような事柄であってもなおざりにしない注意深さ、細かいことにとらわれすぎずに大枠を意識する大局的な視点の2つのバランスを取る重要性を繰り返し教えていただきました。ここに記して御礼申し上げます。

本論文に収められた研究と平行して行っていた研究の共同研究者である藤井勉助教授（誠信女子大学）、中野友香子氏（東北大学大学院）は同じ時期に博士論文を執筆する仲間でもあり、お互いの博士論文執筆のために共に支えあいました。同じく共同研究者であるいとうたけひこ教授（和光大学）には論文執筆を効率化できるアドバイスをいただきました。椿まゆみ教授（文京学院大学）、岡田靖子講師（清泉女子大学）には本論文の統計分析においてサポートをいただきました。ここに記して御礼申し上げます。

本論文に収められた研究の一部は Jenny Kurman 氏、Joonha Park 氏、Angela R. Robinson 氏、Inbal Sagie 氏との共同研究によるものです。特に研究 6 においては他国からデータを収集する際に手助けをしていただき、この方々の助力無くしては達成し得ないものでした。ここに記して御礼申し上げます。

山口教授の研究・ミーティングで定期的に議論を交わした今城志保氏、源氏田憲一氏、橋本博文氏、福沢愛氏、李珠氏、長島洋介氏、Yida Zhai 氏、檜原潤氏、大橋卓真氏には日常的にも学術的な刺激をいただきました。また、東京大学大学院社会心理学研究室の事務のみなさま、大学院生のみなさま、学部生のみなさまにもお世話になりました。

研究者の道を歩んでいくことに賛同してくれ、これまで精神的にも経済的にも支えてくれた家族に感謝いたします。

お世話になった方々のお名前をすべて挙げることはできませんが、他にも多くの方々のご支援やご協力があったことを最後に記し、謝辞とさせていただきます。

2015年1月

澤海 崇文

付録

付録 1: 研究 1 で用いたシナリオ

付録 2: 研究 1 で用いたコーディングマニュアル

付録 3: 研究 2 で用いたシナリオと各コントロール方略

付録 4: 研究 3 で用いたシナリオと各コントロール方略

付録 5: 研究 4 と研究 6 で用いたシナリオと各コントロール方略

付録 6: 研究 5 で用いたシナリオと各コントロール方略

付録 1: 研究 1 で用いたシナリオ

サークルシナリオ

あなたは大学で運動サークルに所属しています。このスポーツはメンバー同士の連携が非常に重要です。さて、同じチームに同期のNさんという人がいます。Nさんはチーム内で重要なポジションではありません。（低重要度条件）/Nさんはチーム内で非常に重要なポジションです。（高重要度条件）最近Nさんは練習をさぼりがちなのですが、もうすぐ試合なのでもっと練習に来てほしいと、みな思っています。Nさんは説得すれば早く練習に来てくれそうです。（調和維持容易条件）/しかし、Nさんは人に強制されるのを好ましく思っていない。強く説得すれば練習には来てくれそうですが、Nさんとの関係が気まづくなってしまうそうです。（調和維持困難条件）このような状況で、Nさんにもっと練習に来てもらえないかと、あなたも他のメンバーもみな考えています。

共同作業シナリオ

あなたはゼミで何人かと共同作業をおこなっています。作業は順調で、このままいけば発表の日に十分間に合いそうです。（低重要度条件）/しかし作業がはかどっておらず、このままでは発表の日に間に合いそうにありません。（高重要度条件）さて、メンバーの一人にSさんがいます。Sさんは作業をあまり真剣にやってくれず、みな気になっています。Sさんは、頼めば早く応じて真剣に作業をやってくれそうです。（調和維持容易条件）/Sさんは、頼めば真剣に作業をやってくれそうですが、グループの雰囲気は悪くなりそうです。（調和維持困難条件）このような状況で、Sさんがもっとがんばって、作業の効率をさらに上げることはできないものかと、あなたも他のメンバーもみな考えています。

試験シナリオ

あなたは大学で授業を受けています。最終試験が近づいてきましたが、あなたも他の友達も今までに何度か授業を欠席していて、ノートが全部そろっていません。今の状況でも簡単に単位は取れそうですが、足りないノートがそろえば、試験勉強がより楽になります。（低重要度条件）/この授業の単位が取れなければ進級できないため、足りないノートをそろえて勉強したいと思っています。（高重要度条件）さて、同じ授業を受けているクラスメートにTさんがいます。Tさんはすべての授業に出席していて、ノートを全部そろえています。Tさんは気前がいいので、頼めばすぐにノートを貸してくれそうです。（調和維持容易条件）/Tさんはノートを貸すこと自体を好ましく思っていないので、頼めばノートを貸してくれそうですが、Tさんとの関係が気まづくなってしまいそうです。（調和維持困難条件）このような状況で、Tさんからノートを借りられないものかと、あなたも他の友達もみな考えています。

学園祭シナリオ

あなたは大学の学園祭で、クラスのメンバーと一緒に屋台で食べ物を売っています。学園祭も終わりに近づきましたが、まだ売れずに残っているものもあります。しかし、すでに黒字は確定していますし、一人あたりの利益はたいしたものではありません。（低重要度条件）/赤字を出すと全員で自腹を切ることになるため、売れ残りを早くさばきたいところです。（高重要度条件）さて、同じクラスに客引きのうまいYさんがいます。いま、Yさんは疲れ気味で客引きを休んでいます、頼めば早く手伝ってくれそうです。（調和維持容易条件）/いま、Yさんは疲れ気味で客引きを休んでいます。頼めば何とか客引きを手伝ってくれそうですが、クラスの雰囲気は悪くなりそうです。（調和維持困難条件）このような状況で、客引きのうまいYさんにもっと手伝ってもらい、売れ残りをさばけないかと、あなたも他のメンバーもみな考えています。

注：下線部分で条件を操作した。前半部はコントロールの重要度、後半部は調和維持難易度の操作である。

付録 2: 研究 1 で用いたコーディングマニュアル

サークルシナリオ

個人直接コントロール方略:

N さんを注意する、直接話す、無理やり参加させる、練習量をふやす

個人間接コントロール方略:

さりげなく言う、来て欲しいことを態度や行為で暗に示す（自分がかんばって示すなど）、参加させるために直接的じゃないがなんらかの行動を取るもの（コミュニケーションを図る、仲良くなる、やさしく接する、おだてる、さしいれ、話をきく、相手に気を遣うなど）

代理コントロール方略:

誰か（コーチなど）に頼んで N さんに言ってもらう、など

集団直接コントロール方略:

みんなで言うといった類のもの

集団間接コントロール方略:

さりげなくみんなで言う、個人間接コントロールの集団版（みんなで仲良くやる、雰囲気を作る、チームの団結力をあげるなど）、みんなで相談する（相談した後にコントロールするかもしれないので）

二次的コントロール方略:

自分でやる系（自分でやる、手伝って一緒にやる、がんばる）、感情の変化を伴う「あきらめる系」（我慢する、八つ当たりする、など）、Nさんの参加以外の代替手段をとる（他のみんなでがんばる、サークルをやめてもらう、無視する、自分も練習しない、など）

コントロールの放棄:

何もいわない、観察、待つ、今までどおり、など

その他:

意味不明な回答、あいまいでいろいろな意味にとれるもの

共同作業シナリオ

個人直接コントロール方略:

Sさんを注意する、直接話す、無理やり参加させる

個人間接コントロール方略:

さりげなく言う、来て欲しいことを態度や行為で暗に示す（自分がかんばって示す、作業に出ないことで示すなど）、参加させるために直接的じゃないがなんらかの行動をとるもの（コミュニケーションを図る、仲良くなる、おだてる、さしいれ、話をきく、相手に気を遣うなど）

代理コントロール方略:

誰かに頼んで S さんに言ってもらう、など

集団直接コントロール方略:

みんなで言うといった類のもの

集団間接コントロール方略:

さりげなくみんなで言う、個人間接コントロールの集団版（みんなで仲良くやる、雰囲気を作るなど）、みんなで相談する（相談した後にコントロールするかもしれないので）

二次的コントロール方略:

自分でやる系（自分でやる、手伝って一緒にやる、がんばる）、感情の変化を伴う「あきらめる系」（我慢する、など）、S さんの参加以外の代替手段をとる（他のみんなでがんばる、代理を探す、無視する、など）

コントロールの放棄:

何もいわない、観察、待つ、今までどおり、など

その他:

意味不明な回答、あいまいでいろいろな意味にとれるもの

試験シナリオ

個人直接コントロール方略:

Tさんを注意する、直接話す

個人間接コントロール方略:

さりげなく言う、貸して欲しいことを態度や行為で暗に示す（自分がかんばって示すなど）、直接的じゃないがなんらかの行動をとるもの（コミュニケーションを図る、仲良くなる、やさしく接する、おだてる、さしいれ、話をきく、相手に気を遣うなど）

代理コントロール方略:

誰かに頼んでTさんに言ってもらう、など

集団直接コントロール方略:

みんなで言うといった類のもの

集団間接コントロール方略:

さりげなくみんなで言う、個人間接コントロールの集団版（みんな困っていることをそれとなく示す、など）、みんなで相談する（相談した後にコントロールするかもしれないので）

二次的コントロール方略:

自分でやる系（自分でやる、がんばる）、感情の変化を伴う「あきらめる系」（我慢する、八つ当たりする、など）、Tさんにノートを借りる以外の代替手段をとる（他の人に借りる、他のみんなでがんばる、ノートを借りないけど一緒にやる、無視する、など）

コントロールの放棄:

何もいわない、観察、待つ、今までどおり、など

その他:

意味不明な回答、あいまいでいろいろな意味にとれるもの

学園祭シナリオ

個人直接コントロール方略:

Yさんを注意する、直接話す、無理やり参加させる

個人間接コントロール方略:

さりげなく言う、やって欲しいことを態度や行為で暗に示す（自分がかんばって示すなど）、参加させるために直接的じゃないがなんらかの行動をとるもの（コミュニケーションを図る、仲良くなる、やさしく接する、おだてる、さしいれ、話をきく、相手に気を遣うなど）

代理コントロール方略:

誰かに頼んでYさんに言ってもらう、など

集団直接コントロール方略:

みんなで言うといった類のもの

集団間接コントロール方略:

さりげなくみんなで言う、集団間接コントロール方略の集団版（雰囲気づくり、など）、みんなで相談する（相談した後にコントロールするかもしれないので）

二次的コントロール方略:

自分でやる系（自分でやる、がんばる）、感情の変化を伴う「あきらめる系」（自分も怠ける、我慢する、八つ当たりする、など）、Yさんにやらせる以外の代替手段をとる（他のみんなでがんばる、無視する、など）

コントロールの放棄:

何もいわない、観察、待つ、今までどおり、など

その他:

意味不明な回答、あいまいでいろいろな意味にとれるもの

付録 3: 研究 2 で用いたシナリオと各コントロール方略

サークルシナリオ

《他者なし条件》

あなたはスポーツチームに所属しています。このスポーツはペアの連携が非常に重要です。あなたのペアに同期の N さんという人がいて、あなたと N さんはあまり親しい仲ではありません。 (親密性低条件) / あなたと N さんはかなり親しい仲です。 (親密性高条件) N さんは試合であまり活躍していませんが、N さんがもっとがんばって、さらに試合で勝ち続けて上位を目指せないものかと、あなたは検討しています。 (不満なし条件) / 最近、N さんは練習をよくさぼり、お互いの雰囲気
に悪い影響を与えています。そのため、他のペアとの試合でもあまり勝てなくなり、あなたは非常に困っています。 (不満あり条件)

《他者あり条件》

あなたはスポーツチームに所属しています。このスポーツはメンバー同士の連携が非常に重要です。同じチームに同期の N さんという人がいて、あなたと N さんはあまり親しい仲ではありません。 (親密性低条件) / あなたと N さんはかなり親しい仲です。 (親密性高条件) N さんは試合であまり活躍していませんが、N さんがもっとがんばって、さらに試合で勝ち続けて上位を目指せないものかと、あなたも他のメンバーもみな検討しています。 (不満なし条件) / 最近、N さんは練習をよくさぼり、チームの雰囲気に悪い影響を与えています。そのため、他のチームとの試合でもあまり勝てなくなり、あなたも他のメンバーもみな非常に困っています。
(不満あり条件)

個人直接コントロール方略:

Nさんにもっと練習に励んでほしいことをはっきりと意思表示して、こちらからそれを示すような行動をする。

個人間接コントロール方略:

自分の意思是表に出さず、さりげなく、Nさんにもっと練習に励んでほしいことを示す。

代理コントロール方略:

誰かに頼んでNさんがもっと練習に励むようにしてもらおう。

集団直接コントロール方略:

Nさんに、もっと練習に励むように、他の人と一緒に働きかける。

集団間接コントロール方略:

他の人と一緒に話題に出すなどして、さりげなく、Nさんにもっと練習に励んでほしいことを示す。

二次的コントロール方略:

Nさんに働きかけるのではなく、自分自身ががんばって、考え方や行動を変える。

共同作業シナリオ

《他者なし条件》

あなたは大学の授業で、ペアで作業をおこなっています。あなたのペアに S さんという人がいて、あなたと S さんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件）/あなたと S さんはかなり親しい仲です。（親密性高条件）S さんの仕事は作業の効率を上げるために重要なものです。今のところ作業は順調に進んでいますが、S さんがもっとがんばって、作業の効率をさらに上げることはできないのかと、あなたは検討しています。（不満なし条件）/最近、S さんが何かしらの理由をつけて、あまり共同作業に参加しようとしません。そのため作業が進まず、あなたの負担が大きくなるので、あなたは非常に困っています。（不満あり条件）

《他者あり条件》

あなたは大学の授業で共同作業をおこなっています。同じグループに S さんという人がいて、あなたと S さんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件）/あなたと S さんはかなり親しい仲です。（親密性高条件）S さんの仕事は作業の効率を上げるために重要なものです。今のところ作業は順調に進んでいますが、S さんがもっとがんばって、作業の効率をさらに上げることはできないのかと、あなたも他のメンバーもみな検討しています。（不満なし条件）/最近、S さんが何かしらの理由をつけて、あまり共同作業に参加しようとしません。そのため作業が進まず、他のメンバーの負担が大きくなるので、あなたも他のメンバーもみな非常に困っています。（不満あり条件）

個人直接コントロール方略:

S さんに共同作業をがんばってほしいことをはっきりと意思表示して、こちらからそれを示すような行動をする。

個人間接コントロール方略:

自分の意思は表に出さず、さりげなく、Sさんに共同作業をがんばってほしいことを示す。

代理コントロール方略:

誰かに頼んでSさんが共同作業をがんばるようにしてもらおう。

集団直接コントロール方略:

Sさんに、共同作業をがんばってもらうように、他の人と一緒に働きかける。

集団間接コントロール方略:

他の人と一緒に話題に出すなどして、さりげなく、Sさんに共同作業をがんばってほしいことを示す。

二次的コントロール方略:

Sさんに働きかけるのではなく、自分自身ががんばって、考え方や行動を変える。

試験シナリオ

《他者なし条件》

あなたは大学で授業を受けています。同じ授業を受けているTさんという人がいて、あなたとTさんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件）/あなたとTさんはかなり親しい仲です。（親密性高条件）最終試験が近づいてきましたが、あなたは今までに何度か授業を欠席していて、プリントやノートが全部揃っていません。そんな中、Tさんはすべての授業に出席していて、プリントやノートを全部

揃えています。今の状況でもがんばれば単位を取得することができそうですが、すべてのプリントやノートが揃えば、試験勉強は楽になります。そこで、Tさんからプリントやノートを借りられないものかと、あなたは検討しています。（不満なし条件） / 事前にTさんと、欠席した分のプリントやノートを共有する約束をしたのですが、Tさんはそれに気づかず、なかなか貸してくれません。そこで、Tさんからプリントやノートを借りられないものかと、あなたは非常に困っています。（不満あり条件）

《他者あり条件》

あなたは大学で授業を受けています。同じ授業を受けているTさんという人がいて、あなたとTさんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件） / あなたとTさんはかなり親しい仲です。（親密性高条件） 最終試験が近づいてきましたが、あなたも他の友達も今までに何度か授業を欠席していて、プリントやノートが全部揃っていません。そんな中、Tさんはすべての授業に出席していて、プリントやノートを全部揃えています。今の状況でもがんばれば単位を取得することができそうですが、すべてのプリントやノートが揃えば、試験勉強は楽になります。そこで、Tさんからプリントやノートを借りられないものかと、あなたも他の友達もみな検討しています。（不満なし条件） / 事前にTさんと、欠席した分のプリントやノートを共有する約束をしたのですが、Tさんはそれに気づかず、なかなか貸してくれません。そこで、Tさんからプリントやノートを借りられないものかと、あなたも他の友達もみな非常に困っています。（不満あり条件）

個人直接コントロール方略:

Tさんにプリントやノートを貸してほしいことをはっきりと意思表示して、こちらからそれを示すような行動をする。

個人間接コントロール方略:

自分の意思は表に出さず、さりげなく、Tさんにプリントやノートを貸してほしいことを示す。

代理コントロール方略:

誰かに頼んでTさんがプリントやノートを貸してくれるようにしてもらう。

集団直接コントロール方略:

Tさんに、プリントやノートを貸してくれるように、他の人と一緒に働きかける。

集団間接コントロール方略:

他の人と一緒に話題に出すなどして、さりげなく、Tさんにプリントやノートを貸してほしいことを示す。

二次的コントロール方略:

Tさんに働きかけるのではなく、自分自身ががんばって、考え方や行動を変える。

学園祭シナリオ

《他者なし条件》

あなたは大学の学園祭で、クラスのメンバーと一緒に屋台で食べ物を売っていて、二人で売り込みをしています。ペアで売り上げを競っていて、あなたのペアにYさんという人がいて、あなたとYさんはあまり親しい仲ではありません。（親密性

低条件) / あなたと Y さんはかなり親しい仲です。 (親密性高条件) 学園祭も終わりに近づき、まだ売れずに残っているものもありますが、すでに黒字は確定しています。 Y さんはとても客引きがうまいので、 Y さんにもっと客引きをがんばってもらい、さらに売り上げを伸ばせないものかと、あなたは検討しています。 (不満なし条件) / 学園祭も終わりに近づきましたが、まだ売れずに残っているものがあり、このままでは赤字になってしまいます。今、客引きがうまい Y さんが怠けているため、なかなか商品が売れず、あなたは非常に困っています。 (不満あり条件)

《他者あり条件》

あなたは大学の学園祭で、クラスのメンバーと一緒に屋台で食べ物を売っています。同じクラスに Y さんという人がいて、あなたと Y さんはあまり親しい仲ではありません。 (親密性低条件) / あなたと Y さんはかなり親しい仲です。 (親密性高条件) 学園祭も終わりに近づき、まだ売れずに残っているものもありますが、すでに黒字は確定しています。 Y さんはとても客引きがうまいので、 Y さんにもっと客引きをがんばってもらい、さらに売り上げを伸ばせないものかと、あなたも他のメンバーもみな検討しています。 (不満なし条件) / 学園祭も終わりに近づきましたが、まだ売れずに残っているものがあり、このままでは赤字になってしまいます。今、客引きがうまい Y さんが怠けているため、なかなか商品が売れず、あなたも他のメンバーもみな非常に困っています。 (不満あり条件)

個人直接コントロール方略:

Y さんに客引きをがんばってほしいことをはっきりと意思表示して、こちらからそれを示すような行動をする。

個人間接コントロール方略:

自分の意思は表に出さず、さりげなく、Yさんに客引きをがんばってほしいことを示す。

代理コントロール方略:

誰かに頼んでYさんが客引きをがんばるようにしてもらう。

集団直接コントロール方略:

Yさんに、客引きをがんばるように、他の人と一緒に働きかける。

集団間接コントロール方略:

他の人と一緒に話題に出すなどして、さりげなく、Yさんに客引きをがんばってほしいことを示す。

二次的コントロール方略:

Yさんに働きかけるのではなく、自分自身ががんばって、考え方や行動を変える。

ゲームシナリオ

《他者なし条件》

あなたは大学の寮に住んでいて、同じ寮に住むKさんとゲームを共同購入しました。あなたとKさんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件）/あなたとKさんはかなり親しい仲です。（親密性高条件）ゲームは一人用なので、二人で交替しながら使おうという条件で購入しました。今日はKさんが使う番なのですが、あなたは新しいソフトを買ってきたので、さっそく遊べないものかと、あなた

は検討しています。（不満なし条件）/ しかし、Kさんはゲームを毎日のように独占していて、あなたは非常に困っています。（不満あり条件）

《他者あり条件》

あなたは大学の寮に住んでいて、同じ寮に住む数人でゲームを共同購入しました。同じ寮に住む Kさんという人がいて、あなたと Kさんはあまり親しい仲ではありません。（親密性低条件）/ あなたと Kさんはかなり親しい仲です。（親密性高条件）ゲームは一人用なので、みんなで交替しながら使おうという条件で購入しました。今日は Kさんが使う番なのですが、あなたと他のメンバーは新しいソフトを買ってきたので、さっそく遊べないものかと、あなたも他のメンバーもみな検討しています。（不満なし条件）/ しかし、Kさんはゲームを毎日のように独占していて、あなたも他のメンバーもみな非常に困っています。（不満あり条件）

個人直接コントロール方略:

Kさんにゲームをやらせてほしいことをはっきりと意思表示して、こちらからそれを示すような行動をする。

個人間接コントロール方略:

自分の意思是表に出さず、さりげなく、Kさんにゲームをやらせてほしいことを示す。

代理コントロール方略:

誰かに頼んで Kさんがゲームをやらせてくれるようにしてもらう。

集団直接コントロール方略:

Kさんに、ゲームをやらせてくれるように、他の人と一緒に働きかける。

集団間接コントロール方略:

他の人と一緒に話題に出すなどして、さりげなく、Kさんにゲームをやらせてほしいことを示す。

二次的コントロール方略:

Kさんに働きかけるのではなく、自分自身がかんばって、考え方や行動を変える。

注: 各シナリオで1つ目は同じ問題を共有する他者がいない条件、2つ目は同じ問題を共有する他者がいる条件である。下線部分で条件を操作した。前半部は対象者との親密性、後半部は不満の有無である。

付録 4: 研究 3 で用いたシナリオと各コントロール方略

サークルシナリオ

あなたはあるスポーツチームに属しています。このスポーツはメンバー同士の連携が非常に重要であり、それが直接、試合の結果を左右します。ところが同じチームの N さんは最近練習をよくさぼり、チームの雰囲気悪い影響を与えており、あなたも他のメンバーも皆困っています。

個人直接コントロール方略:

N さんに練習に出るように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「久しぶり。最近チーム忙しいんだ」、「練習の人数が足りなくて困る時があるんだ」などと言って、さぼりがちで困っていることを N さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

チームの主将に N さんを注意するよう頼む。

集団直接コントロール方略:

チームの他のメンバーと一緒に、もっと練習に出るように N さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

チームのミーティングで、Nさんを交えて、練習への積極的な参加について話し合う。

共同作業シナリオ

あなたは授業で共同作業を行っています。しかし同じグループのSさんは、なにかしらの理由をつけて、あまり共同作業に参加しようとしません。そのため作業が進まず、他のメンバーの負担が大きくなるので、あなたも他のメンバーも皆困っています。

個人直接コントロール方略:

Sさんに作業に参加するように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「共同作業大変だよね」、「いつも他の用事が忙しいみたいだね」などと言って、困っていることをSさんにほのめかす。

代理コントロール方略:

先生などに、Sさんを注意してもらおうよう頼む。

集団直接コントロール方略:

グループのメンバーと一緒に共同作業に参加するようにSさんに伝える。

集団間接コントロール方略:

S さんを交えて、共同作業の前に共同作業の参加状況について話し合う。

騒音シナリオ

あなたは寮に住んでいます。毎晩、夜中になると隣の M さんの部屋から音楽がもれて聞こえてきます。音量が大きく目が覚めてしまうときもあり、あなたも他の部屋の住人も皆困っています。

個人直接コントロール方略:

M さんに音量を下げてもらうように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「遅くまで大変だね」、「音楽好きなんだね」などと言って、音量が大きくて困っている事を M さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

寮長や大家さんに、M さんを注意してもらうよう頼む。

集団直接コントロール方略:

他の部屋の住人と一緒に、音量を下げてもらうように M さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

M さんも出席する寮の集会で寮内のマナーについて話し合う。

フンシナリオ

あなたはアパートに住んでいます。近所に住んでいる H さんは毎日犬の散歩をしているのですが、犬があなたのアパートの玄関前で必ずするフンを片付けません。不快だけでなく、通行の邪魔にもなり、あなたもアパートの他の住民も皆困っています。

個人直接コントロール方略:

H さんにフンを片付けるように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「この前犬のフンを踏んでしまったんですよ」、「犬のフンの処理って大変ですよね」などと言って、犬のフンで困っている事を H さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

町内会の会長に、H さんを注意するよう頼む。

集団直接コントロール方略:

アパートの他の住民と一緒に、フンを片付けるように H さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

H さんも出席する町内会で、ペットの飼い方のマナーについて話し合う。

鳴き声シナリオ

あなたはアパートで一人暮らしをしています。その隣の T さんの家では、庭で犬を飼っています。その犬が深夜にうるさく吠えることがあり、あなたもアパートの他の住民も皆困っています。

個人直接コントロール方略:

T さんに犬をなんとかするように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「元気な犬ですね」、「いい番犬になりますね」などと言って、犬が夜中に吠えて困っていることを T さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

町内会長に、T さんを注意してもらおうよう頼む。

集団直接コントロール方略:

アパートの他の住民と一緒に犬の吠える声をなんとかするように T さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

T さんも出席する町内会で犬の飼い方のマナーについて話し合う。

ゴミシナリオ

あなたの隣の家に住んでいる K さんは、決められた場所・時間にゴミを捨てません。そのゴミは回収されないため、通行の邪魔になり、さらに、日が経つとにおいがするので、あなたも近所の住民も皆困っています。

個人直接コントロール方略:

K さんにゴミをちゃんと捨てるように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「今日って燃えるゴミの日でしたっけ」、「ゴミ捨て場遠くて大変ですよね」などと言って、ゴミのせいで困っていることを K さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

町内会の会長に、K さんを注意するよう頼む。

集団直接コントロール方略:

近所の住民と一緒にゴミをちゃんと捨てるように K さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

K さんも出席する集会でゴミ捨てのマナーについて話し合う。

文化祭シナリオ

もうすぐ大学の文化祭です。あなたのクラスでは焼きソバの屋台をやることが決定しています。店番や買い出しなどの役割分担を早く決めないといけないのですが、

文化祭委員の G さんが必要な情報を伝えず、クラスを仕切ろうとしないため、このままでは間に合いそうにありません。ですので、あなたもクラスの他のメンバーも皆困っています。

個人直接コントロール方略:

G さんに準備を進めるように、自分で直接注意する

個人間接コントロール方略:

「いつごろ店番とか決める?」、「締め切りいつごろ?」などと言って、準備が進んでいないことを G さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

文化祭委員長に、G さんを注意するよう頼む。

集団直接コントロール方略:

クラスの友達と一緒に、準備を進めてほしいと G さんに伝える。

集団間接コントロール方略:

G さんを含めクラス全員が揃っている時に、文化祭の準備について話し合う。

バイトシナリオ

あなたはウェイトレス／ウェイターのバイトをしています。同じ時間に仕事をしている同僚の Y さんが明らかに仕事の手を抜いています。そのために他の人の仕事が増え、あなたも他の同僚も皆困っています。

個人直接コントロール方略:

Y さんにしっかり働くように、自分で直接注意する。

個人間接コントロール方略:

「最近仕事多くて大変だよね」、「この時間って忙しいよね」などと言って、その人が手を抜いているという事を Y さんにほのめかす。

代理コントロール方略:

バイト先の店長に、Y さんを注意するよう頼む。

集団直接コントロール方略:

他の同僚と一緒に、Y さんにしっかり働くように伝える。

集団間接コントロール方略:

Y さんを含めたお店のミーティングで、仕事への取り組み方について話し合う。

付録5：研究4と研究6で用いたシナリオと各コントロール方略

就職試験シナリオ

最近、あなたは、ある企業の就職試験でプレゼンテーションを行いました。この企業は給料が高い、有給休暇が多いなど、社員への待遇がよく、あなたはこの企業で働きたいと考えています。あなたは万全の準備で臨みましたが、プレゼンテーションの間、自分のアイデアをうまく表現できず、プレゼンテーションは失敗に終わりました。

個人直接コントロール方略：

試験官に、プレゼンテーションをもう一度行わせてもらえるようにお願いする。

個人間接コントロール方略：

試験官に直接は言わないが、自分のプレゼンテーションの出来に不満があることをほのめかす。

代理コントロール方略：

この企業に勤めていて、自分を助けてくれそうな人を探し、プレゼンテーションをもう一度行わせてもらえるよう掛け合ってもらう。

集団コントロール方略：

同じような境遇にいる志望者を見つけ、彼らとともにプレゼンテーションをもう一度行わせてもらえるよう、試験官にお願いする。

自己改善を通じたコントロール方略:

別の企業の就職試験に備えて、プレゼンテーションの腕前を上げる努力をする。

二次的コントロール方略:

「良い経験だった」、「社会についてたくさん学ぶことができた」と自分に言い聞かせる。

ダンス (エアロビ) シナリオ

最近、あなたはダンス (エアロビクス) 教室に参加しました。あなたは、健康と体型の維持のために日頃の運動が大事だと感じており、いつかダンス (エアロビクス) を習ってみたいと考えていたので、とても良い運動の機会となりました。しかし、インストラクターの指導する振り付けが難しく、あなたはレッスンについていけないと感じました。

個人直接コントロール方略:

インストラクターに、振り付けが難しいので、少し簡単にしたいと直接お願いする。

個人間接コントロール方略:

振り付けが難しいことをレッスン中の態度や表情でほのめかす。

代理コントロール方略:

インストラクターの上司に振り付けが難しいことを話し、インストラクターに伝えてもらう。

集団コントロール方略:

他にも振り付けが難しいと感じている生徒を見つけ、インストラクターに振り付けを簡単にしてほしいと一緒にお願いします。

自己改善を通じたコントロール方略:

振り付けは難しいが、家で振り付けの練習をし、レッスンについていけるように一生懸命努力する。

二次的コントロール方略:

振り付けは難しいが、良い機会だと考え、レッスンをやめない。

文化祭参加シナリオ

あなたの所属する学生団体は、大学の文化祭への参加申し込みを行っています。文化祭への参加はとても魅力的なことです。それぞれの学生団体が提案する企画内容に対する評価によって、委員会に選ばれた団体しか文化祭に参加することができません。あなたの所属する学生団体の責任者は応募する企画内容について説明しましたが、あなたはその内容の全てには同意することができませんでした。そこで、部分的に修正を加えることで、委員会に対してより魅力的な提案を行うことができると確信しています。

個人直接コントロール方略:

その企画は改善する必要があり、自分にアイデアがあることを責任者に直接伝える。

個人間接コントロール方略:

「他の学生団体が素晴らしい企画を提出した」と責任者に伝えるなどして、企画を改善する必要があることをほのめかす。

代理コントロール方略:

以前の責任者をお願いして、企画を改善する必要があることを今回の責任者に伝えてもらう。

集団コントロール方略:

同じような意見を持つメンバーを見つけ、彼らとともに企画を改善する必要があることを責任者に伝える。

自己改善を通じたコントロール方略:

今回の文化祭の企画について悩むのをやめ、次の企画（来学期の文化祭など）のために、自分のアイデアに磨きをかける。

二次的コントロール方略:

「現在の企画のままでもきっと選ばれるだろう」と自分に言い聞かせる。

グループ課題シナリオ

あなたは、授業において、少人数のグループで課題を行っています。最近、あなたは全員で集まって課題を行うときに、同じグループの A さんがあまり仕事をしていないことに気付きました。その一人のために作業が滞り、他の全メンバーが迷惑しています。また、課題の進み具合に遅れが出ており、あなたの成績が悪くなる可能性があります。

個人直接コントロール方略:

A さんに、課題にもっと協力するようにはっきりと伝える。

個人間接コントロール方略:

A さんに、自分はその授業で良い成績をとる必要があることをほのめかす、あるいは、忙しくて課題に協力できないのかと尋ねる。

代理コントロール方略:

グループのリーダーにお願いして、A さんに対してもっと課題に協力するように伝えてもらう。

集団コントロール方略:

他のメンバーと一緒に、A さんに対して課題にもっと協力するよう伝える。

自己改善を通じたコントロール方略:

A さんが課題に協力してくれないことを気にせず、その課題がうまくいくように努力する。

二次的コントロール方略:

「Aさんが課題に協力しなくても課題はきつとうまくいくだろう」と自分に言い聞かせる。

寝不足シナリオ

あなたは大学の寮に住んでいます。最近、隣の住人が毎日深夜までギターを練習し始めました。その騒がしい音によって、あなたや他の住人は眠っている時に、時々目が覚めてしまうことがあります。そのため、十分な睡眠をとることができず、一日中疲れが取れません。

個人直接コントロール方略:

隣の住人に、「深夜に練習するのはやめてもらいたい」ということをはっきり伝える。

個人間接コントロール方略:

隣の住人に、例えば「最近ぐっすり寝付けない」ということを話すなどして、「深夜に練習するのはやめてもらいたい」ということをほのめかす。

代理コントロール方略:

寮の管理人にお願いして、「深夜に練習するのはやめてもらいたい」ということを隣の住人に伝えてもらう。

集団コントロール方略:

他の住人と一緒に、隣の住人に対して「深夜に練習するのはやめてもらいたい」と伝える。

自己改善を通じたコントロール方略:

耳栓をするなど、騒がしい音が気にならないように工夫して、よく眠れるようにする。

二次的コントロール方略:

隣の住人はそのうち練習をやめるだろう、と自分自身に言い聞かせる。

共有冷蔵庫シナリオ

あなたは大学の寮で他の住人達と1台の冷蔵庫を一緒に使っています。しかし、Aさんが最近大部分のスペースを使い始めました。そのため、あなたや他の住人は自分のスペースを全く確保することができません。だんだん暖かくなってきている時期であり、冷蔵庫に食べ物を入れておきたいと切実に思っていますが、いつ自分のスペースが確保できるかわかりません。

個人直接コントロール方略:

冷蔵庫を使う必要があるため、Aさんにスペースを空けてもらうよう直接お願いする。

個人間接コントロール方略:

Aさんに、冷蔵庫の容量が小さ過ぎることを話すなどして、スペースを空けてもらいたい事をほのめかす。

代理コントロール方略:

寮の管理人にお願いして、Aさんにスペースを空けるように伝えてもらう。

集団コントロール方略:

他の住人と一緒に、Aさんに対してスペースを空けてもらうようお願いする。

自己改善を通じたコントロール方略:

自分で小さな冷蔵庫を買うために節約し始める。

二次的コントロール方略:

食べ物を冷蔵庫に入れておかなくてもそれほど問題ではない、と自分に言い聞かせる。

付録6：研究5で用いたシナリオと各コントロール方略

文化祭参加シナリオ

あなたの所属する学生団体は、大学の文化祭への参加申し込みを行っています。文化祭への参加はとても魅力的なことです、それぞれの学生団体が提案する企画内容に対する評価によって、委員会に選ばれた団体しか文化祭に参加することができません。あなたの所属する学生団体の責任者はあなたととても仲がいいのですが、応募する企画内容の説明について、(親密性高条件) / あなたの所属する学生団体の責任者は応募する企画内容の説明について、(親密性無記述条件) あなたはその企画内容の全てには同意することができず、部分的に修正を加えることで、委員会に対してより魅力的な提案を行うことができると確信しています。

個人直接コントロール方略:

その企画は改善する必要がある、自分にアイデアがあることを責任者に伝える。

個人間接コントロール方略:

「他の団体が素晴らしい企画を提出したと聞いた」と伝えるなどして、企画内容を改善する必要があることを責任者にほのめかす。

代理コントロール方略:

自分と同じように企画内容を改善する必要があると思っている人に頼んで、改善する必要があることを責任者に伝えてもらう。

自己改善を通じたコントロール方略:

今回の文化祭の企画について悩むのをやめ、次の企画（来学期の文化祭など）のために、自分の考えに磨きをかける。

二次的コントロール方略:

「現在の企画のままでもきっと選ばれるだろう」と自分に言い聞かせる。

グループ課題シナリオ

あなたは、授業において、少人数のグループで行う課題を行っています。最近、あなたは、全員で集まって課題を行うときに、同じグループの一人があまり仕事をしていないことに気付きました。その人はあなたがグループ内でもっとも仲の良い人ですが、その一人のために作業が滞り、(親密性高条件) / その一人のために作業が滞り、(親密性無記述条件)他の全メンバーが迷惑しています。また、課題の進み具合に遅れが出ており、あなたの成績が悪くなる可能性があります。

個人直接コントロール方略:

そのメンバーに、課題にもっと協力するように直接伝える。

個人間接コントロール方略:

そのメンバー以外のグループのメンバーがたくさん仕事をしていることを話し、そのメンバーにももっと協力してほしいことをほのめかす。

代理コントロール方略:

グループの誰かに頼んで、そのメンバーにもっと協力するように伝えてもらう。

自己改善を通じたコントロール方略:

自分の能力の向上になると思って、そのメンバーの作業の分も自分がやる。

二次的コントロール方略:

「そのメンバーが課題に協力しなくても、課題はきつとうまくいくだらう」と自分に言い聞かせる。

寝不足シナリオ

あなたは大学の寮に住んでいます。最近、隣の住人が毎日深夜までギターを練習し始めました。その隣人はあなたのととても仲の良い親友なのですが、その騒がしい音によって、(親密性高条件) / その騒がしい音によって、(親密性無記述条件)あなたや別の住人は眠っている時に、時々目が覚めてしまうことがあります。そのため、十分な睡眠をとることができず、一日中疲れが取れません。

個人直接コントロール方略:

隣の住人に、「深夜には静かに練習してほしい」あるいは「深夜に練習するのはやめてほしい」と直接伝える。

個人間接コントロール方略:

隣の住人に「最近ぐっすり眠れない」などと話して、「深夜には静かに練習してほしい」あるいは「深夜に練習するのはやめてほしい」ということをほのめかす。

代理コントロール方略:

寮の管理人に頼んで、「深夜には静かに練習してほしい」あるいは「深夜に練習するのはやめてほしい」ということを隣の住人に伝えてもらう。

自己改善を通じたコントロール方略:

睡眠時間が短くなった分、勉強するなど有意義なことをその時間にしようとする。

二次的コントロール方略:

隣の住人もそのうち深夜の練習をやめるだろう、と自分自身を納得させる。

共有冷蔵庫シナリオ

あなたは大学の寮で他の住人達と1台の冷蔵庫を一緒に使っています。しかし、あなたと非常に仲の良い一人の住人が最近大部分のスペースを使い始めました。（親密性高条件）/しかし、一人の住人が最近大部分のスペースを使い始めました。（親密性無記述条件）そのため、あなたは自分のスペースを全く確保することができません。だんだん暖かくなってきている時期であり、冷蔵庫に食べ物を入れておきたいと切実に思っていますが、いつ自分のスペースが確保できるかわかりません。

個人直接コントロール方略:

スペースを使う必要があるため、その住人にスペースを空けてくれるよう、直接お願いする。

個人間接コントロール方略:

暖かくなってきたので冷蔵庫に食べ物を入れる人が増えるだろう、などと話してその住人にスペースを空けてほしいことをほのめかす。

代理コントロール方略:

寮の管理人に頼んで、その住人にスペースを空けるよう伝えてもらう。

自己改善を通じたコントロール方略:

自分で小さな冷蔵庫を買うために節約を始めるなどの解決策を見出す。

二次的コントロール方略:

食べ物を冷やしておかなくてもそれほど問題はないと考え、自分を納得させようとする。

注: 下線部分で相手との親密性を操作した。